東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4

東京大学本郷構内の遺跡

山上会館・御殿下記念館地点

第 2 分冊　御殿下記念館地点の調査

1990

東京大学埋蔵文化財調査室

第2分冊　目　　次

第2部　御殿下記念館地点の発掘調査

第1章　調査の経過……1

第2章　遺構……5

第1節　Ⅰ期……5

第2節　Ⅱ期……11

第3節　Ⅲ期……21

第4節　Ⅳ期……55

第5節　Ⅴ期……56

第6節　Ⅵ期……72

第7節　Ⅶ期……80

第8節　Ⅷ期……81

第9節　Ⅸ期……91

第3章　遺物……94

第1節　陶磁器類……94

1　総説……94

2　各論……98

(1)　磁器……98

(2)　陶器……102

(3)　擂鉢……113

(4)　焼塩壷……119

(5)　かわらけ……127

(6)　素焼灯明具・透明釉灯明具・陶器灯明具……134

(7)　焙烙……135

(8)　瓦質・土師質土器……140

(9)　舶載磁器……145

3　組成……149

4　明治時代の遺物……158

第2節　瓦類……476

第3節　金属製品……614

第4節　木製品……636

第5節　石製品……643

第6節　人形・玩具類……682

あとがき

写真図版

挿 図 目 次

第１図　御殿下記念館地点調査風景……2
第２図　気球による写真撮影準備風景……2
第３図　熱残留磁気測定サンプル採取……2
第４図　802号・845号・920号・972号遺構実測図……7
第５図　678号・618号遺構実測図……8
第６図　270号・309号・532号遺構実測図……10
第７図　572号遺構実測図……13
第８図　572号・635号・871号・276号遺構実測図……14
第９図　577号・732号・807号・543号・538号遺構実測図……16
第10図　805号・590号・192号遺構実測図……18
第11図　373号遺構実測図(1)……19
第12図　373号遺構実測図(2)……20
第13図　573号遺構実測図……23
第14図　573号・591号・295号遺構実測図……24
第15図　886号・244号遺構実測図……25
第16図　537号・231号遺構実測図……26
第17図　409号・384号遺構実測図……27
第18図　539号・444号・890号遺構実測図……28
第19図　700号・701号・468号・230号遺構実測図……29
第20図　292号・261号・262号・887号遺構実測図……30
第21図　902号・869号・259号遺構実測図……31
第22図　704号・677号・821号遺構実測図……32
第23図　464号・820号遺構実測図……33
第24図　626号・565号・517号遺構実測図……34
第25図　592号・515号遺構実測図……35
第26図　336号・621号遺構実測図……36
第27図　252号・241号遺構実測図……37
第28図　347号遺構実測図……38
第29図　917号・904号遺構実測図……39
第30図　953号・916号・1000号遺構実測図……40
第31図　187号・204号遺構実測図……41
第32図　324号・689号・610号・874号・544号・568号遺構実測図……44
第33図　419号・344号・524号・365号・264号・255a号遺構実測図……45
第34図　391号・64号・911号遺構実測図……46
第35図　395号遺構実測図(1)……57
第36図　395号遺構実測図(2)……58
第37号　101号遺構（旧期）実測図……59
第38図　Ⅴ期厩舎（南側）遺構実測図……60
第39図　254号・135号遺構実測図……61
第40図　275号・194号・162号遺構実測図……62
第41図　367号遺構実測図……63
第42図　188号・122号遺構実測図……64
第43図　101号遺構（新期）実測図……65
第44図　Ⅵ期厩舎（南側）遺構実測図(1)……66
第45図　Ⅵ期厩舎（南側）遺構実測図(2)……67
第46図　102号遺構実測図……68
第47図　125号・144号遺構実測図……69
第48図　477号・478号・281号・345号遺構実測図……76
第49図　211号・416号・245号・233号遺構実測図……77
第50図　11号遺構実測図……84
第51図　４号遺構実測図……85
第52図　42号・21号・16号遺構実測図……86
第53図　74号・１号・65号・75号・81号遺構実測図……87
第54図　49号遺構実測図……88
第55図　270号遺構出土陶磁器類(1)……168
第56図　270号遺構出土陶磁器類(2)……169
第57図　270号遺構出土陶磁器類(3)……170
第58図　270号遺構出土陶磁器類(4)……171
第59図　270号遺構出土陶磁器類(5)……172
第60図　309号遺構出土陶磁器類(1)……173
第61図　309号遺構出土陶磁器類(2)……174
第62図　309号遺構出土陶磁器類(3)……175
第63図　532号遺構出土陶磁器類(1)……176
第64図　532号遺構出土陶磁器類(2)……177
第65図　532号遺構出土陶磁器類(3)……178
第66図　532号遺構出土陶磁器類(4)……179
第67図　532号遺構出土陶磁器類(5)……180
第68図　532号遺構出土陶磁器類(6)……181
第69図　532号遺構出土陶磁器類(7)……182
第70図　532号遺構出土陶磁器類(8)……183
第71図　532号遺構出土陶磁器類(9)……184
第72図　532号遺構出土陶磁器類(10)……185
第73図　532号遺構出土陶磁器類(11)……186
第74図　532号遺構出土陶磁器類(12)……187
第75図　532号遺構出土陶磁器類(13)……188
第76図　532号遺構出土陶磁器類(14)……189

第77図　532号遺構出土陶磁器類(15)……190
第78図　532号遺構出土陶磁器類(16)……191
第79図　617号遺構出土陶磁器類(1)……192
第80図　617号遺構出土陶磁器類(2)……193
第81図　617号遺構出土陶磁器類(3)……194
第82図　617号遺構出土陶磁器類(4)……195
第83図　618号遺構出土陶磁器類(1)……196
第84図　618号遺構出土陶磁器類(2)……197
第85図　618号遺構出土陶磁器類(3)……198
第86図　618号遺構出土陶磁器類(4)……199
第87図　618号遺構出土陶磁器類(5)……200
第88図　618号遺構出土陶磁器類(6)……201
第89図　618号遺構出土陶磁器類(7)……202
第90図　678号遺構出土陶磁器類(1)……203
第91図　678号遺構出土陶磁器類(2)……204
第92図　678号遺構出土陶磁器類(3)……205
第93図　678号遺構出土陶磁器類(4)……206
第94図　678号遺構出土陶磁器類(5)……207
第95図　678号遺構出土陶磁器類(6)……208
第96図　678号遺構出土陶磁器類(7)……209
第97図　678号遺構出土陶磁器類(8)……210
第98図　678号遺構出土陶磁器類(9)……211
第99図　678号遺構出土陶磁器類(10)……212
第100図　678号遺構出土陶磁器類(11)……213
第101図　678号遺構出土陶磁器類(12)……214
第102図　678号遺構出土陶磁器類(13)……215
第103図　678号遺構出土陶磁器類(14)……216
第104図　678号遺構出土陶磁器類(15)……217
第105図　678号遺構出土陶磁器類(16)……218
第106図　678号遺構出土陶磁器類(17)……219
第107図　678号遺構出土陶磁器類(18)……220
第108図　678号遺構出土陶磁器類(19)……221
第109図　678号遺構出土陶磁器類(20)……222
第110図　678号遺構出土陶磁器類(21)……223
第111図　678号遺構出土陶磁器類(22)……224
第112図　678号遺構出土陶磁器類(23)……225
第113図　678号遺構出土陶磁器類(24)……226
第114図　678号遺構出土陶磁器類(25)……227
第115図　678号遺構出土陶磁器類(26)……228
第116図　678号遺構出土陶磁器類(27)……229
第117図　678号遺構出土陶磁器類(28)……230
第118図　678号遺構出土陶磁器類(29)255b号遺構出土陶磁器類……231
第119図　802号遺構出土陶磁器類(1)……232
第120図　802号遺構出土陶磁器類(2)……233
第121図　802号遺構出土陶磁器類(3)……234
第122図　802号遺構出土陶磁器類(4)……235
第123図　276号遺構出土陶磁器類(1)……236
第124図　276号遺構出土陶磁器類(2)……237
第125図　276号遺構出土陶磁器類(3)……238
第126図　276号遺構出土陶磁器類(4)……239
第127図　276号遺構出土陶磁器類(5)……240
第128図　276号遺構出土陶磁器類(6)……241
第129図　276号遺構出土陶磁器類(7)……242
第130図　276号遺構出土陶磁器類(8)……243
第131図　276号遺構出土陶磁器類(9)……244
第132図　252号遺構出土陶磁器類(1)……245
第133図　252号遺構出土陶磁器類(2)……246
第134図　252号遺構出土陶磁器類(3)……247
第135図　252号遺構出土陶磁器類(4)……248
第136図　252号遺構出土陶磁器類(5)……249
第137図　252号遺構出土陶磁器類(6)……250
第138図　255a号遺構出土陶磁器類(1)……251
第139図　255a号遺構出土陶磁器類(2)……252
第140図　255a号遺構出土陶磁器類(3)……253
第141図　255a号遺構出土陶磁器類(4)……254
第142図　255a号遺構出土陶磁器類(5)……255
第143図　271号遺構出土陶磁器類(1)……356
第144図　271号遺構出土陶磁器類(2)……257
第145図　271号遺構出土陶磁器類(3)……258
第146図　391号遺構出土陶磁器類(1)……259
第147図　391号遺構出土陶磁器類(2)……260
第148図　391号遺構出土陶磁器類(3)……261
第149図　391号遺構出土陶磁器類(4)……262
第150図　391号遺構出土陶磁器類(5)……263
第151図　391号遺構出土陶磁器類(6)……264
第152図　395号遺構出土陶磁器類(1)……265
第153図　395号遺構出土陶磁器類(2)……266
第154図　395号遺構出土陶磁器類(3)……267
第155図　395号遺構出土陶磁器類(4)……268
第156図　395号遺構出土陶磁器類(5)……269
第157図　537号遺構出土陶磁器類(1)……270
第158図　537号遺構出土陶磁器類(2)……271
第159図　537号遺構出土陶磁器類(3)……272
第160図　537号遺構出土陶磁器類(4)……273
第161図　537号遺構出土陶磁器類(5)……274
第162図　537号遺構出土陶磁器類(6)……275
第163図　537号遺構出土陶磁器類(7)……276
第164図　537号遺構出土陶磁器類(8)……277
第165図　537号遺構出土陶磁器類(9)……278

第166図　537号遺構出土陶磁器類⑽ ……279
第167図　537号遺構出土陶磁器類⑾ ……280
第168図　537号遺構出土陶磁器類⑿ ……281
第169図　537号遺構出土陶磁器類⒀ ……282
第170図　886号遺構出土陶磁器類(1) ……283
第171図　886号遺構出土陶磁器類(2) ……284
第172図　焼土溜り出土陶磁器類(1)……285
第173図　焼土溜り出土陶磁器類(2)……286
第174図　焼土溜り出土陶磁器類(3)……287
第175図　焼土溜り出土陶磁器類(4)……288
第176図　焼土溜り出土陶磁器類(5)……289
第177図　416号遺構出土陶磁器類(1) ……290
第178図　416号遺構出土陶磁器類(2) ……291
第179図　416号遺構出土陶磁器類(3) ……292
第180図　416号遺構出土陶磁器類(4) ……293
第181図　233号遺構出土陶磁器類(1) ……294
第182図　233号遺構出土陶磁器類(2) ……295
第183図　233号遺構出土陶磁器類(3) ……296
第184図　233号遺構出土陶磁器類(4) ……297
第185図　233号遺構出土陶磁器類(5) ……298
第186図　245号遺構出土陶磁器類(1) ……299
第187図　245号遺構出土陶磁器類(2) ……300
第188図　245号遺構出土陶磁器類(3) ……301
第189図　245号遺構出土陶磁器類(4) ……302
第190図　245号遺構出土陶磁器類(5) ……303
第191図　1号遺構出土陶磁器類(1)……304
第192図　1号遺構出土陶磁器類(2)……305
第193図　1号遺構出土陶磁器類(3)……306
第194図　1号遺構出土陶磁器類(4)……307
第195図　1号遺構出土陶磁器類(5)……308
第196図　1号遺構出土陶磁器類(6)……309
第197図　1号遺構出土陶磁器類(7)……310
第198図　1号遺構出土陶磁器類(8)……311
第199図　49号遺構出土陶磁器類(1)……312
第200図　49号遺構出土陶磁器類(2)……313
第201図　49号遺構出土陶磁器類(3)……314
第202図　遺構・包含層出土陶磁器類 1 ……315
第203図　遺構・包含層出土陶磁器類 2 ……316
第204図　遺構・包含層出土陶磁器類 3 ……317
第205図　遺構・包含層出土陶磁器類 4 ……318
第206図　遺構・包含層出土陶磁器類 5 ……319
第207図　遺構・包含層出土陶磁器類 6 ……320
第208図　遺構・包含層出土陶磁器類 7 ……321
第209図　遺構・包含層出土陶磁器類 8 ……322
第210図　遺構・包含層出土陶磁器類 9 ……323
第211図　遺構・包含層出土陶磁器類10……324
第212図　遺構・包含層出土陶磁器類11……325
第213図　遺構・包含層出土陶磁器類12……326
第214図　遺構・包含層出土陶磁器類13……327
第215図　遺構・包含層出土陶磁器類14……328
第216図　遺構・包含層出土陶磁器類15……329
第217図　遺構・包含層出土陶磁器類16……330
第218図　遺構・包含層出土陶磁器類17……331
第219図　遺構・包含層出土陶磁器類18……332
第220図　遺構・包含層出土陶磁器類19……333
第221図　遺構・包含層出土陶磁器類20……334
第222図　遺構・包含層出土陶磁器類21……335
第223図　遺構・包含層出土陶磁器類22……336
第224図　遺構・包含層出土陶磁器類23……337
第225図　遺構・包含層出土陶磁器類24……338
第226図　焼塩壷内面拓影図……339
第227図　かわらけ底部拓影図……340
第228図　瓦1期　軒丸瓦(1)……480
第229図　瓦1期　軒丸瓦(2)……481
第230図　瓦1期　軒丸瓦(3)……482
第231図　瓦1期　軒丸瓦(4)……483
第232図　瓦1期　軒丸瓦(5)……484
第233図　瓦1期　軒丸瓦(6)……485
第234図　瓦1期　軒丸瓦(7)……486
第235図　瓦1期　軒丸瓦(8)……487
第236図　瓦1期　軒丸瓦(9)　軒平瓦(1)……488
第237図　瓦1期　軒平瓦(2)……489
第238図　瓦1期　軒平瓦(3)……490
第239図　瓦1期　軒平瓦(4)……491
第240図　瓦1期　軒平瓦(5)……492
第241図　瓦1期　軒平瓦(6)……493
第242図　瓦1期　丸瓦(1)……494
第243図　瓦1期　丸瓦(2)……495
第244図　瓦1期　丸瓦(3)……496
第245図　瓦1期　丸瓦(4)……497
第246図　瓦1期　丸瓦(5)……498
第247図　瓦1期　丸瓦(6)……499
第248図　瓦1期　平瓦……500
第249図　瓦1期　熨斗瓦(1)……501
第250図　瓦1期　熨斗瓦(2)……502
第251図　瓦1期　熨斗瓦(3)……503
第252図　瓦1期　熨斗瓦(4)……504
第253図　瓦1期　熨斗瓦(5)……505
第254図　瓦1期　熨斗瓦(6)……506
第255図　瓦1期　熨斗瓦(7)……507

第256図　瓦１期　熨斗瓦(8)……508
第257図　瓦１期　熨斗瓦(9)……509
第258図　瓦１期　熨斗瓦(10)……510
第259図　瓦１期　熨斗瓦(11)……511
第260図　瓦１期　熨斗瓦(12)……512
第261図　瓦１期　熨斗瓦(13)……513
第262図　瓦１期　熨斗瓦(14)……514
第263図　瓦１期　道具瓦(1)……515
第264図　瓦１期　道具瓦(2)……516
第265図　瓦１期　道具瓦(3)……517
第266図　瓦１期　道具瓦(4)……518
第267図　瓦１期　谷丸瓦(1)……519
第268図　瓦１期　谷丸瓦(2)……520
第269図　瓦１期　谷平瓦(1)……521
第270図　瓦１期　谷平瓦(2)……522
第271図　瓦１期　塼(1)……523
第272図　瓦１期　塼(2)……524
第273図　瓦１期　塼(3)……525
第274図　瓦１期　塼(4)……526
第275図　瓦１期　海鼠瓦(1)……527
第276図　瓦１期　海鼠瓦(2)……528
第277図　瓦１期　海鼠瓦(3)……529
第278図　瓦１期　鬼瓦……530
第279図　瓦１期　金箔瓦(1)……531
第280図　瓦１期　金箔瓦(2)……532
第281図　瓦１期　金箔瓦(3)……533
第282図　瓦１期　軒丸・軒平瓦……534
第283図　瓦１期　丸瓦(1)……535
第284図　瓦１期　丸瓦(2)……536
第285図　瓦１期　丸瓦(3)　谷丸瓦……537
第286図　瓦１期　平瓦(1)……538
第287図　瓦１期　平瓦(2)……539
第288図　瓦２期　軒丸瓦(1)……540
第289図　瓦２期　軒丸瓦(2)……541
第290図　瓦２期　軒丸瓦(3)……542
第291図　瓦２期　軒丸瓦(4)……543
第292図　瓦２期　軒丸瓦(5)……544
第293図　瓦２期　軒平瓦(1)……545
第294図　瓦２期　軒平瓦(2)……546
第295図　瓦２期　丸瓦(1)……547
第296図　瓦２期　丸瓦(2)……548
第297図　瓦２期　丸瓦(3)……549
第298図　瓦２期　丸瓦(4)……550
第299図　瓦２期　丸瓦(5)……551
第300図　瓦２期　丸瓦(6)……552
第301図　瓦２期　丸瓦(7)……553
第302図　瓦２期　丸瓦(8)……554
第303図　瓦２期　丸瓦(9)……555
第304図　瓦２期　丸瓦(10)……556
第305図　瓦２期　丸瓦(11)……557
第306図　瓦２期　丸瓦(12)……558
第307図　瓦２期　丸瓦(13)……559
第308図　瓦２期　丸瓦(14)……560
第309図　瓦２期　丸瓦(15)……561
第310図　瓦２期　丸瓦(16)……562
第311図　瓦２期　丸瓦(17)……563
第312図　瓦２期　平瓦……564
第313図　瓦２期　熨斗瓦(1)……565
第314図　瓦２期　熨斗瓦(2)……566
第315図　瓦２期　熨斗瓦(3)……567
第316図　瓦２期　道具瓦(1)……568
第317図　瓦２期　道具瓦(2)……569
第318図　瓦２期　道具瓦(3)……570
第319図　瓦２期　道具瓦(4)……571
第320図　瓦２期　海鼠瓦……572
第321図　瓦２期　鬼瓦……573
第322図　瓦３期　軒丸瓦(1)……574
第323図　瓦３期　軒丸瓦(2)　軒平瓦……575
第324図　瓦３期　軒棧瓦(1)……576
第325図　瓦３期　軒棧瓦(2)……577
第326図　瓦３期　軒棧瓦(3)……578
第327図　瓦３期　軒棧瓦(4)……579
第328図　瓦３期　軒棧瓦(5)……580
第329図　瓦３期　軒棧瓦(6)……581
第330図　瓦３期　軒棧瓦(7)……582
第331図　瓦３期　軒棧瓦(8)……583
第332図　瓦３期　丸瓦(1)　熨斗瓦(1)……584
第333図　瓦３期　丸瓦(2)……585
第334図　瓦３期　丸瓦(3)……586
第335図　瓦３期　平瓦……587
第336図　瓦３期　棧瓦……588
第337図　瓦３期　熨斗瓦(2)……589
第338図　瓦３期　熨斗瓦(3)　道具瓦(1)……590
第339図　瓦３期　道具瓦(2)……591
第340図　瓦３期　切平瓦……592
第341図　瓦３期　海鼠瓦……593
第342図　瓦４期　軒丸瓦・軒棧瓦(1)……594
第343図　瓦４期　軒棧瓦(2)……595
第344図　瓦４期　軒棧瓦(3)……596
第345図　瓦４期　軒棧瓦(4)……597

第346図　瓦４期　軒棧瓦(5)……598
第347図　瓦４期　丸瓦(1)……599
第348図　瓦４期　丸瓦(2)……600
第349図　瓦４期　棧瓦(1)　熨斗瓦(1)……601
第350図　瓦４期　棧瓦(2)……602
第351図　瓦４期　熨斗瓦(2)……603
第352図　瓦４期　熨斗瓦(3)……604
第353図　瓦４期　熨斗瓦(4)……605
第354図　瓦４期　棟瓦(1)……606
第355図　瓦４期　棟瓦(2)　破風瓦(1)……607
第356図　瓦４期　海鼠瓦……608
第357図　瓦４期　鬼瓦……609
第358図　瓦５期　軒丸瓦・軒棧瓦(1)……610
第359図　瓦５期　軒棧瓦(2)　丸瓦(1)……611
第360図　瓦５期　丸瓦(2)……612
第361図　瓦５期　丸瓦(3)……613
第362図　金属製品(1)　キセル雁首……616
第363図　金属製品(2)　キセル雁首……617
第364図　金属製品(3)　キセル雁首及び吸口……618
第365図　金属製品(4)……621
第366図　金属製品(5)……622
第367図　金属製品(6)……623
第368図　金属製品(7)……624
第369図　金属製品(8)　古銭……626
第370図　金属製品(9)　古銭……627
第371図　金属製品(10)　古銭……628
第372図　金属製品(11)……633
第373図　金属製品(12)……634
第374図　金属製品(13)……635
第375図　金属製品(14)……635
第376図　木製品(1)……637
第377図　木製品(2)……638
第378図　木製品(3)……639
第379図　木製品(4)……640
第380図　木製品(5)……641
第381図　石製品（砥石１）……644
第382図　石製品（砥石２）……645
第383図　石製品（砥石３）……648
第384図　石製品（砥石４）……649
第385図　石製品（砥石５）……650
第386図　石製品（砥石６）……652
第387図　石製品（砥石７）……653
第388図　石製品（砥石８）……656
第389図　石製品（砥石９）……657
第390図　石製品（砥石10）……659
第391図　石製品（砥石11）……660
第392図　石製品（砥石12）……662
第393図　瓦転用砥石……664
第394図　石製品（硯１）……666
第395図　石製品（硯２）……667
第396図　石製品（硯３）……668
第397図　石製品・瓦製品……672
第398図　碁石・火打石・雲母板・小玉・サイコロ
……673
第399図　石製品（石臼）……675
第400図　人形・玩具類(1)……684
第401図　人形・玩具類(2)……685
第402図　人形・玩具類(3)……688
第403図　人形・玩具類(4)……689
第404図　人形・玩具類(5)……690
第405図　人形・玩具類(6)……691
第406図　人形・玩具類(7)……694
第407図　人形・玩具類(8)……695
第408図　人形・玩具類(9)……696
第409図　人形・玩具類(10)……697
第410図　人形・玩具類(11)……698

表　目　次

第１表　擂鉢生産地別集計表 ……115
第２表　擂鉢Ａ・Ｂ類Ｉ～Ⅲ期口縁部変遷表 …117
第３表　焼塩壷集計表 ……120
第４表　かわらけ集計表 ……127
第５表　焙烙Ａ・Ｂ類変遷表 ……137
第６表　瓦質・土師質土器組成表 ……141
第７表　舶載磁器器種別集計表 ……146
第８表　遺構別出土陶磁器類集計表 ……151
第９表　磁器器種別・生産地別集計表 ……152
第10表　陶器器種別・生産地別集計表 ……153
第11表　陶磁器器種別集計表 ……155
第12表　270号遺構出土陶磁器類観察表……341
第13表　309号遺構出土陶磁器類観察表……344
第14表　532号遺構出土陶磁器類観察表……346
第15表　617号遺構出土陶磁器類観察表……360
第16表　618号遺構出土陶磁器類観察表……364
第17表　678号遺構出土陶磁器類観察表……370
第18表　255b号遺構出土陶磁器類観察表 ……382
第19表　802号遺構出土陶磁器類観察表……382
第20表　276号遺構出土陶磁器類観察表……386
第21表　252号遺構出土陶磁器類観察表……394
第22表　255a号遺構出土陶磁器類観察表 ……397
第23表　271号遺構出土陶磁器類観察表……402
第24表　391号遺構出土陶磁器類観察表……403
第25表　395号遺構出土陶磁器類観察表……409
第26表　537号遺構出土陶磁器類観察表……414
第27表　886号遺構出土陶磁器類観察表……419
第28表　焼土溜り出土陶磁器類観察表 ……421
第29表　416号遺構出土陶磁器類観察表……422
第30表　233号遺構出土陶磁器類観察表……425
第31表　245号遺構出土陶磁器類観察表……430
第32表　１号遺構出土陶磁器類観察表 ……434
第33表　49号遺構出土陶磁器類観察表 ……437
第34表　遺構・包含層出土陶磁器類観察表 ……439
第35表　532号遺構出土舶載磁器観察表……456
第36表　678号遺構出土舶載磁器観察表……457
第37表　７号遺構出土陶磁器類観察表 ……458
第38表　２号遺構出土陶磁器類観察表 ……472
第39表　キセル一覧表 ……619
第40表　古銭一覧表(1) ……629
第41表　古銭一覧表(2) ……630
第42表　古銭一覧表(3) ……631
第43表　砥石観察表 ……677
第44表　各種石製品観察表 ……680
第45表　瓦製品その他観察表 ……681
第46表　ミニチァア人形他観察表 ……700

写 真 目 次

写真１　上；T・U16区南壁土層断面図　下；920号遺構
写真２　上；618号遺構　下；532号遺
写真３　678号遺構
写真４　678号遺構　遺物出土状況
写真５　上；572号遺構　下；同水路
写真６　上；577号遺構　下；538号遺構
写真７　上；373号遺構　下；同石組下根太痕
写真８　上；573号遺構　下；592号遺構
写真９　上；336号遺構　下；244号遺構
写真10　537号遺構
写真11　上；917号遺構　下；347号遺構
写真12　上；886号遺構　下；187号遺構
写真13　391号遺構
写真14　395号遺構
写真15　発掘調査区全景
写真16　左；206号遺構　右；289号遺構
写真17　上；V期厩舎（南側）遺構　下；V期101号遺構（旧期）
写真18　254号遺構
写真19　上；367号遺構　下；275号遺構
写真20　上；VI・VII期厩舎（南側）遺構　下；VI・VII期厩舎遺構
写真21　上；厩舎の間仕切りと便槽　下；273号遺構
写真22　120号遺構　上左；排水溜枡　右；水路末端　下；全景
写真23　VI・VII期101号遺構（新期）　上；全景　下；瓦落ち
写真24　125号遺構　上；暗渠の釘出土状況　下；溜枡の釘出土状況
写真25　上；478号遺構　下；281号遺構
写真26　梅之御殿全景(1)
写真27　梅之御殿全景(2)
写真28　梅之御殿全景(3)
写真29　梅之御殿全景(4)
写真30　上；礎石朱書　下；11号遺構礎石堀り方断面
写真31　上；４号遺構　下；74号遺構
写真32　上左；65号遺構　右；75号遺構　下；21号遺構
写真33　上；３号遺構　下；18号遺構と瓦溜り
写真34　上；IX期遺構群柱列　下；49号遺構
写真35　陶磁器類(1)　磁器１
写真36　陶磁器類(2)　磁器２
写真37　陶磁器類(3)　磁器３
写真38　陶磁器類(4)　磁器４
写真39　陶磁器類(5)　磁器５
写真40　陶磁器類(6)　磁器６
写真41　陶磁器類(7)　磁器７
写真42　陶磁器類(8)　磁器８
写真43　陶磁器類(9)　磁器９
写真44　陶磁器類(10)　磁器10
写真45　陶磁器類(11)　陶器１
写真46　陶磁器類(12)　陶器２
写真47　陶磁器類(13)　陶器３
写真48　陶磁器類(14)　陶器４
写真49　陶磁器類(15)　陶器５
写真50　陶磁器類(16)　陶器６
写真51　陶磁器類(17)　陶器７
写真52　陶磁器類(18)　擂鉢１
写真53　陶磁器類(19)　擂鉢２
写真54　陶磁器類(20)　擂鉢３
写真55　陶磁器類(21)　擂鉢４
写真56　陶磁器類(22)　擂鉢５
写真57　陶磁器類(23)　擂鉢６
写真58　陶磁器類(24)　焼塩壷１
写真59　陶磁器類(25)　焼塩壷２
写真60　陶磁器類(26)　焼塩壷３
写真61　陶磁器類(27)　焼塩壷４
写真62　陶磁器類(28)　かわらけ１
写真63　陶磁器類(29)　かわらけ２
写真64　陶磁器類(30)　かわらけ３
写真65　陶磁器類(31)　かわらけ４
写真66　陶磁器類(32)　焙烙１
写真67　陶磁器類(33)　焙烙２
写真68　陶磁器類(34)　焙烙３
写真69　陶磁器類(35)　瓦質・土師質土器１
写真70　陶磁器類(36)　瓦質・土師質土器２
写真71　陶磁器類(37)　瓦質・土師質土器３
写真72　陶磁器類(38)　瓦質・土師質土器４
写真73　陶磁器類(39)　532号遺構出土舶載磁器１
写真74　陶磁器類(40)　532号遺構出土舶載磁器２
写真75　陶磁器類(41)　678号遺構出土舶載磁器１
写真76　陶磁器類(42)　舶載磁器１
写真77　陶磁器類(43)　舶載磁器２

写真78　陶磁器類(44)　舶載磁器 3
写真79　陶磁器類(45)　7 号遺構出土陶磁器類 1
写真80　陶磁器類(46)　7 号遺構出土陶磁器類 2
写真81　陶磁器類(47)　7 号遺構出土陶磁器類 3
写真82　陶磁器類(48)　7 号遺構出土陶磁器類 4
写真83　陶磁器類(49)　7 号遺構出土陶磁器類 5
写真84　陶磁器類(50)　7 号遺構出土陶磁器類 6
写真85　陶磁器類(51)　7 号遺構出土陶磁器類 7
写真86　陶磁器類(52)　7 号遺構出土陶磁器類 8
写真87　陶磁器類(53)　7 号遺構出土陶磁器類 9
写真88　陶磁器類(54)　2 号遺構出土陶磁器類 1
写真89　陶磁器類(55)　2 号遺構出土陶磁器類 2
写真90　軒丸瓦(1)
写真91　軒丸瓦(2)
写真92　軒丸瓦(3)
写真93　軒丸瓦(4)
写真94　軒丸瓦(5)
写真95　軒丸瓦(6)
写真96　軒丸瓦(7)
写真97　軒丸瓦(8)
写真98　軒丸瓦(9)
写真99　軒平瓦(1)
写真100　軒平瓦(2)
写真101　軒平瓦(3)
写真102　軒平瓦(4)
写真103　軒平瓦(5)
写真104　軒平瓦(6)
写真105　軒平瓦(7)
写真106　軒平瓦(8)
写真107　軒平瓦(9)
写真108　軒平瓦(10)
写真109　軒平瓦(11)
写真110　軒平瓦(12)
写真111　軒平瓦(13)
写真112　軒平瓦(14)
写真113　軒平瓦(15)
写真114　軒平瓦(16)
写真115　軒平瓦(17)
写真116　軒桟瓦(1)
写真117　軒桟瓦(2)
写真118　軒桟瓦(3)
写真119　軒桟瓦(4)
写真120　軒桟瓦(5)
写真121　軒桟瓦(6)
写真122　軒桟瓦(7)
写真123　軒桟瓦(8)
写真124　軒桟瓦(9)
写真125　軒桟瓦(10)
写真126　軒桟瓦(11)
写真127　軒桟瓦(12)
写真128　軒桟瓦(13)
写真129　軒桟瓦(14)
写真130　軒桟瓦(15)
写真131　軒桟瓦(16)
写真132　軒桟瓦(17)　丸瓦（布目）
写真132　軒桟瓦(17)　丸瓦（布目）
写真133　丸瓦細部
写真134　金属製品(1)　キセル
写真135　金属製品(2)
写真136　金属製品(3)
写真137　石製品(1)
写真138　石製品(2)　砥石
写真139　石製品(3)　砥石・硯
写真140　石製品(4)　硯・碁石・石臼・その他の製品
写真141　人形・玩具類(1)
写真142　人形・玩具類(2)
写真143　人形・玩具類(3)
写真144　人形・玩具類(4)
写真145　人形・玩具類(5)
写真146　人形・玩具類(6)
写真147　人形・玩具類(7)
写真148　人形・玩具類(8)

第２部　御殿下記念館地点の発掘調査

第１章　発掘調査の経過

御殿下記念館地点の発掘調査は，1986年７月29日から1988年６月30日までのほぼ23箇月をかけて実施した。調査面積は約6000m²であった。

調査地の標高は約18mである。発掘調査に先立って調査地の中央および周縁部に試掘のトレンチをいれた。その結果ローム層まで1.8m～２m，黒色土は０～20cm程であった。現地表から60～70cmほどが明治以降のクラウンドの整地層で，それ以下が江戸時代の堆積である。

試掘トレンチの断面観察によって，数枚の焼土の堆積層および表面が硬く締まった面を観察することができた。また，一部で宝永期の火山灰と考えられる薄い堆積を確認している。

グラウンドは，明治以降大きな構造物が造られることが無かったため，江戸時代の堆積層がそのまま残っており，その意味では極めて良好な状況の遺跡であると言える。実際，発掘調査の結果「梅の御殿」をはじめとして，数多くの建築遺構を検出できた。

しかし，都市遺跡の通例として，堆積層の殆どすべてが人為的な整地層であり，さらにその整地が局部的な整地の繰り返しからなっている状態であった。このため，柱穴や礎石などが連続してならぶ場合は，比較的検出が容易であったが，個々の細々した遺構まで含めて，一時期の生活面として理解するのは困難を極めた。

並行して行われた文献･絵図の調査から（第３部第１章参照），この地点について数時期の建造物の様子を知ることが出来た。

まず元禄期の絵図を見ると，調査地に相当する部分に「頭分」「役所」「外局」等と記載された区画割りがあって，何らかの公的な建物が存在していたことが窺われる。

18世紀中葉から後葉の数枚の絵図ではこの地点がいずれも馬場およびそれに付随する馬屋や「飼料所」となっている。

19世紀初頭の享和二年にはここに「梅之御殿」とよばれた建物が建造される。さらに13代当主の斎泰が，将軍家から溶姫を迎えるとこの場所は再び馬場に戻されている。

この絵図による知見を参考にしながら調査を進め，調査地全域で８時期の生活面を確認する

ことができた(第2章遺構参照)。ただし，調査地全域が，一度に模様変えするような画期は数時期であって，部分的な建物等の建て替えを度々行っていることが確認されている。

梅の御殿（Ⅷ期）

幕末の「米倉」の礎石列を調査地北端で検出したが，全面に渉って検出した最初の遺構が「梅の御殿」である。

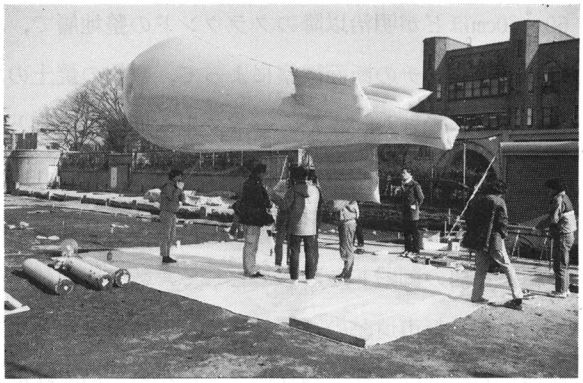
梅の御殿は，現在の御殿下グラウンドとほぼ重複する広大な建物で，1万数千平方mの敷地をゆうする。また，この建物は先々代および先代当主夫人の隠居所的な性格の物であったが，「表向き」と「奥向き」を「御錠口」で仕切る，武家の居宅としての格式を備えたものであった。

発掘地はグラウンドの北半部分であったが，これは丁度梅の御殿の「表向き」に相当する。

調査の結果，ほぼ全域に「表向き」部分の遺構が検出された。絵図に見える各部分の呼称でいえば，「御式台」「御台所」「部屋方」「土蔵」などで，礎石あるいはその掘り方が，指図と極めてよく一致する位置で確認された。

礎石は既に抜かれていたものが多かったが，完存するものでみると，2～3段の根固め石を重ね，あいだには粘土・砂利を充塡している。構造上，特に重量がかかると考えられる部位には巨大な切り石が据えられ，また，「大廊下」など比較的に上部構造が軽かったと考えられるところでは，基礎の造作は簡単なものであった。

第1図　御殿下記念館地点調査風景



第2図　気球による写真撮影準備風景

第3図　熱残留磁気測定サンプル採取

建物に付随する遺構として確認されたものには，井戸・排水路・厠などがある。

井戸は危険防止のため，底部までの調査は断念したが，「御台所」に設けられた井戸は梅の御殿の井戸のなかで最大のものであることなどから，安全に留意して底部まで調査した。この井戸は直径1.2m，高さ1.5mほどの桶を倒位に積み重ねたものである。上部は腐食が著しいため正確ではないが，9～10段ほど積み重ねたと考えられた。再下部の桶は接地部がノミ状に鋭らされており，設置したあと打ち込んで安定させたものと考えられた。また，良好に残存していた桶では，桶材の外面に墨で通し番号が付されているのが確認された。

排水路の残存状況は良くなかったが，一部残っていた部分では，切り石を組み合わせたしっかりとしたものであった。

遺物のなかで注目されるものとして「梅殿　福印　膳所」の墨書のある瀬戸・美濃系の鉢があり，また梅の御殿より後の時期のものであるが，再興九谷系の「民山窯」の赤絵上絵付の椀も出土している。

厩（IV～VII期）

梅の御殿の下層では，調査地北側を中心にして，厩とこれに関連する遺構群が検出された。厩は絵図によれば，頭初東西に二列に並び，焼失などのたびに増築されている。調査の結果もこれに良く符合し，少なくとも2～3回の建て替えを確認している。厩の単位は馬一頭にたいして約2m四方で，中央に便所が付設されている。これは解体修理がおこなわれた滋賀県の彦根城の厩と同一の構造である。

厩の東側で検出した「飼料所」も数回の建て替えを確認している。

基本的に絵図に描かれた構造と一致するものの，「二十疋立」と見える部分で，後世の撹乱が無いにもかかわらず，14頭分の部屋しか検出できないなど，今後の検討を要する問題も提起されている。

調査地北半で厩関係の遺構群が検出されたのに対応して，南半部分でも絵図に対応して厩と馬場を区画する門の跡，および路面などが検出されている。また，絵図でこの部分を「梅林」としているものがあるが，これに対応して植物の抜き取り跡が多数検出された。

出土遺物としては，「厩」の墨書のある椀が注目される。また馬を繋ぐのに使用されたと考えられる金具も出土している。

元禄年間（II期）

元禄年間に描かれた絵図が，調査地の状況を知ることのできる最古のものである。

絵図では道と区画線で5区に分けられているが，調査では，道に相当する部分で，良好な砂利敷きの面を検出した。また，区画線に相当する部分では，溝状の遺構を検出している。この溝の覆土中にほぼ1.8mおきに柱痕が認められ，その底部には楕円形の掘り込み認められた。こ

れは塀状のものと考えられるが，一部陸橋状に掘り残したり，門の施設かとも考えられる部分もある。

絵図では区画のなかの建物はあらわされていないが，一部で礎石列またはその抜き跡が検出されており，建物を復元できる可能性もある。

その他の遺構・遺物

その他の遺構のなかで比較的多く検出しているものに，地下式土坑・大形の土坑などがある。

地下式土坑は40基ほどを確認した。形状はさまざまで，平面形・階段の有無・壁の補強材の有無など，多くのタイプに分類することができよう。

地山の直上で，多くの大形の土坑を検出した。このうち最大のものは長辺約24m，短辺約13m，検出面からの深さ約6mという巨大な長方形の土坑である。南北に長く，南辺は階段状に造られている。他のものはこれよりはるかに小さく，平面形も多様であるが互いに壁を接するものの，相互に切り合うことが稀で，また屋根などの上部構造の痕跡が全く見られないという，共通した特徴を持つ。確証はないが，土取りの跡とも考えられよう。

遺物でもっとも多く出土したのは瓦である。江戸初期に用いられた金箔瓦・前田家の家紋である梅鉢をあらわした軒丸瓦・桟瓦や壁に用いられた瓦など多種多様である。

陶磁器も，有田・瀬戸美濃を中心に多数出土しており，17世紀代から幕末までの良好な資料となるものである。また，小数ではあるが古九谷系の磁器も出土している。

江戸時代以前の遺構として，平安時代の住居跡を2基検出した。また，遺物では先土器時代～古墳時代の石器・土器などが出土している。

第2章　遺　　構

東京大学本郷キャンパスは，その敷地の大部分が江戸時代の加賀藩上屋敷本郷邸にあたる。

発掘調査地点は，明治時代に東京大学が創設された時点から御殿下グラウンドとして利用されてきたために，江戸時代の遺構が良好な状態で保存されていた。調査では平均2mの厚さの江戸時代の整地層から，主なものとして19世紀の「梅の御殿」，18世紀の「坂下御厩」，17世紀元禄時代の建築遺構群の3遺構面を，細別段階では9期の遺構面を確認することができた（写真1）。それぞれの遺構面の措定は，絵図が存在する場合はそこに描かれた建物配置をもとにして設定し，絵図がない場合は遺構確認面である硬化面や焼土面をもとにして建築遺構の主軸方向や遺構の埋土の特徴などを参考にして設定した。

第1節　Ⅰ期（全体図1）

Ⅰ期の遺構配置は調査区内で3様相に区分される。これは主に地形的な要因によるものである。調査区東側は調査区設定軸から北北東に約15°傾いて配置された堀の基礎遺構と推定される柱穴列やその他の対応関係の把握できない柱穴列から構成される。この地区は西側の斜面から平坦面への傾斜の変換点にあたり，その平坦面の方向に沿って柱穴列などが配置されているものと考えられる。一方，調査区西側では，調査区設定軸から北北西に約15°傾いた多数の溝状遺構から構成される。この地区は心字池から流れ出る川に向かって傾斜した谷にあたり，調査区中央部と北西角の部分では2m以上の比高差がある。特に北西の傾斜した部分では旧表土に斑状褐鉄が観察されることから沢沼地になっていたものと推定される。このため，971・965号遺構等の排水溝と推定される素堀りの溝状遺構が集中しているものと考えられる。一方，調査区中央部には678・618・532号遺構等の巨大な土坑が数基配置されている。これらの土坑は長さ20m以上，幅5～10cm，深さ5～6mの規模をもつものである。このような巨大な土坑の性格については発掘資料に類例がなく，史料にも見当らないことから明確にはしえない。しかし，可能性があるものとして，この時期には藩邸の造営のために段丘縁辺部の開析谷を埋め立てて平坦地を拡張する造成工事が行なわれていると推測されることから，巨大土坑は埋め立て用の土砂を採取するために採土坑ではないかと想像される。また，Ⅰ期では532・309・802号遺構等の巨大・大形土坑に魚骨や貝殻などの自然遺物が大量に投棄されていることも注目される。

Ⅰ期の遺構配置に該当するような絵図は現在までのところまだ発見されていないため，遺構面の相対的な序列のなかでⅠ期の年代をもとめることにする。Ⅰ期の年代の下限に関しては2

期の年代の上限すなわち天和二年（1682年）の火災をやや遡る時期と推定される。一方，上限に関しては史料によると本郷地区に最初に加賀藩の下屋敷が造営されたのが元和二，三年頃（1616・17年）であるので17世紀初頭まで遡る可能性もある。しかし，Ⅰ期のなかでも比較的古く位置つけられる532号遺構から出土した陶磁器は，出土した陶磁器のなかでも最も古式で，その年代は1650年前後と推定される。また，硯に「正保…」銘のものがあることから，Ⅰ期の年代の上限は17世紀の中頃と考えられる。しかし，920号遺構に関してはこれよりもやや古くなる可能性が高いものと推定される。以上の事実から，Ⅰ期の年代はやや時間幅をもつものの1650～70年頃に収束するものと考えられる。

920号遺構（第４図，写真１）　調査区北東部をＬ字形に区画する溝状遺構。溝はＶ字溝でＸ―11区から北西に延び，Ｒ―９区で北東に折れＴ―３区まで確認されるが，さらに北東に延長してるらしく，理学部７号館地点でも形状や埋土が酷似した溝状遺構が同じ走行方向で確認されている。埋土には若干のスコリアを含んでおり，カワラケが検出されている。この溝状遺構は重複しているすべての遺構より古く，本調査で確認された最も古い近世の遺構である。

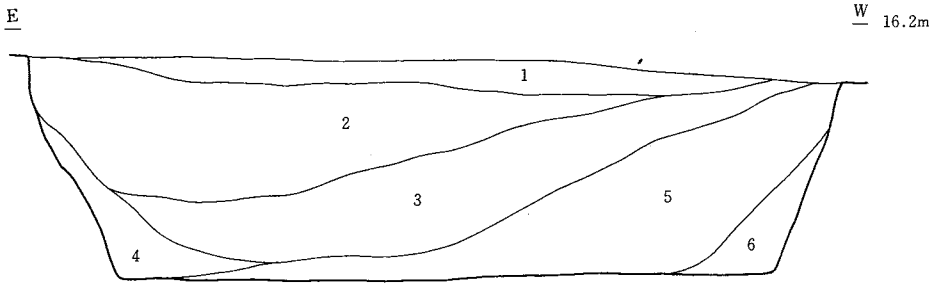
829・758号遺構　調査区東端部と南北に横切る柱穴列。柱穴は長軸を南北にとる758号遺構と東西にとる829号遺構が一間毎に交互に配列されている。この柱穴列は当時の地割りを示す塀の基礎と推定される。この西隣には同様の柱穴列である951号遺構などが位置している。

845号遺構（第４図）　調査区南東隅に位置する大形の溝状遺構。主軸はほぼ南北方向にとっているがＸ―11区で東側に折れている。北側では底面のしっかりしたＵ字状の断面形であるが，南側では細い溝状遺構と重複して複雑な形状を呈する。埋土中からは若干の自然遺物が出土している。

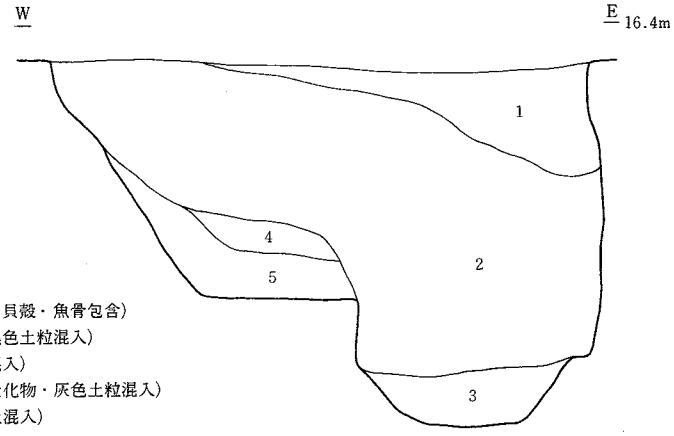
802号遺構（第４図）　調査区の南端Ｒ，Ｓ―15区に位置する大形土坑。調査区の境界にあるため半分しか堀り上げられなかったが，方形の土坑と推定される。埋土からは大量の陶磁器と魚骨を始めとする自然遺物が出土した。678号遺構の埋土の上に位置する。

270号遺構（第６図）　調査区の北端Ｒ，Ｓ―３・４区に位置する大形の土坑。不整形の土坑が数基重複しており複雑な形状を呈する。埋土中からは大量の陶磁器と瓦が出土した。

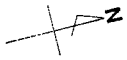
255b号遺構　調査区の北端Ｔ・Ｕ―３・４区，270号遺構の東隣に位置する大形土坑。埋土中か

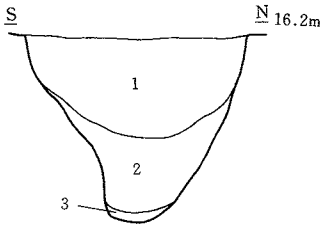


802号遺構
1 暗褐色土（ローム粒包含）
2 暗褐色土（ローム・灰色粘土粒混入）
3 暗褐色土（黒色土・灰色粘土粒混入）
4 暗褐色土（ローム粒混入）
5 暗褐色土（灰色粘土塊包含）
6 暗褐色土（炭化物・貝殻・魚骨包含）

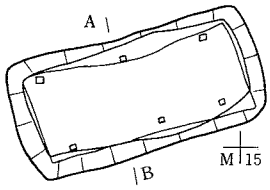


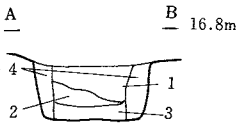
845号遺構
1 暗褐色土（ローム粒・貝殻・魚骨包含）
2 暗褐色土（ローム・黒色土粒混入）
3 暗褐色土（ローム粒混入）
4 暗褐色土（ローム・炭化物・灰色土粒混入）
5 暗黄褐色土（暗褐色土混入）



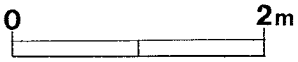


920号遺構
1 褐色土（黒色土・ローム粒混入）
2 褐色土（黒色土・暗褐色土・ローム粒混入）
3 暗黄褐色土（ローム・暗褐色土粒混入）

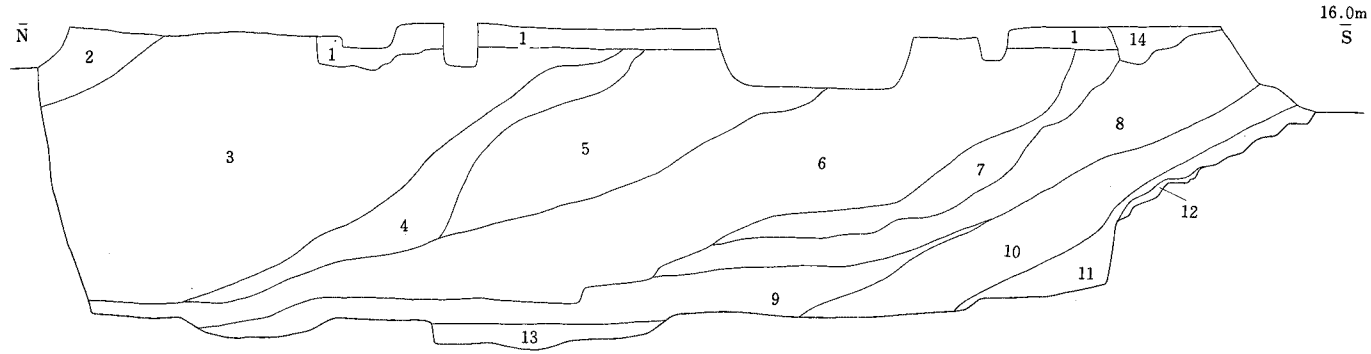




972号遺構
1 暗褐色土（炭化物・焼土粒混入）
2 赤褐色土（炭化物・焼土粒包含）
3 褐色土（砂混入）
4 褐色土（ローム・粘土粒混入）

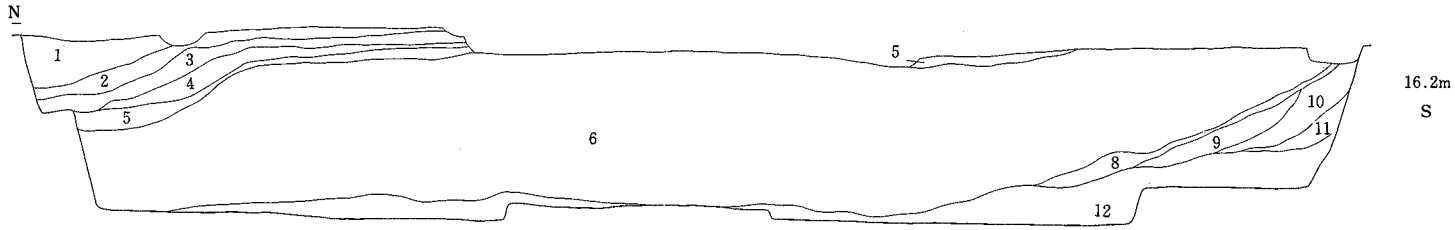


第4図　802号・845号・920号・972号遺構実測図



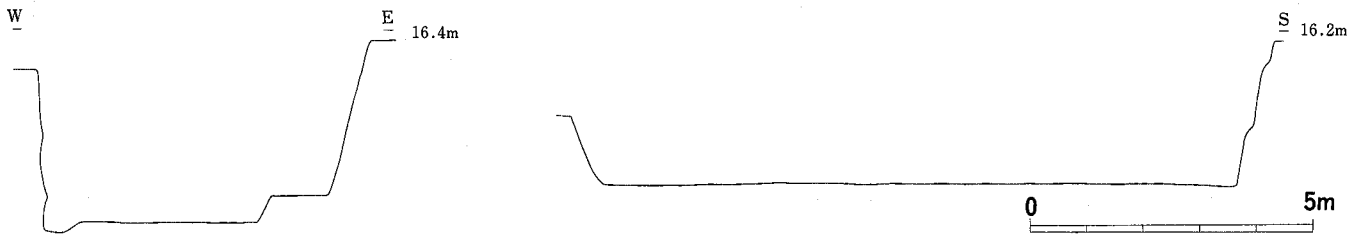
678号遺構

1 暗褐色土（黒色土・ローム粒混入）
2 暗黄褐色土（黒色土粒混入）
3 暗褐色土（黒褐色土・ローム粒混入）
4 褐色土（遺物多量に包含）
5 褐色土（灰色粘土塊・焼土粒混入）
6 暗褐色土（灰色粘土塊混入）
7 黒褐色土（ローム・灰色粘土粒混入）
8 暗褐色土（ローム粒混入）
9 灰色粘土（木製品包含）
10 8 と同一層相ながら薄い間層で分離される
11 黒褐色土（暗褐色土・ローム粒混入）
12 暗黄褐色土
13 灰色粘土（ローム粒混入）
14 褐色土（暗褐色土・ローム粒混入）



618号遺構

1 暗褐色土（ローム粒・黄褐砂混入）
2 暗褐色土（ローム・灰色粘土粒混入）
3 暗黄褐色土（ローム粒混入）
4 暗褐色土（ローム・黒色土粒混入）
5 暗褐色土（黒色土・炭化物混入）
6 暗褐色土（ローム塊・灰色粘土粒混入）
7 灰褐色土（灰色砂混入）
8 暗褐色土（ローム・灰色粘土粒・砂利混入）
9 暗褐色土（黒色土粒・ローム塊混入）
10 暗黄褐色土（暗褐色土粒混入）
11 暗褐色土（灰色粘土塊混入）
12 灰褐色土（ローム・灰色粘土塊混入）



第５図　678号遺構・618号構実測図

らは大量の陶磁器と瓦が出土した。

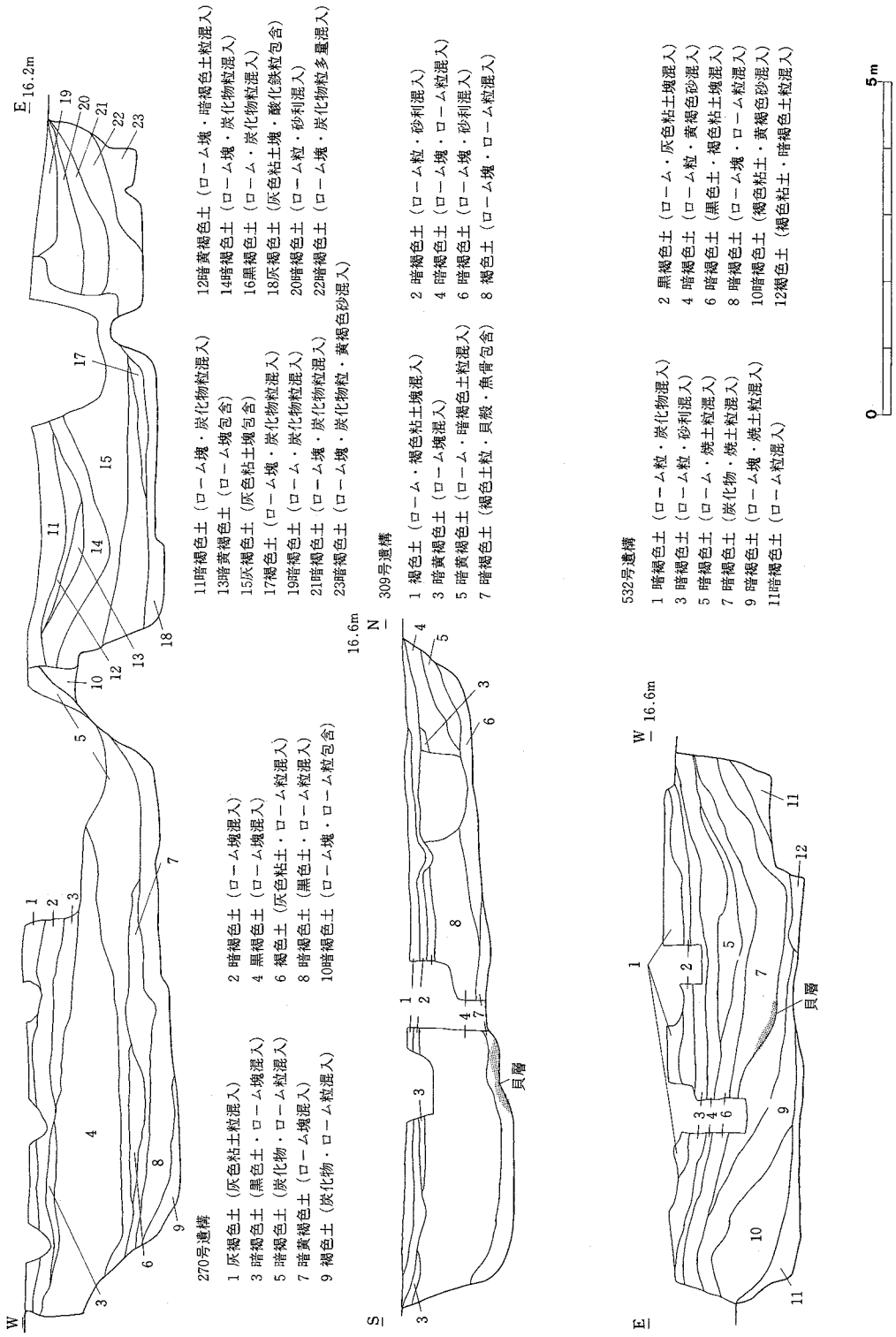
618号遺構(第5図，写真2)　調査区東南部に位置する巨大土坑。長さ約24m，幅7m，深さ5mの規模をもつ巨大な土坑で，長方形の平面形をもつ大形土坑が数基重複しているような形状を呈する。しかし埋没はほぼ同時と考えられ埋土の区別はできなかった。土層断面は南側から順次埋め立てられた様子を示しており層理は北側に傾斜している。埋土中からは大量の陶磁器と瓦が出土した。西端は678号遺構を破壊している。

678号遺構(第5図，写真3・4)　調査区南側中央に位置する巨大土坑。長さ25m以上，幅10m，深さ6mの規模をもつ巨大な土坑である。発掘では南側が調査区の境界にあたるため全形を確認することはできなかったが，長方形の平面形をもち南側には階段が付設された構造である。南側の階段は約7m幅の階段とその横にスロープ状の幅1mの階段がさらに付設されている。階段の段は素堀りで板の跡や杭穴等は存在しない。土坑底面には浅い皿状の窪みが数基確認されるがほぼ平坦である。土坑は武蔵野ロームを深く堀り込んでおり基底礫層の直上を底面としている。土坑の埋土は南側から順次埋め立てられたことが土層断面の観察から明らかになっている。埋土最下部は泥炭化した土壌が堆積しており，箒を始めとする大量の木製品が出土した。一方，埋土の中位では陶磁器や瓦が大量に出土している。

309号遺構(第6図)　調査区中央，678号遺構と532号遺構にはさまれた場所に位置する細長い大形土坑。隅丸長方形の平面形をもち，長軸方向の断面は舟形を呈する土坑で，底面は南向きに緩く傾斜している。埋土からは陶磁器が大量に出土している他，最下部では魚骨をはじめとする自然遺物が大量に出土した。

532号遺構(第6図，写真2)　調査区南側中央に位置する巨大土坑。南側が調査区の境界にあたるため全形を確認することはできなかったが，長さ20m以上，幅約8m，深さ5m以上の巨大な土坑である。長方形の平面形をもち，底面は北側は平坦な作りであるが中央から南側は大きく摺り鉢状に落ち込んでいる。また摺り鉢状に落ち込む境界の部分には杭穴が確認される。埋土下部からは大量の陶磁器，瓦，鞴の羽口や魚骨を始めとする自然遺物が出土した。

972号遺構(第4図)　調査区南端のM—14区に位置する木枠組土坑。長さ約2m，幅1mの長方形の掘り方の内部に6本の杭穴が確認されている。板材を用いた木枠の痕跡が確認されることから，杭で木枠を支える構造と考えられる。埋土からは焼土が検出されている。



第6図　270号・309号・532号遺構実測図

971・969・965・962・822号遺構　いずれも調査区西端を南北に横切る溝状遺構である。溝状遺構は断面U字形で，底面に砂が堆積している部分が確認されるので排水溝と推定される。溝状遺構の走行方向は埋没谷の主軸方向に一致している。なお，971号遺構は山上会館地区の101号遺構に接続するものと考えられる。

1017号遺構　調査区中央の道状遺構。H－6区からR－11区まで直線的続いているのが確認される。遺構は旧表土上面がU字状に窪んで硬化したものが線状に確認される。道状遺構は2本並列して轍状になったり，1本に合流したり，複数が錯綜して並んだ部分等がみられる。

この他に調査区の西端部では斜面に砂利敷きの部分が確認されている(網カケ部)。これは土留めを目的とするものと推定される。K－13区では砂利面上に轍状の痕跡が確認されている。

第2節　II期（全体図2）

II期の遺構群は3棟の建築遺構と塀の基礎遺構および石積みの地割り溝の遺構等から構成される。これらの建築遺構の主軸は調査区設定軸から約15°北北東の方向にずれているのが特徴である。建築遺構は調査区北東角の573号遺構，南東角の577号遺構，南端の311号遺構が検出されている。いずれも礎石などの基礎遺構や周囲の溝跡などがよく保存されている。これらの柱配置はいずれも六尺を一間とする田舎間である。これらの建築遺構のうち，573号遺構は最も遺存状態がよく建物に付属する井戸，排水溝，木組方形土坑，便所等が検出されている。577号遺構も付属する井戸や排水溝などが確認される。また，特殊な遺構として577号遺構の北側に位置する538号遺構がある。これは板状のものを杭で固定して方形に囲んだものと推定され，板囲い遺構と仮称することにする。また，調査区南端に位置する311号の建築遺構では遺構上面が薄く焼土で覆われていることが注意される。一方，調査区中央を鍵形に区画する石組溝の373号遺構は，東側では調査区設定軸に対して斜めに延びているが西側では調査区設定軸と一致している。このことから，373号遺構の区画はIII期の遺構配置に取り込まれている可能性が高いと推定される。また，出土遺物で注目されるのは267号遺構である。この遺構からは大量の陶磁器とともに魚骨や鳥骨等の自然遺物が多量に出土している。

このような遺構群の分布域は調査区東端部に限定される。これはI期の遺構配置にみられるように本郷邸が上屋敷となる以前は建築用地の造成が大規模には行なわれておらず，調査区の西側は旧地形をとどめて，心字地から流れでる川に沿って北西の方向へ傾斜する谷地形となっており，建物はより平坦な東側に集中していたものと考えられる。また，II期の建築遺構が主軸を調査区設定軸から北北東の方向にずらしているが，これも当時の地形の平坦面の方向に沿った配置と推定される。

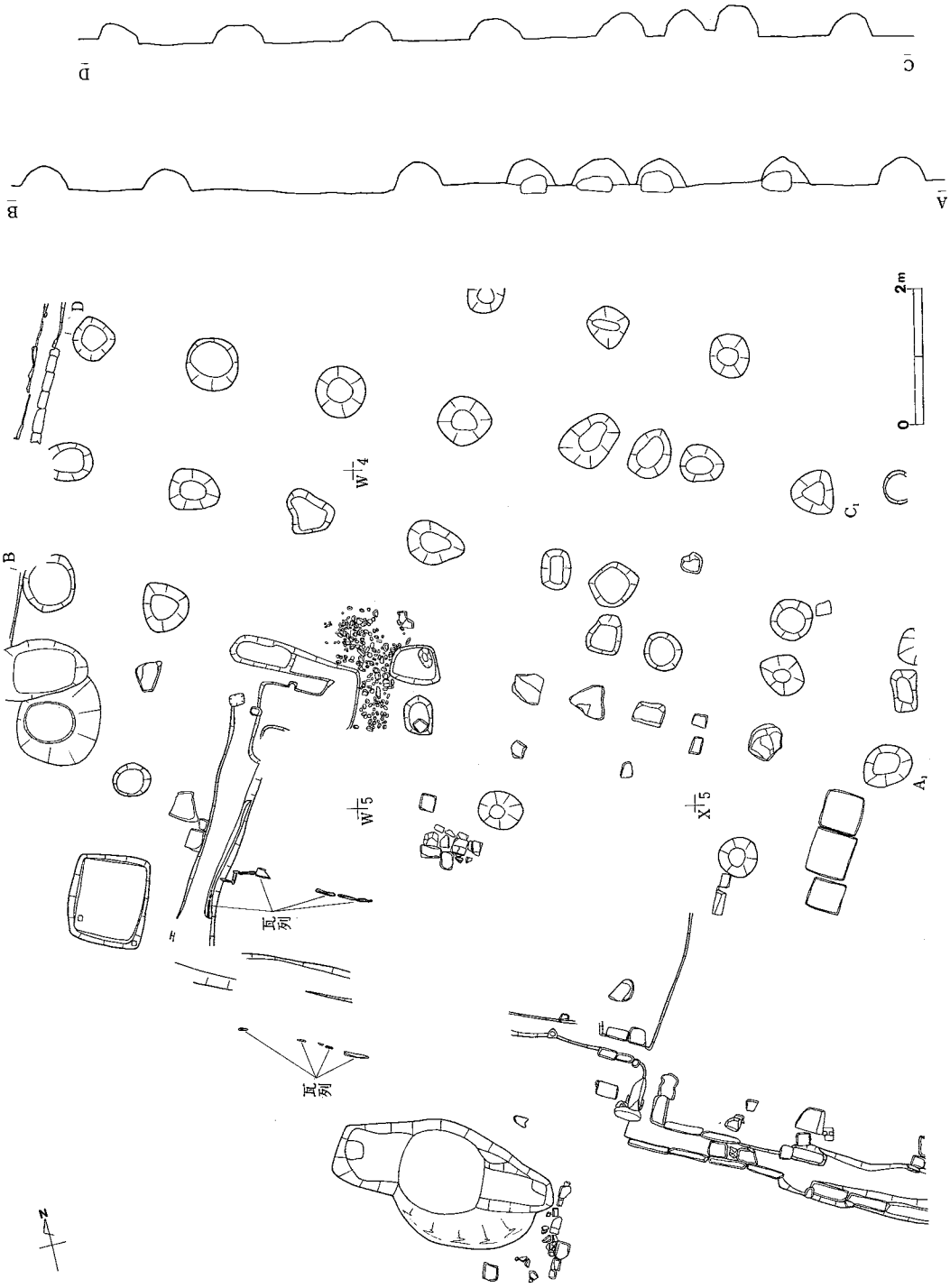
上記のような遺構配置に合致する絵図は現在までのところ発見されておらず，絵図等からの年代の措定は困難といわざるをえない。しかし，遺構配置の検討からはIII期に一部類似していることから，III期の上限年代である元禄元年（1688年）に近時した年代が想定される。そこで年代をさらにしぼりこむために，発掘調査によって311号遺構で確認された焼土の存在に注目したい。『加賀藩史料』によると，「天和二年（1683年）十二月廿八日本郷邸類焼し，綱紀及び公女等駒込邸に仮屋を構へて之に移る。」とあることから，311号遺構で確認された焼土は，この時の火災によって形成された可能性が高いと考えられる。したがって，天和二年がII期の下限年代として設定される。一方，上限年代に関しては，遺構出土の陶磁器の年代等から天和二年の火災の年代を大きく遡る可能性は少ないものと推定される。したがって，II期の年代は17世紀後半の1680年前後に収束するものと考えられる。

572号遺構（第７・８図，写真５）　調査区北東角に位置する建築遺構。建築遺構は礎石とその掘り方および建物周囲の付属施設から構成される。基礎遺構の配置は一間（六尺）間隔で配列されているが，中央部では半間間隔で配列されている部分もある。石材が転用されるため礎石の遺存状態は悪く，建物中央部に若干残るだけである。礎石を据える掘り方は直径50cmほどの円形の皿状でローム質の土と砂を含む褐色土を相互に積み重ねた堅固な作りである。建物は調査区の端にあるため全体の大きさは不明であるが，確認された部分だけで東西七間南北四間の規模をもつ。建物の西側には瓦葺きの溝状遺構がある。瓦は西側が特殊平瓦を東側は丸瓦を葺いている。また，南西角の部分には木枠組土坑（871号遺構）と円形土坑（653号遺構）がある。さらに，建物遺構の南端には井戸(634号遺構)が位置し，建物との間には石葺きの溝状遺構(619号遺構）が鍵形に屈曲しながら配置されている。

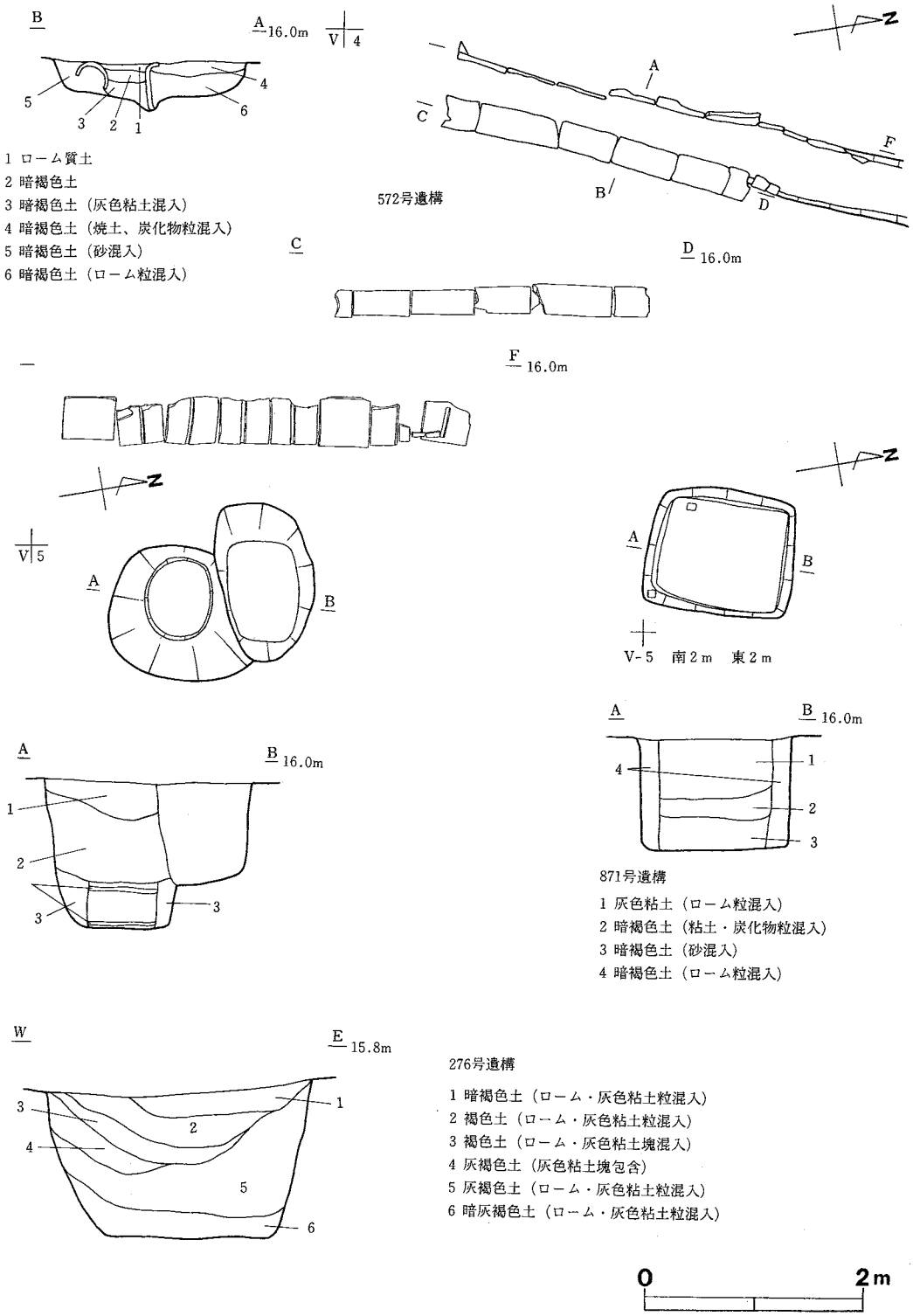
871号遺構（第８図）　Ｖ－５区，572号の建物遺構に隣接する木枠組土坑。方形の掘り方の内部に板材を正方形に近い形状に組んだ木枠を据えている。掘り方と木枠内部の角の部分には杭の跡が確認される。

635号遺構（第８図）　Ｖ－４区，572号遺構に隣接した円形の土坑。円形の掘り方の内部に桶を据えた痕跡が確認される。土坑内部には灰色の粘性の強い土が堆積している。土坑の形状や埋土の特徴から，この土坑は便所の可能性が高いと考えられる。

577号遺構（第９図，写真６）　調査区南東端に位置する建築遺構。建築遺構は礎石などの基礎遺構と隣接する井戸と水路遺構から構成される。基礎遺構は一間（六尺）間隔で配列された礎



第７図　572号遺構実測図（水系高16.2m）



第8図　572号・635号・871号・276号遺構実測図

石が確認される。礎石の遺存状態は比較的良好である。建物の全体の形状は把握できなかったが確認された部分では東西六間南北二間の規模をもつ細長い建物と推定される。建物の北側には井戸（807号遺構）とそれを囲む溝状遺構（543号遺構），円形の大形土坑（732号遺構）が存在する。

732号遺構（第９図）　W—12区に位置する円形の大形土坑。円形の深い土坑で，807号遺構の井戸に隣接することから，掘りかけで放棄された井戸の可能性が高いと推定される。

807号遺構（第９図）　W—12区の井戸遺構。577号遺構に隣接しており，建物に付属する井戸と推定される。また543号の溝状遺構と重複しているため図示しなかったが，井戸の上部には釣瓶等を支える施設と推定される対向した柱穴が確認された。

543号遺構（第９図）　調査区東端の溝状遺構。807号遺構の井戸を囲み北西に延び，W—12区で北東方向に折れX—７区まで延びている。溝は掘り方に安山岩製の短冊状の切石を２段に積んで葺いている。溝は井戸に関連する排水溝と考えられる。

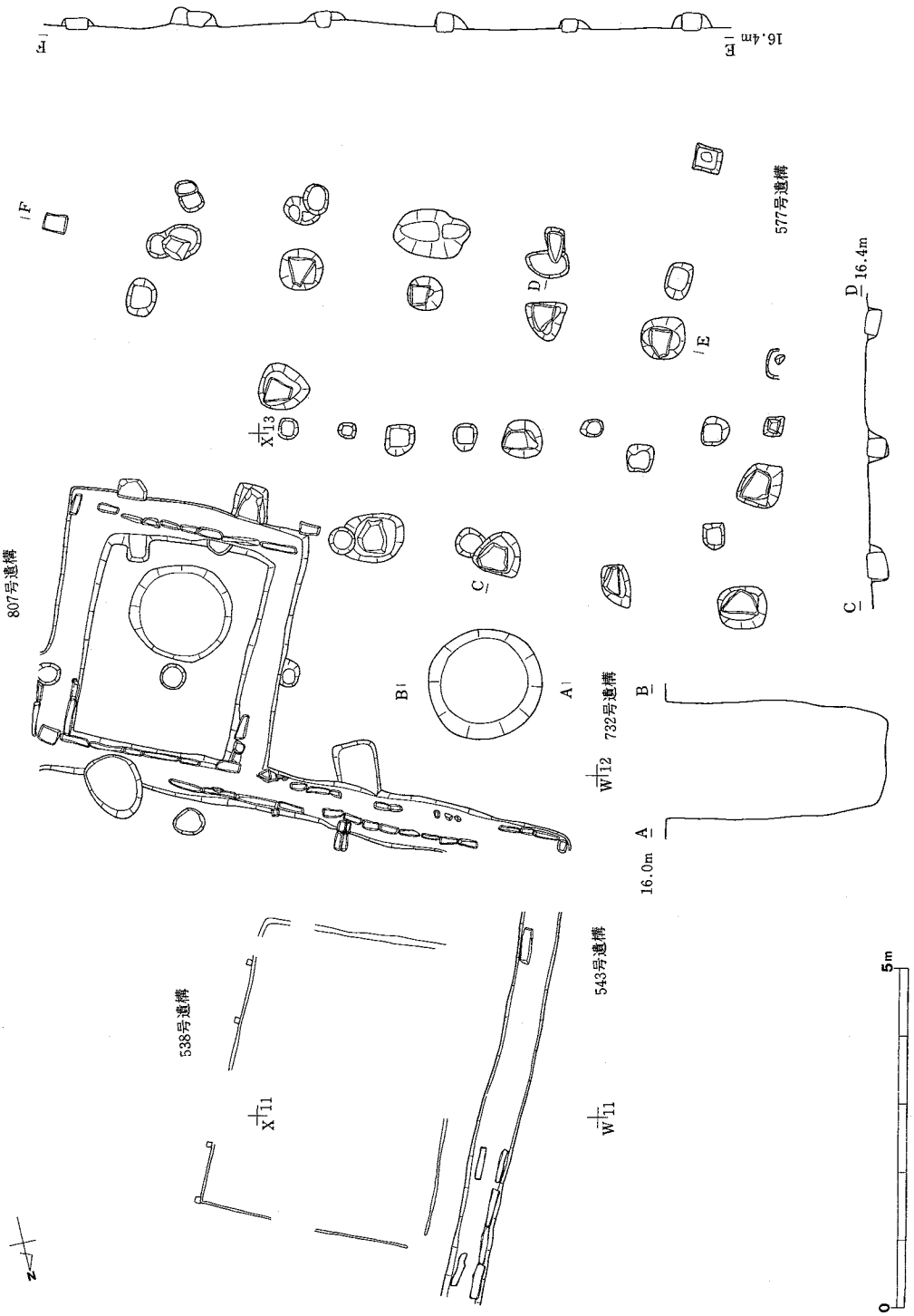
538号遺構（第９図，写真６）　543号の溝状遺構の東側に位置する板囲い遺構。東西二間南北３間の規模で細い溝状遺構が長方形に巡る遺構である。溝に接して杭の跡が部分的に確認されることから細い溝状の痕跡は板の跡でそれを杭で固定したものと推定される。

542号遺構　X—８区の円形の土坑。円形の掘り方の内部に桶が据えられていた痕跡が確認される。便所の遺構と推定される。

415号遺構　577号遺構の南側に位置する塀の基礎遺構。遺構は布掘りの溝状遺構と礎石をもつ基礎遺構が重複している。577号遺構に隣接する塀等の基礎遺構と推定される。

590号遺構（第10図）　X—14区の地下式土坑。415号遺構と373号遺構に挟まれた回廊状の部分に位置するが，土坑の主軸がII期の遺構配置に一致するためII期の遺構とした。正方形の平面形をもつ１類の地下式土坑である（地下式土坑の分類については，III期を参照）。

364号遺構　543号の溝状遺構に対向する位置にあり，543号遺構と道路状の空間を区画する柱穴列。柱穴は1.6m間隔で配列されており，塀の基礎遺構と考えられる。北端部では別の基礎遺構



第9図　577号・732号・807号・543号・538号遺構実測図

（470b号遺構）と重複している。

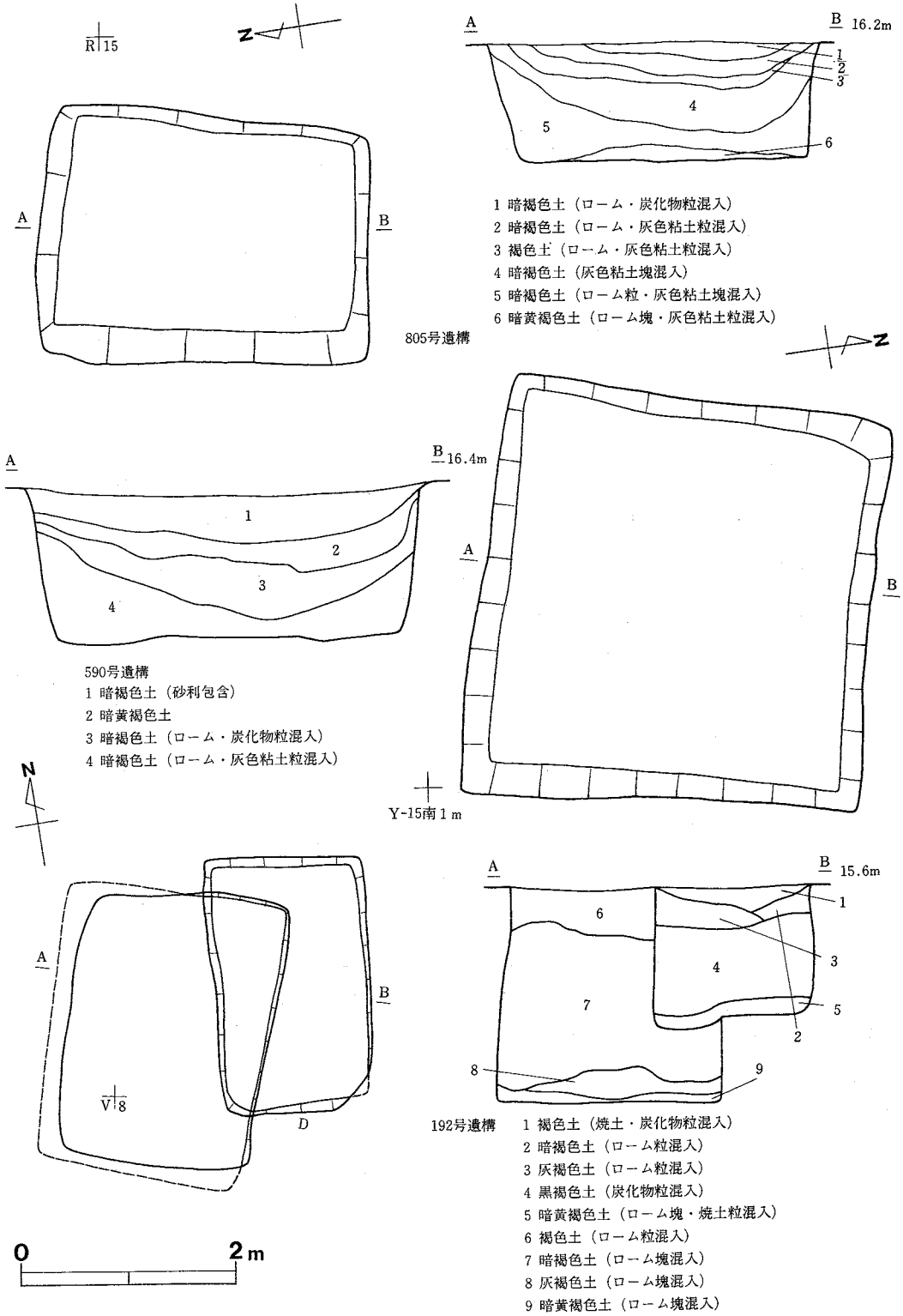
192a号遺構（第10図）　U－8区に位置する地下式土坑。長方形の平面形をもつ1類の地下式土坑である。II期の192a号遺構とIII期の192b号遺構は同一地点で主軸をやや変えただけで重複しており，両者の設営された時間幅があまり大きくないことを示しているものと考えられる。

276号遺構（第8図）　364号遺構の西隣に位置する長大な土坑。長さ12m幅3m深さ1.5mの規模で，不整の長方形の平面形をもつ。埋土からは大量の陶磁器や自然遺物が出土した。

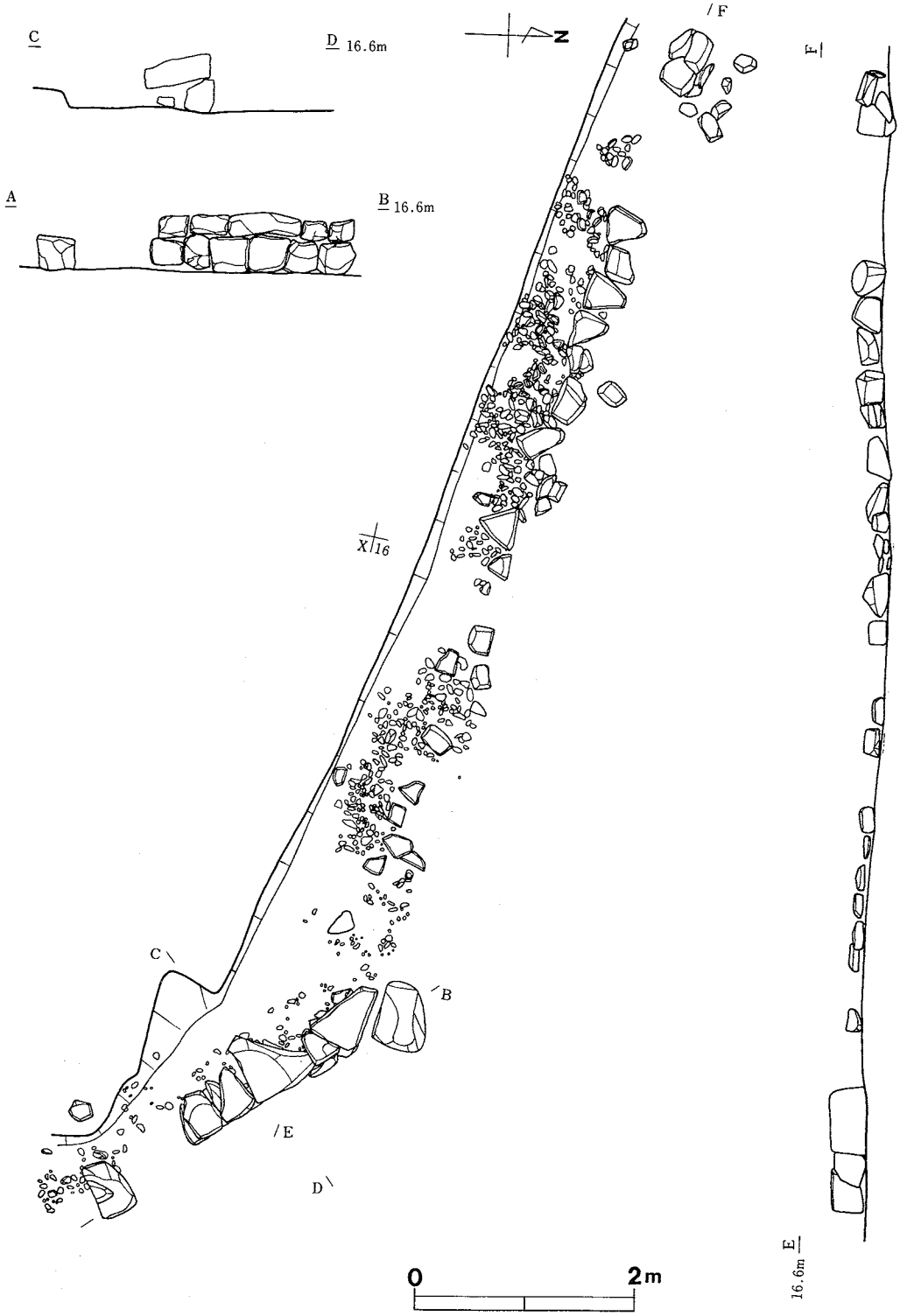
373号遺構（第11，12図，写真7）　調査区南東部を鍵形に区画する大規模な石葺の溝状遺構。調査区南東角から西北西方向に延びS－15区で北におれS－10区で西に方向をかえさらにM－10区で南に折れている。このように，調査区内を鍵状に区画しているが，調査区南東角からS－15区まではII期の遺構配置の主軸に一致しているものの，その他の部分ではIII期の遺構配置に一致し，地割りの基礎遺構と重複する部分もある。このことは，II期とIII期の時間差があまりなくIII期初頭の段階では373号遺構によって区画される地割りがそのまま利用された可能性が高いといえる。調査区南東角からS－15区までは石垣状の切石列がよく遺存している。石積みは確認されるだけで2段積みになっており，切石と掘り方の間には裏込めの栗石が充塡されている。その他の部分では切石は除去されており，溝状の掘り方と基礎地業の一部と考えられる砂利敷が確認されるだけである。また，R－10区では基礎工法のころがし根太の痕跡と推定される溝状遺構が確認された（写真7下）。

311号遺構　調査区の南端に位置する建築遺構である。全体図では遺構の重複をさけるためにIII期の図に編集されているが，建物の主軸の傾きがII期の遺構配置に一致しており，II期の遺構と考えられる。建物の基礎遺構は一間（六尺）および半間間隔で配列された礎石が検出されている。遺構は調査区の端に位置するため全体の規模は把握できないが，確認されるだけで東西六間半南北二間半の大きさを有する。建物遺構の北側には板組の溝状遺構が東西方向にはしっている。また，さらにその北には塀の基礎遺構と考えられる布掘り柱穴列（339号遺構）が存在する。また，この建築遺構に伴う地下式土坑としては西側に805号遺構がある。

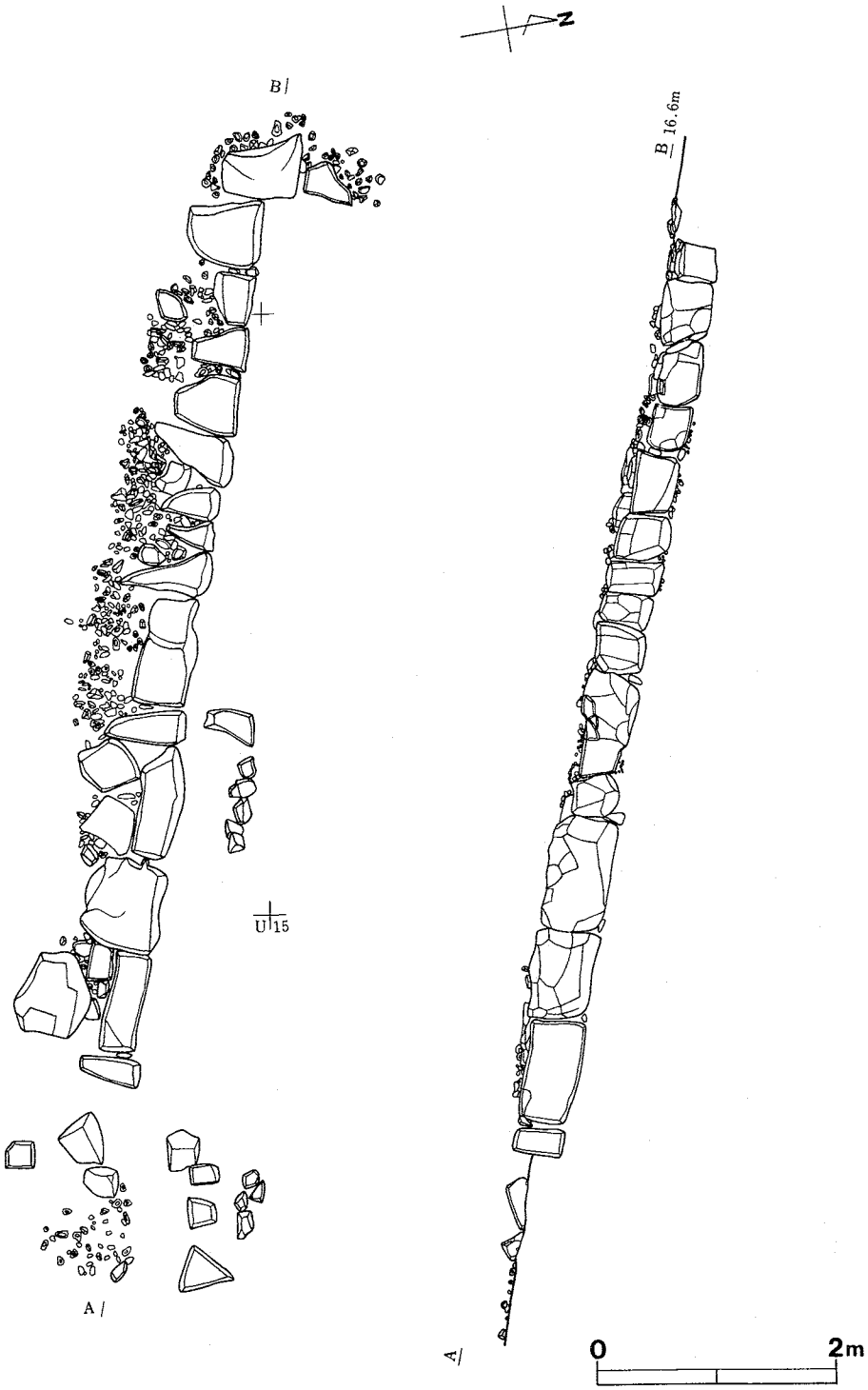
805号遺構（第10図）　Q－15区311号遺構の西に位置する地下式土坑。図面の重複をさけるためにIII期の全体図に含めているが，土坑の主軸は北北東に15°ほど傾いておりII期の遺構群に含まれ，隣接する311号の建物遺構にもとなうものと推定される。長方形の平面形をもつ1類の土坑



第10図　805号・590号・192号遺構実測図



第11図　373号遺構実測図(1)



第12図　373号遺構実測図(2)

である。

第3節　III期（全体図3）

III期は第2焼土面とした焼土で覆われた整地面で確認された遺構群から構成される。遺構群の配置は前段階のII期とは大きく異なり調査区設定軸と建築遺構の主軸が一致し調査区全面に広がっている。これは，前段階までは西側に浅い谷があったため遺構の配置が調査区の東側に限定されていたものが，天和三年（1683年）に上屋敷になってから，大規模な造成工事が行なわれ，西側の谷を埋め立てて育徳園の丘の縁まで平坦に整地されたためと考えられる。これは，III期の西縁部の遺構が絵図の「園地」との境界にそって分布している状況からも明らかである。また，谷の埋立過程は9ラインの土層断面（附図7）で粘土やローム質の土が交互に堆積している状況からも確認される。

III期の遺構群は調査区中央を南北に横切る2列の布掘り柱列（289号，834号遺構）にはさまれた砂利敷きの道状遺構と東西に延びる同様の道状遺構によって大きく3地区に分けられる。西側の地区は南北方向に長く延びる礎石や柱穴列等の基礎遺構とその間に配列された石積みの溝状遺構から構成される。また，育徳園との縁辺部には地下式土坑が多数配置されている。一方，調査区北東部は布掘り柱穴列（470号遺構）によって東西2区に区分される。東の区画には大きな建物跡（573号遺構）が存在する。建物遺構は雨落ち溝で囲まれた礎石と抜き跡から構成され，地下式土坑等の付属施設がともなっている。西の区画には堀立柱の建物跡が3棟確認され，建物の間の空間には地下式土坑が配列されている。調査区南東部はQ—11区に僅かに残る石積みの溝状遺構（165号遺構）によって東西に区分される。東には大きな建築遺構は確認されていないが，西には布堀の柱列や地下式土坑が確認されている。また，南には当時の地割りの南縁を区画する塀の基礎（466号遺構）が東西に走っている。また，調査区南西端には石積み溝（187号遺構）や2基の門跡（689・324号遺構）が存在し，当時の地割りの外縁部を形成していたものと推定される。一方，調査区の東端部は前段階の遺構群との重複が激しく明確な遺構の配置は確認されないが，前段階の地割りをそのまま取り入れている可能性もある。特に，II期の373号遺構の石組溝はIII期初頭まで残存し，調査区内を東西にのびる道状遺構を形成したものと推定される。この他に食料残滓の魚骨や貝殻等を一括廃棄した土坑が数基検出されている。

上記のような遺構配置は元禄元年（1688年）に描かれた「御上屋敷殿閣図」「武州本郷第図」に大略一致する。特に絵図に描かれた道の区画は，砂利敷きの道状遺構の配置とよく一致している。この絵図をもとにすると，西部の南北に長く延びる建物遺構は「外局」に，北東部の東側の建物跡は「頭分一」と記されていることから高級な武士の屋敷と考えられる。そして，その他の区画は「役所四」「役所五」「役所六」と記されていることから何らかの公的建物と推定

される。このような絵図との対比によって発掘調査で検出された建築遺構の当時の機能が明らかにされるが，正確に対比すると絵図と一致しない部分も多い。特に絵図には建物の地割りの長さや面積，道路の幅まで正確に寸法が記されているが，これは発掘調査の所見ではより小さな数値しか得られず一致しない。また，本来道路である部分にまで遺構が及ぶ所が数箇所存在する。これは，元禄元年の絵図作成以降の建物の建て替えによるものと推定される。そこで，III期の遺構群もある程度の時間幅の中で把握する必要がある。『加賀藩資料』には「天和三年三月廿一日より初めて本郷邸を称して上屋敷といひ，貞享四年（1687年）その殿閣竣成したるを以，九月十九日これに移れり。」とある。したがって，元禄元年（1688年）の「御上屋敷殿閣図」は，この時代に整備された藩邸の状況を示しているものと推定される。したがって，III期の上限年代は元禄元年頃と考えられる。一方，下限年代に関しては，遺構群を覆い遺構埋土にも含まれている第2焼土面とよばれる焼土が焦点となる。この焼土が形成されたと推定される火災については『加賀藩史料』では次のように記されている。

「元禄十四年十二月廿二日徳川綱吉，綱紀の邸に臨むの意のあることを云ふ。因りて旧館を毀ち，十五年二月四日釿始を行ひ，四月十一日に竣成せしを以て，綱吉はその月廿六日を以て駕を枉げたり。十六年十一月廿九日この邸亦類焼し，前年の御成御殿烏有に帰す。」

このことから第2焼土面が形成されたのは元禄十六年（1703年）の火災の可能性が高いといえる。この年代は537号遺構の地下式土坑のように遺構埋土の焼土から出土した陶磁器の年代とも矛盾しない。したがって，III期の年代の下限は元禄十六年（1703年）と推定される。

次に本期を特徴付ける遺構として地下式土坑をとりあげる。地下式土坑は種類が多いため次のように6類に分類して説明する。

1類は，長方形の平面形をもつ土坑で壁面がほぼ垂直に立ち上がるもの。本類には壁体の補強のために壁際に柱列をもつものや木枠をもつものがある。

2類は，長方形の土坑の長辺にスロープが付設されたもの

3類は，不整方形の平面形をもち，壁体が内傾しながら立上がりそのまま入口へ移行するもの。全体の形状は巾着形になる。底面中央には入口構造を支えるピットがしばしばみられる。

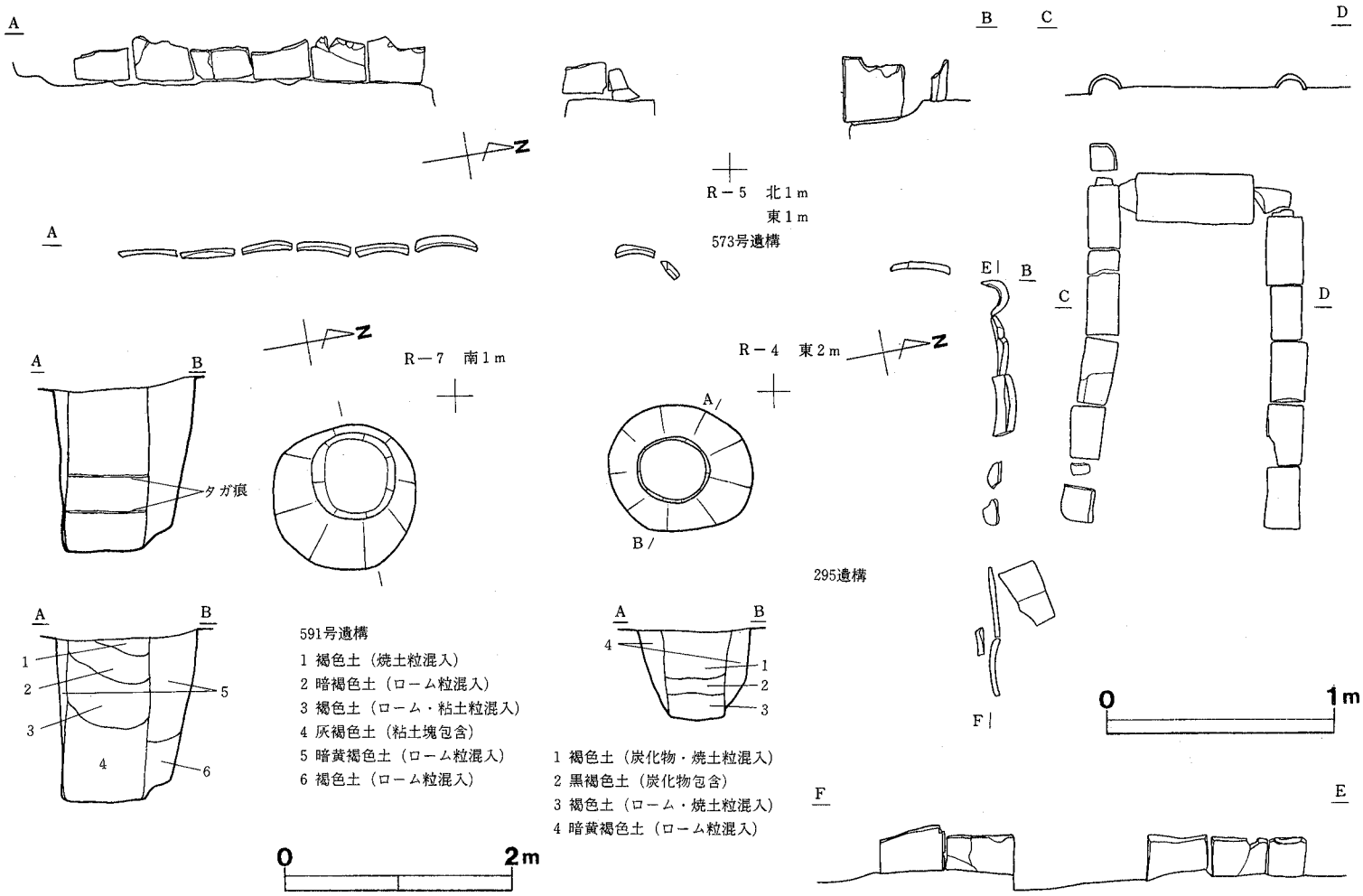
4類は，方形の平面形をもつ土坑本体に直接入口の縦坑が付設されるもの。入口は土坑中央ではなく，壁の一辺にかたよって設定される場合が多い。

5類は，縦坑の側壁に土坑入口が付設されるもの。縦坑には複数の土坑が付設される場合が多い。

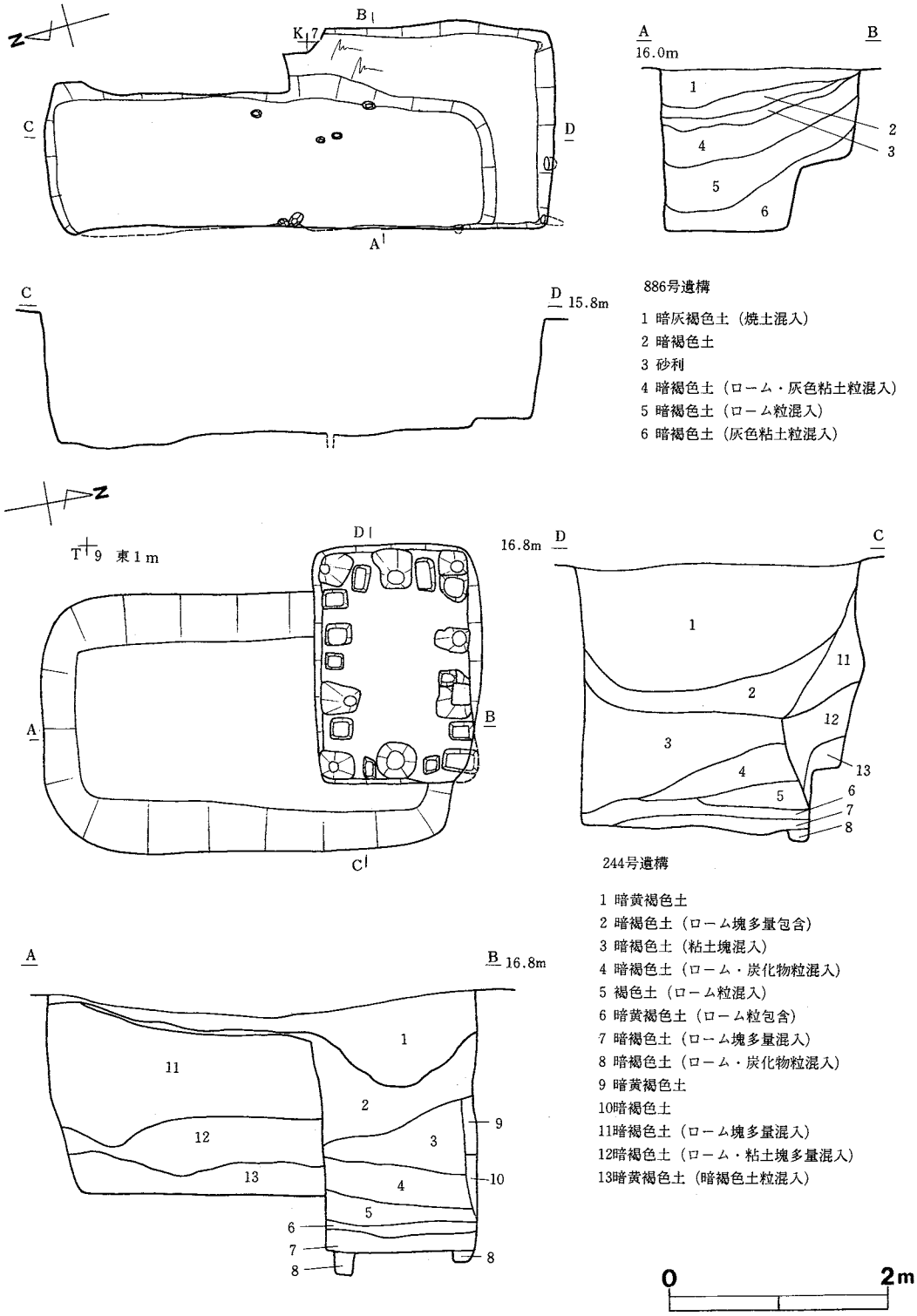
6類は，方形あるいは不整方形の平面形の土坑本体に階段が付設された構造のもの。

このように大きく6類に分類される地下式土坑も入り口構造からみれば，斜めに入口が付く

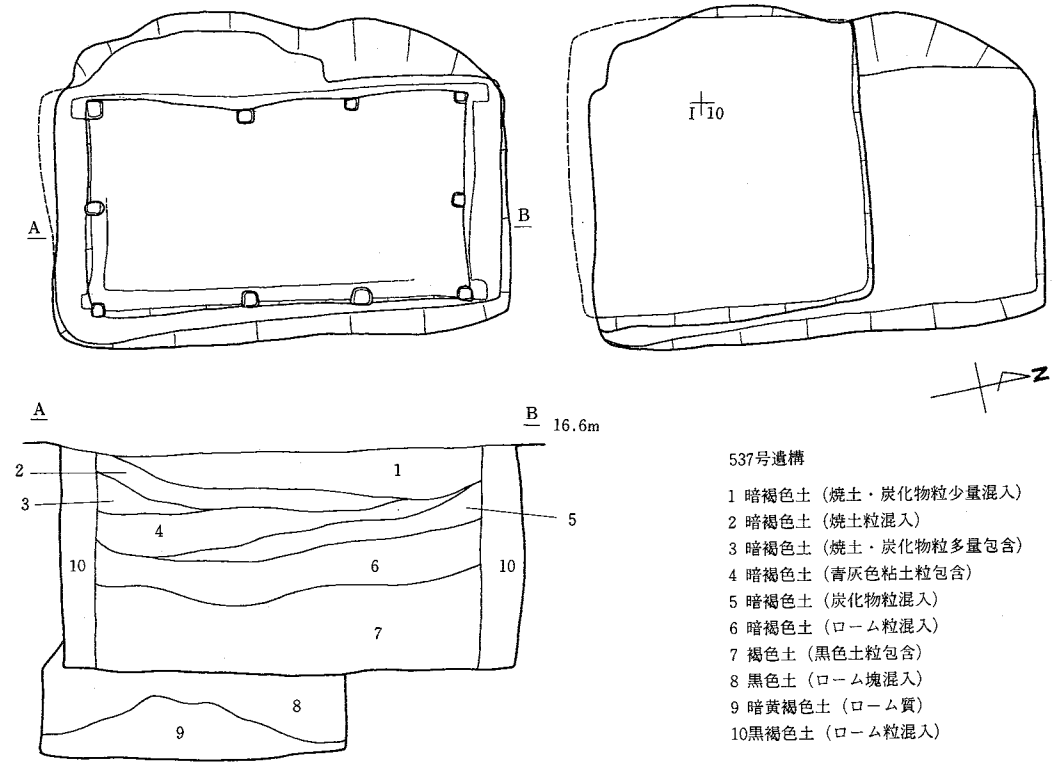
第13図　573号遺構実測図



第14図　573号・591号・295号遺構実測図　（水糸高16.2m）

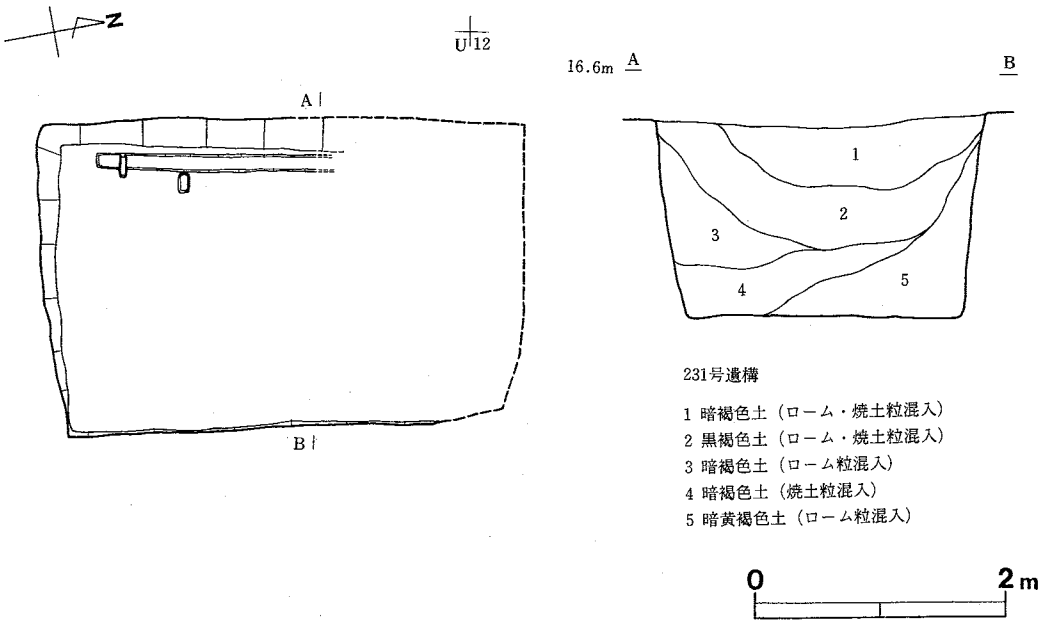


第15図　886号・244号遺構実測図



537号遺構

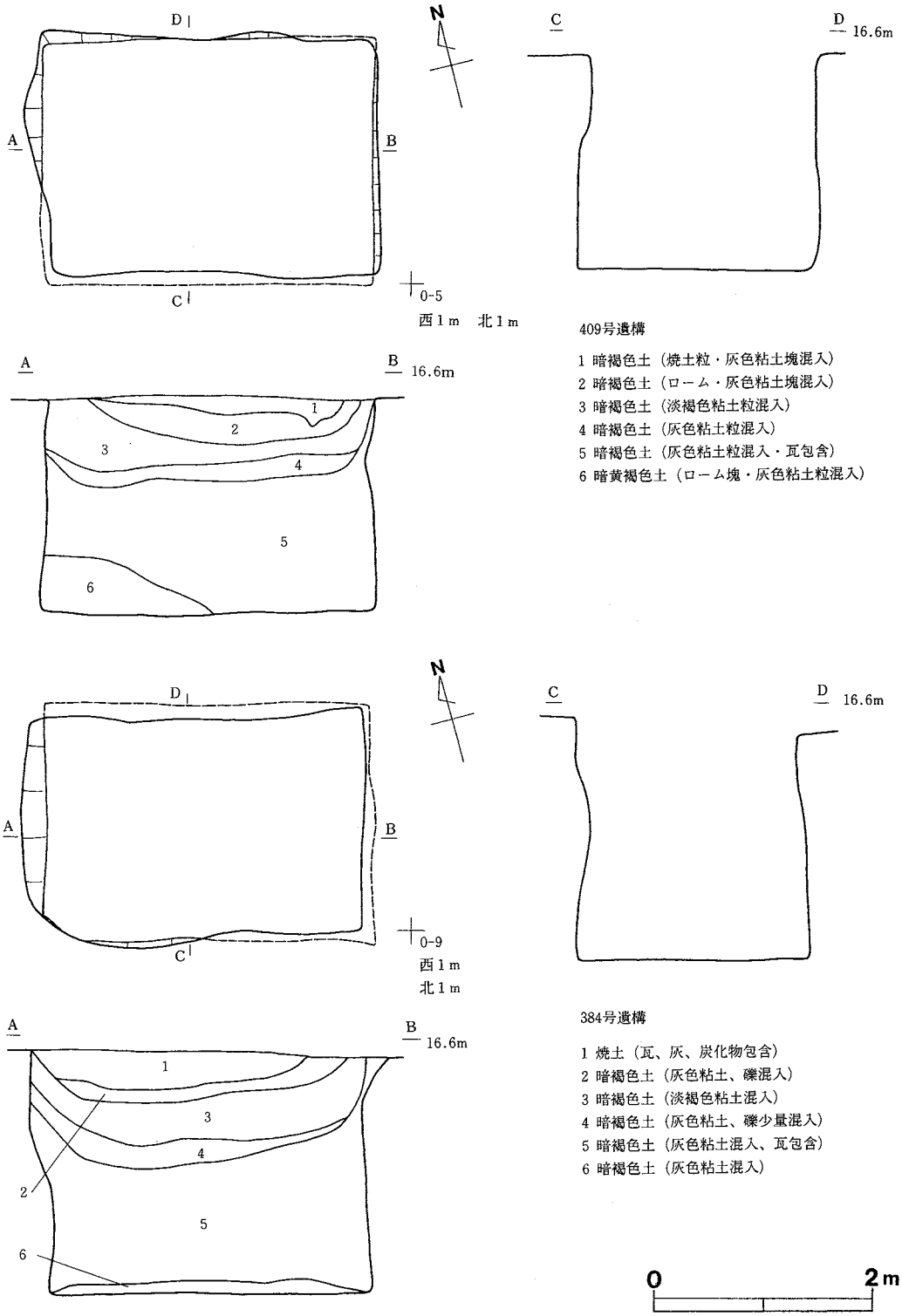
1 暗褐色土（焼土・炭化物粒少量混入）
2 暗褐色土（焼土粒混入）
3 暗褐色土（焼土・炭化物粒多量包含）
4 暗褐色土（青灰色粘土粒包含）
5 暗褐色土（炭化物粒混入）
6 暗褐色土（ローム粒混入）
7 褐色土（黒色土粒包含）
8 黒色土（ローム塊混入）
9 暗黄褐色土（ローム質）
10黒褐色土（ローム粒混入）



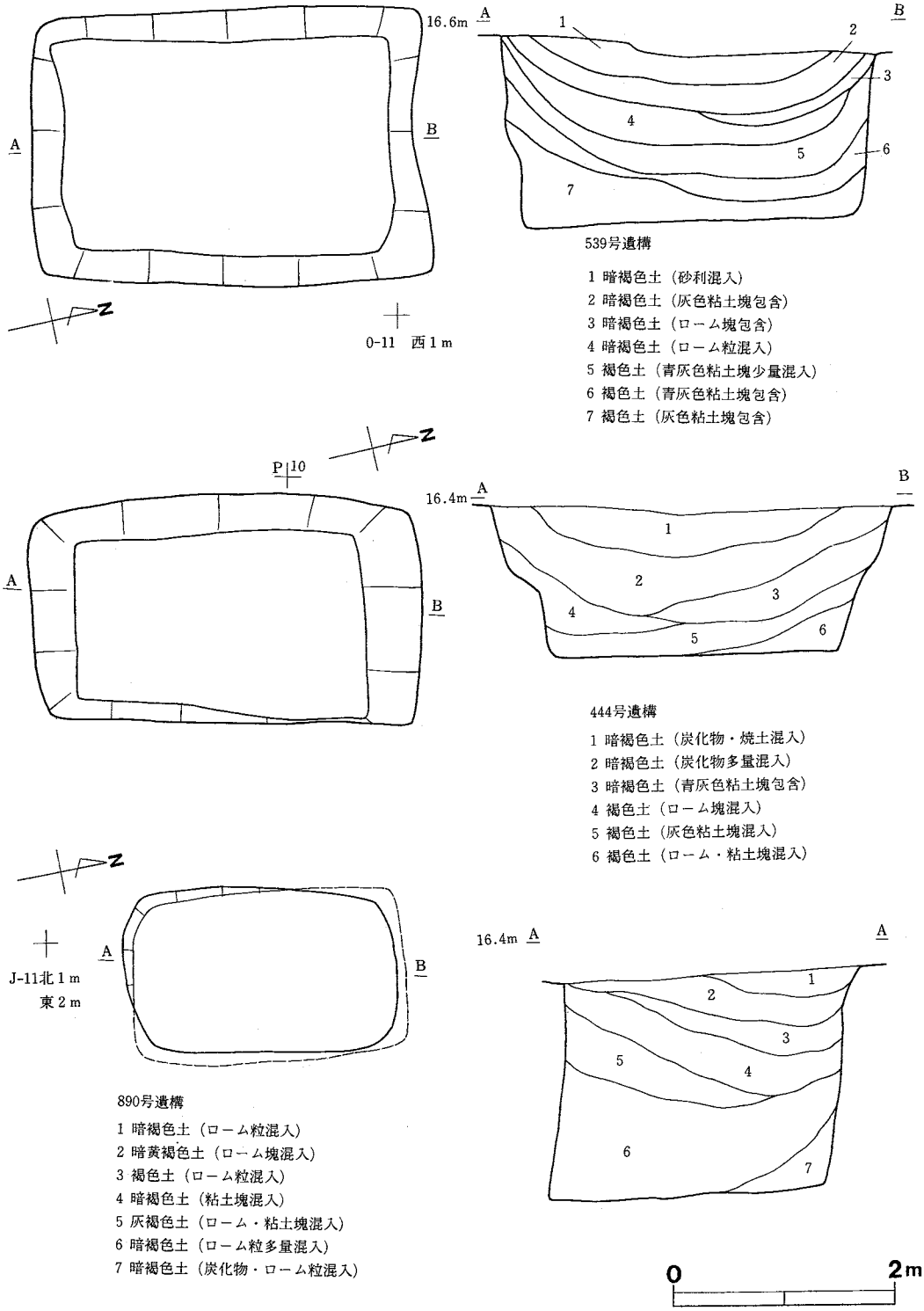
231号遺構

1 暗褐色土（ローム・焼土粒混入）
2 黒褐色土（ローム・焼土粒混入）
3 暗褐色土（ローム粒混入）
4 暗褐色土（焼土粒混入）
5 暗黄褐色土（ローム粒混入）

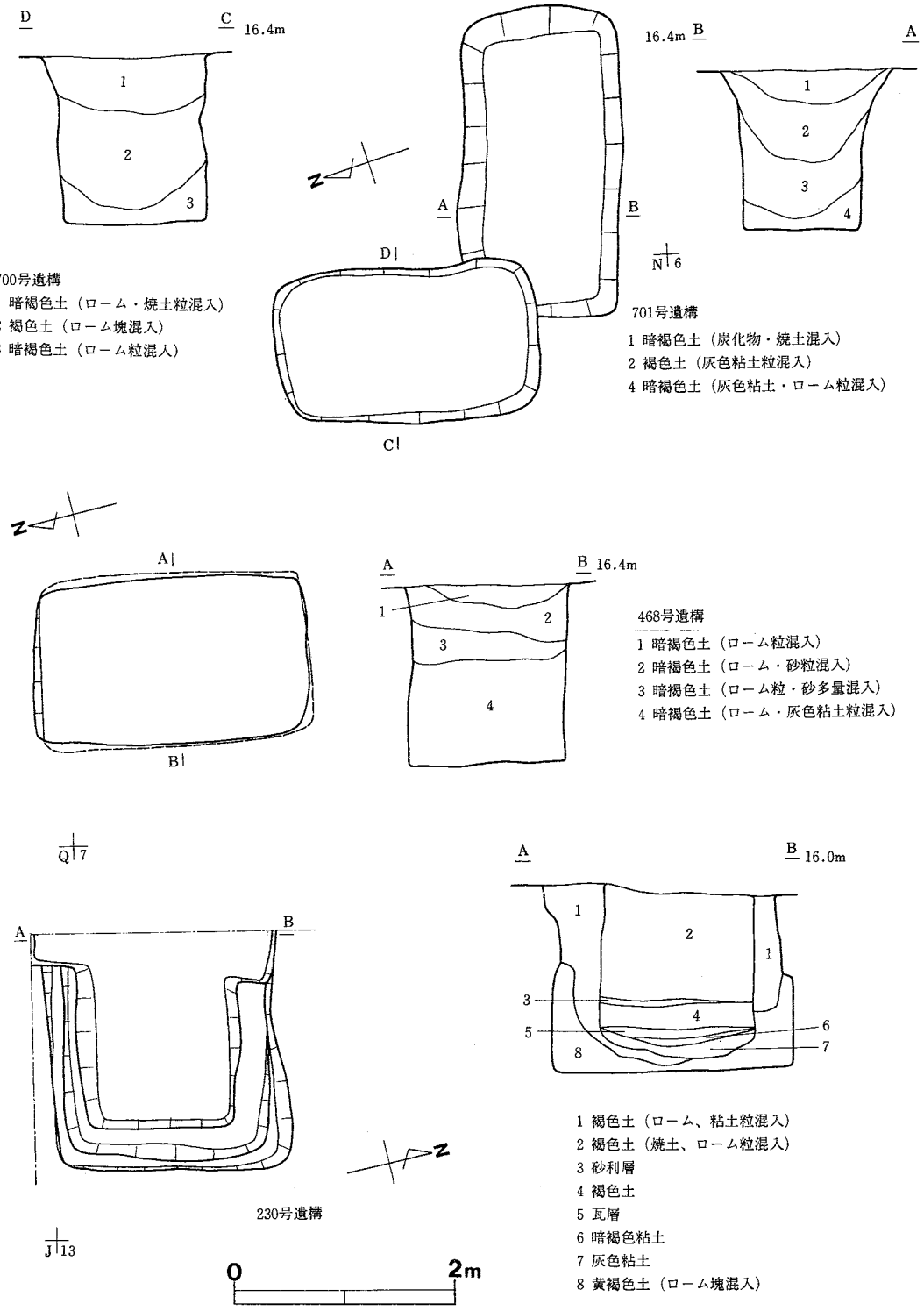
第16図　537号・231号遺構



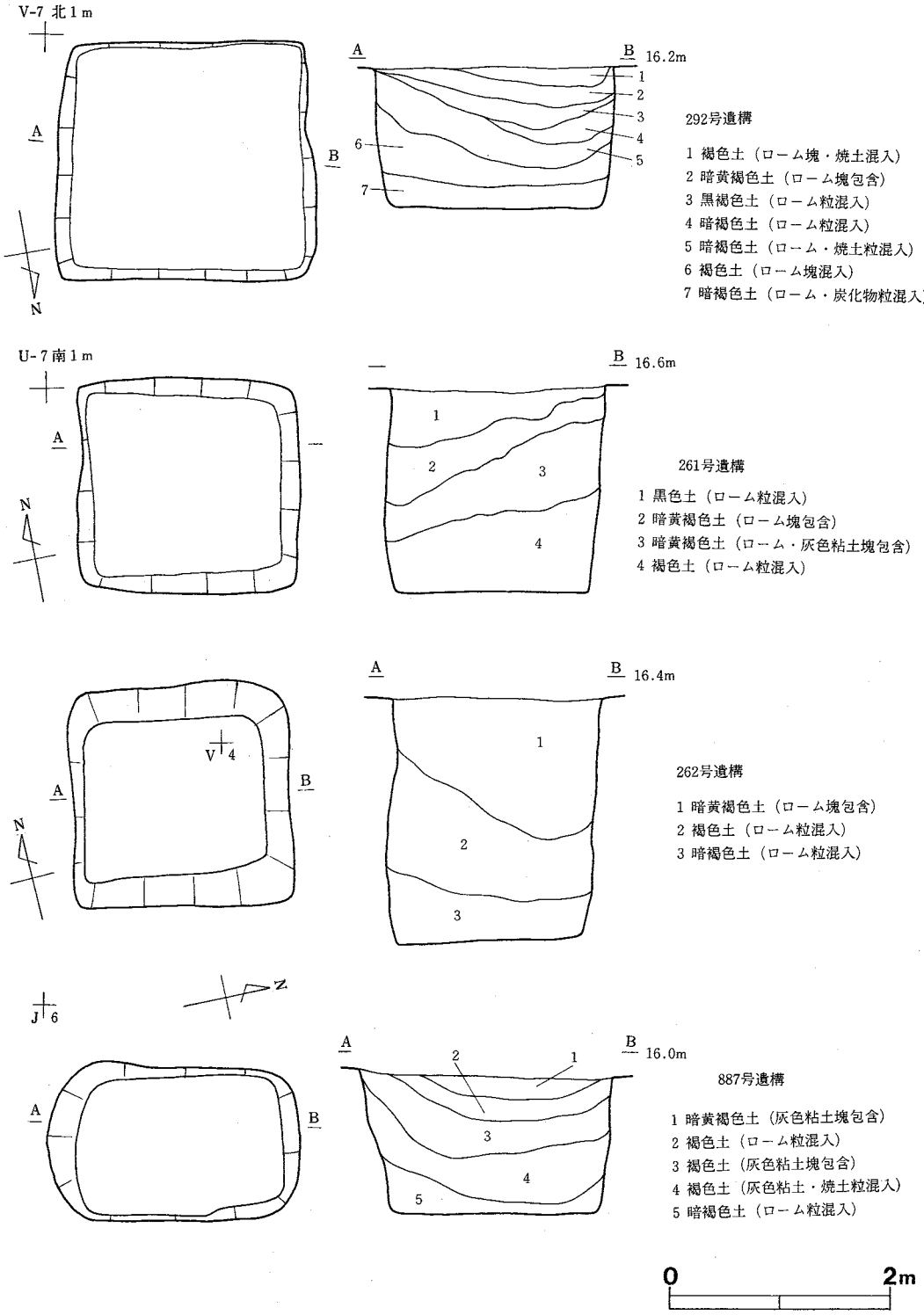
第17図　409号・384号遺構



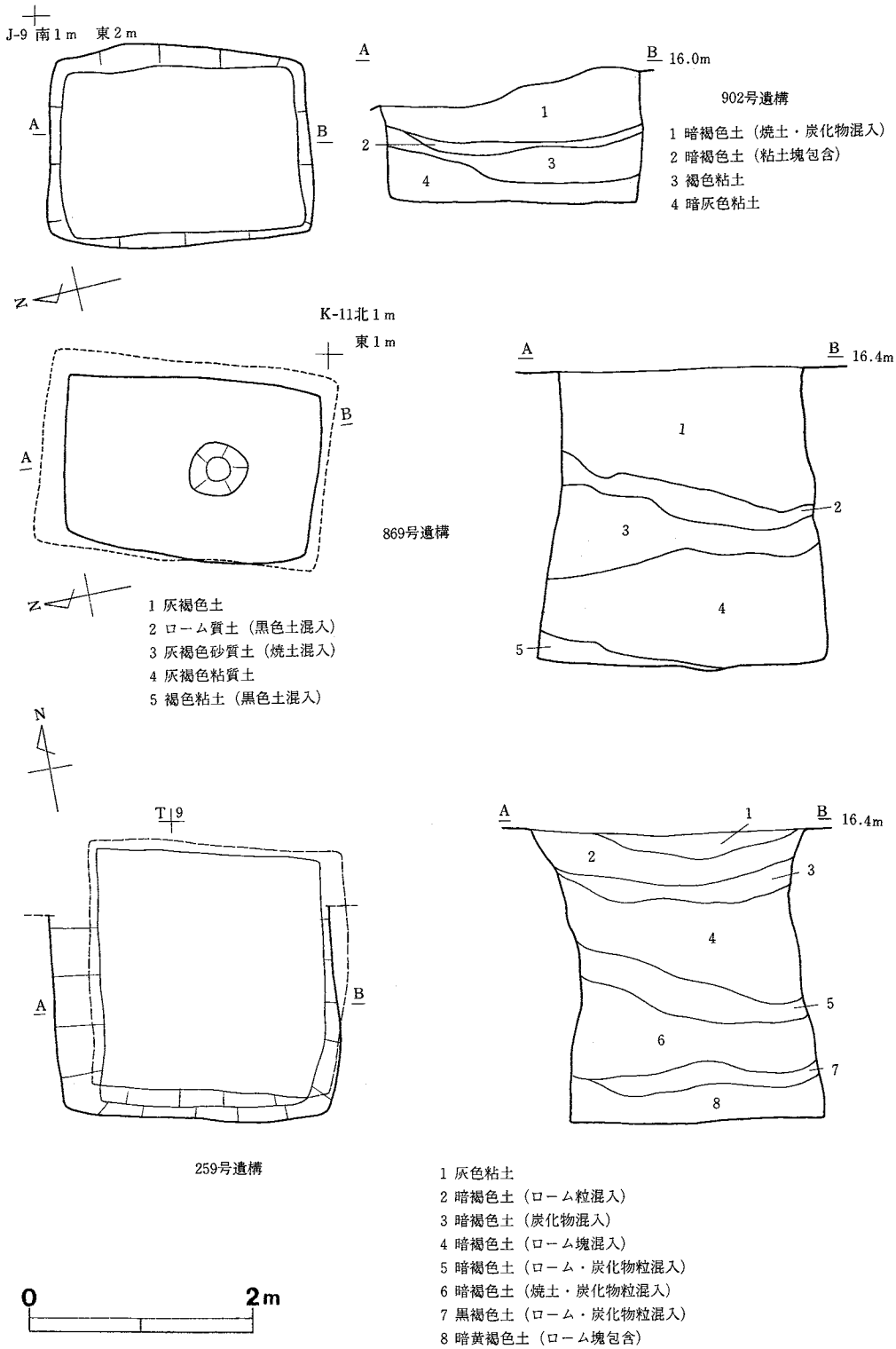
第18図　539号・444号・890号遺構



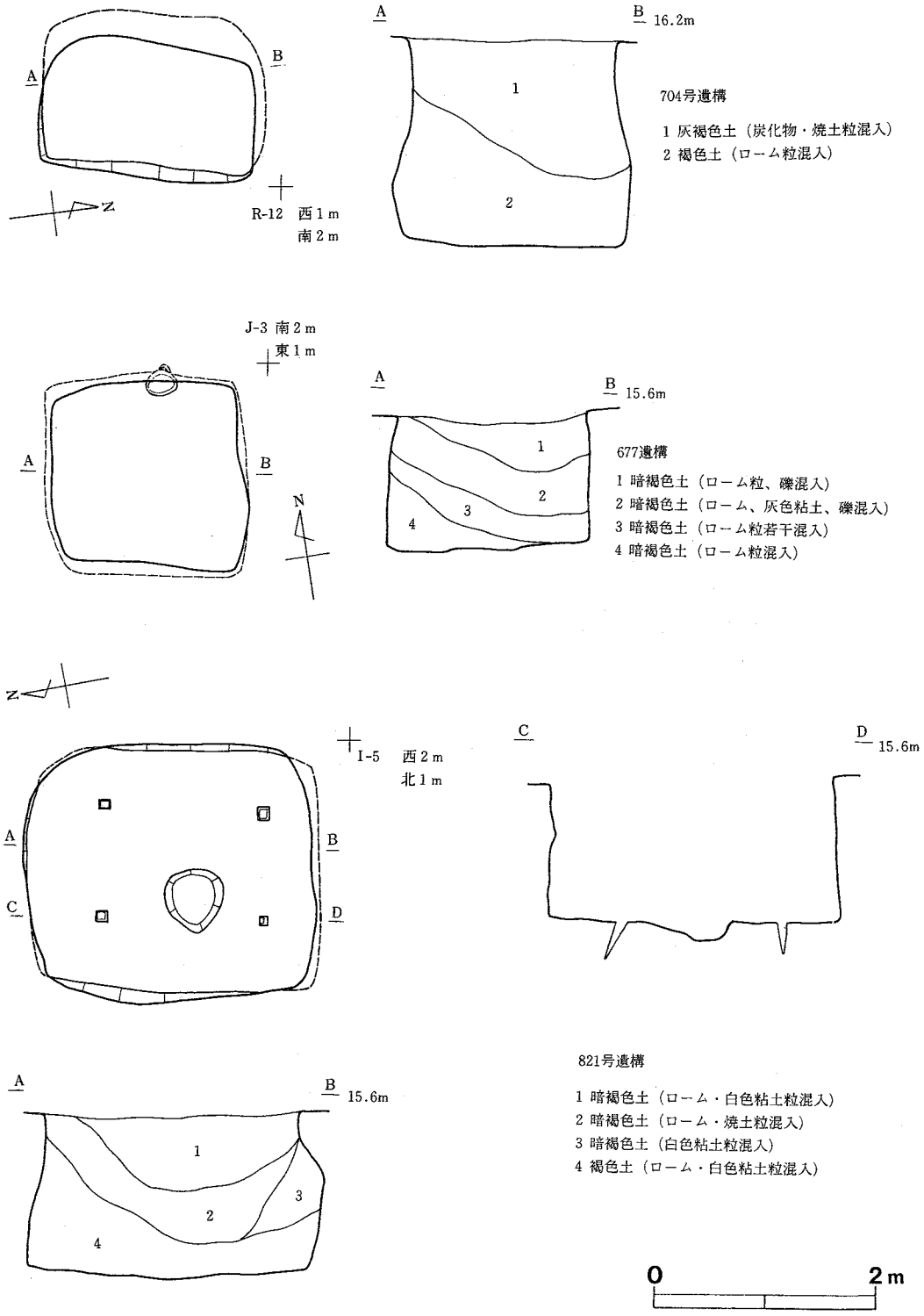
第19図　700号・701号・468号・230号遺構実測図



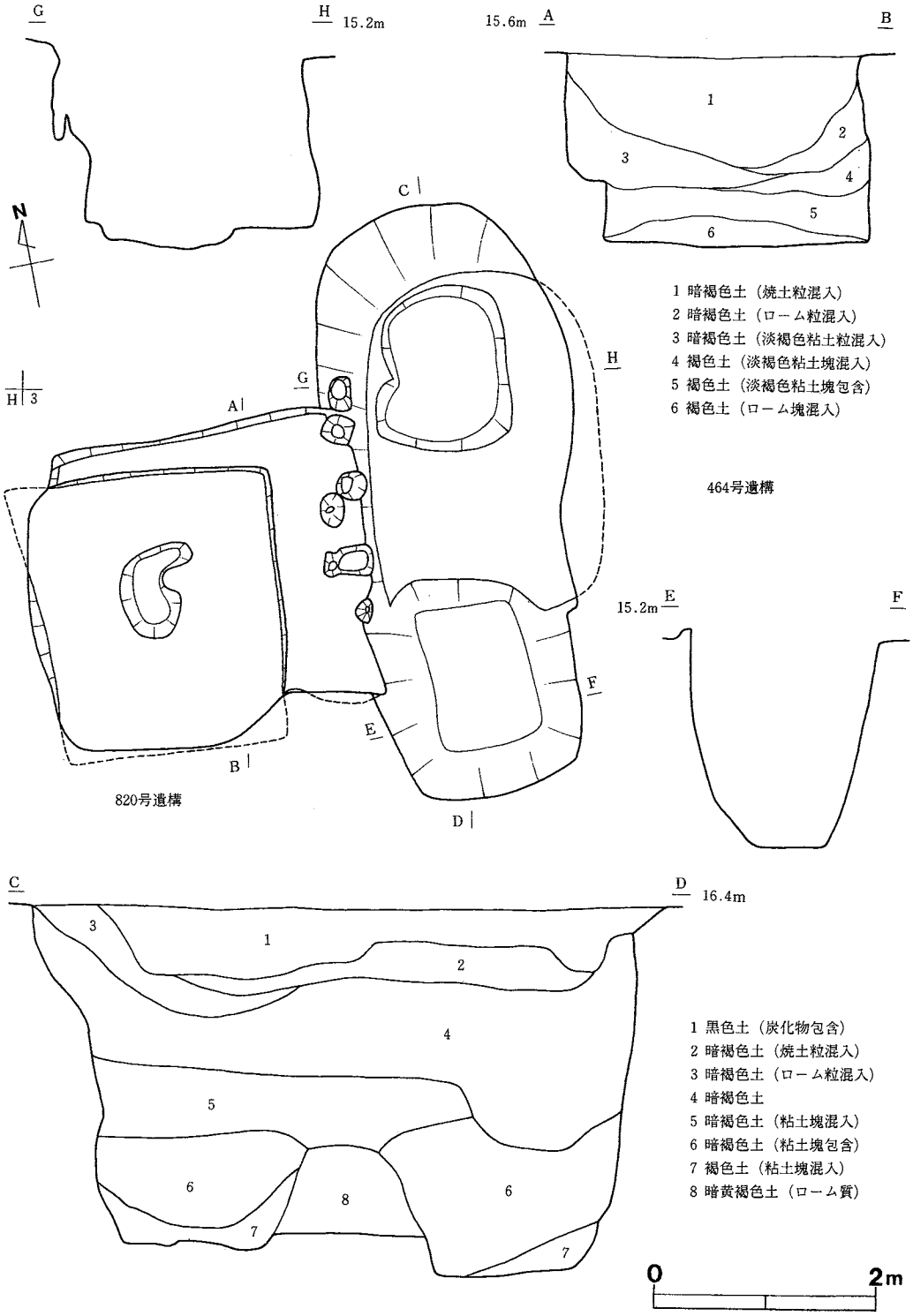
第20図　292号・261号・262号・887号遺構実測図



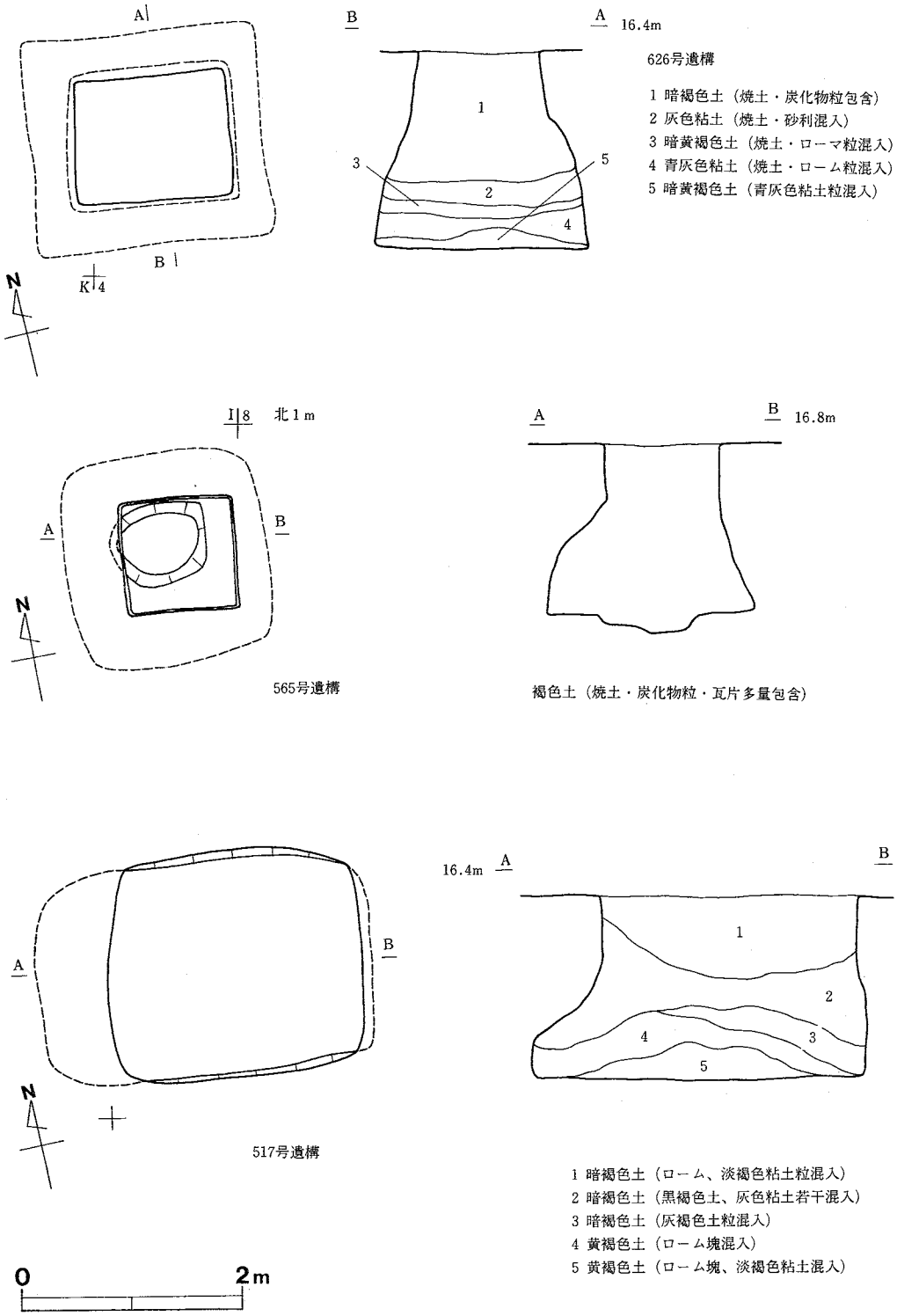
第21図　902号・869号・259号遺構実測図



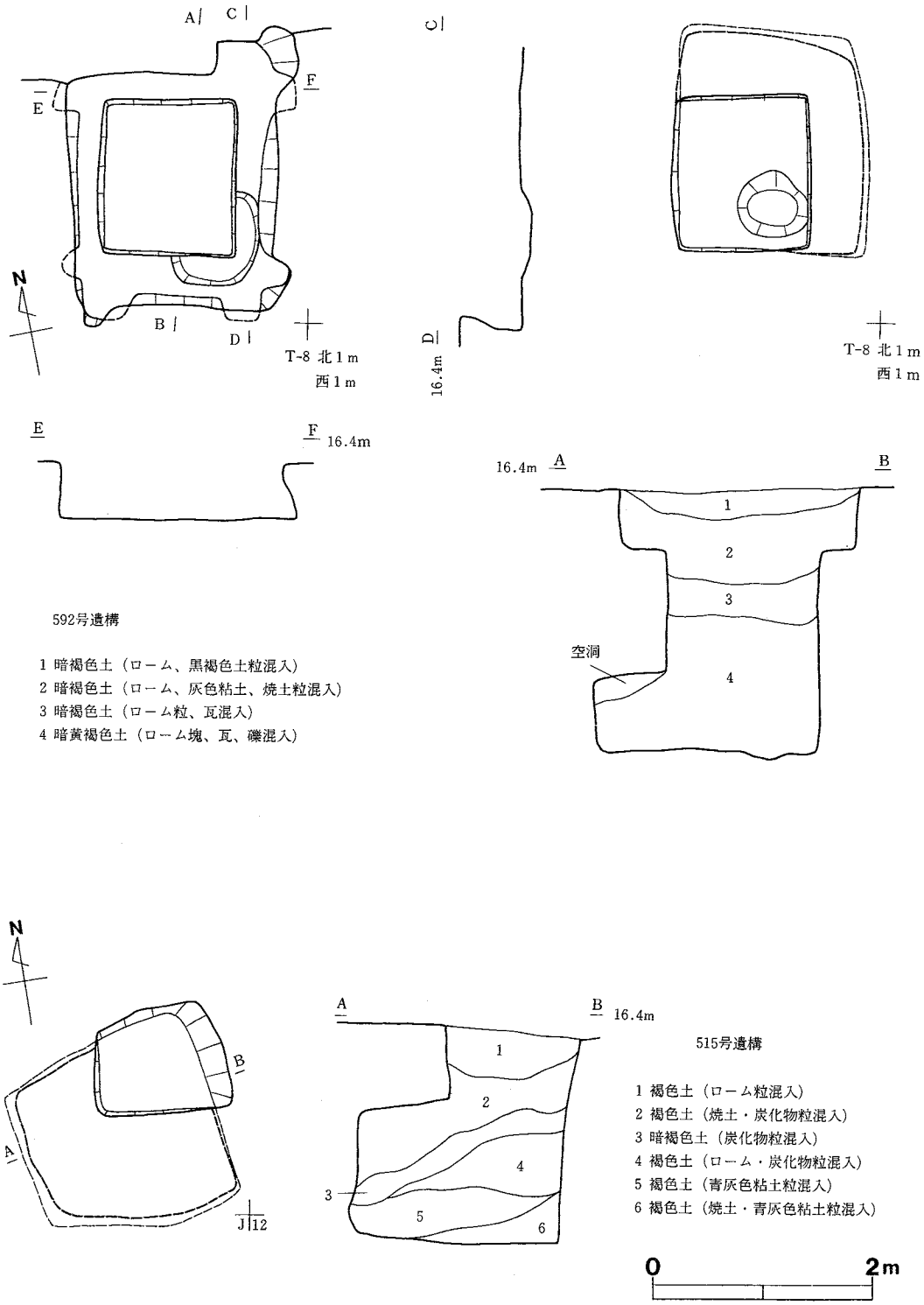
第22図　704号・677号・821号遺構実測図



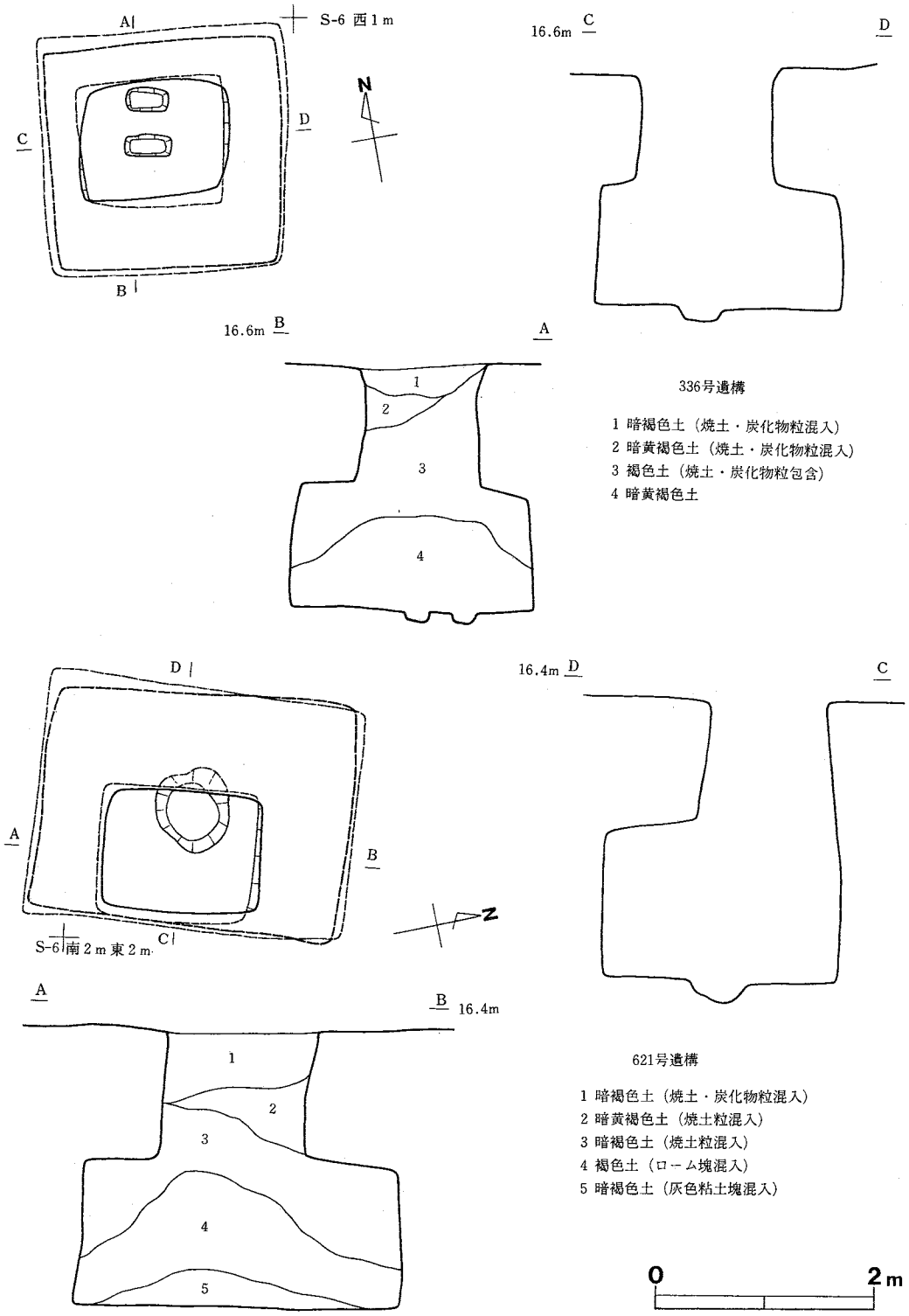
第23図　464号・820号遺構実測図



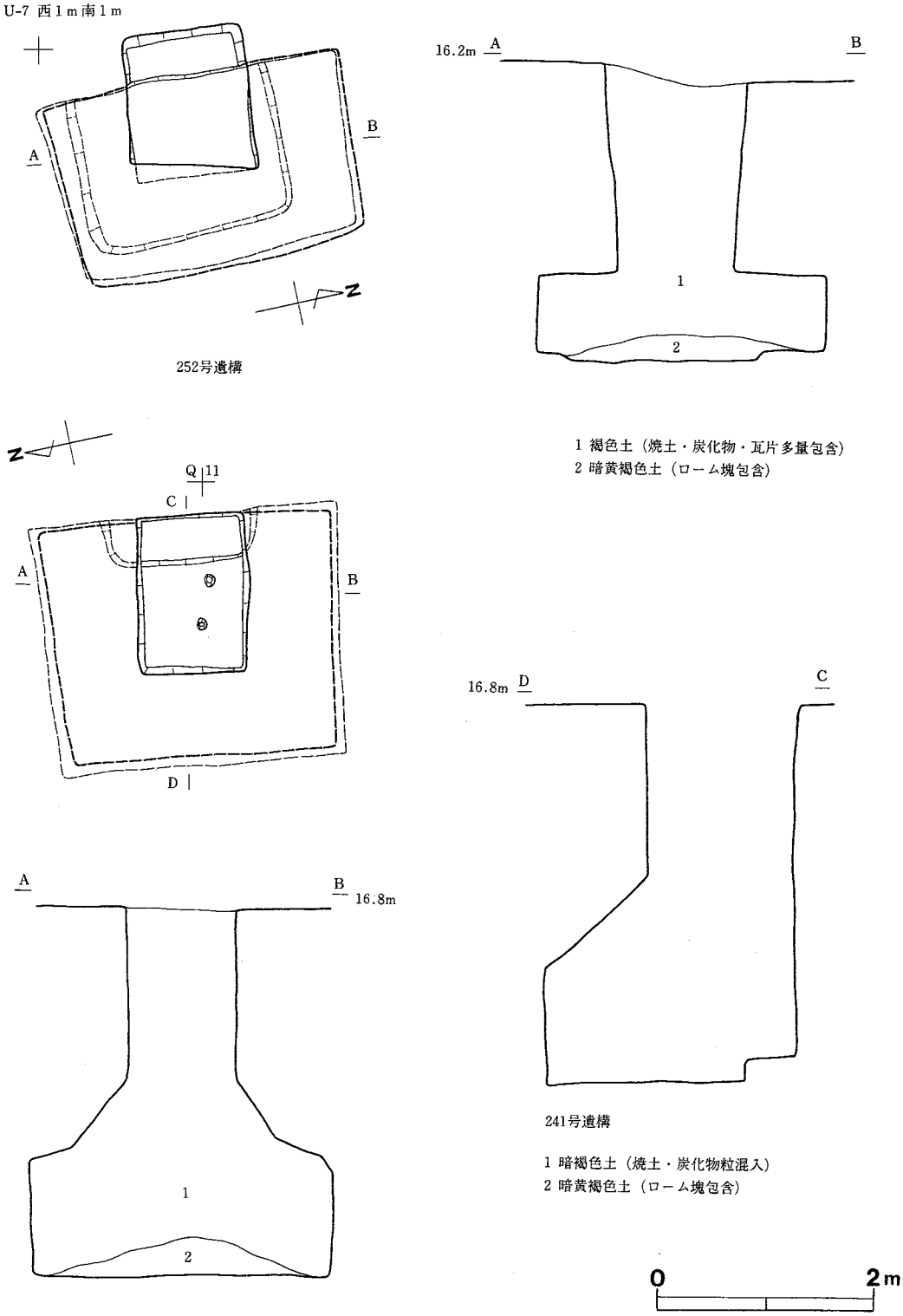
第24図　626号・565号・517号遺構実測図



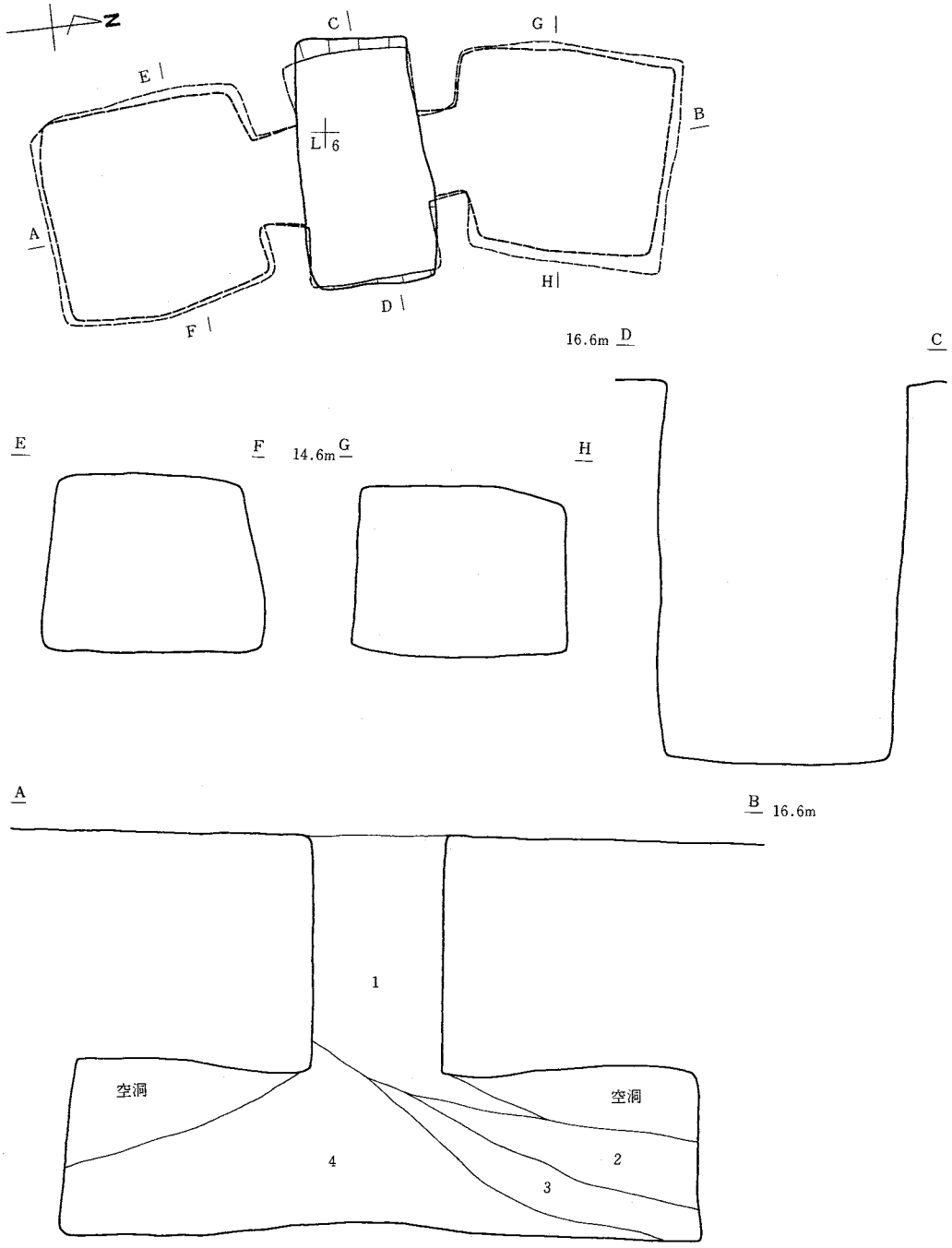
第25図　592号・515号遺構実測図



第26図　336号・621号遺構実測図



第27図　252号・241号遺構実測図

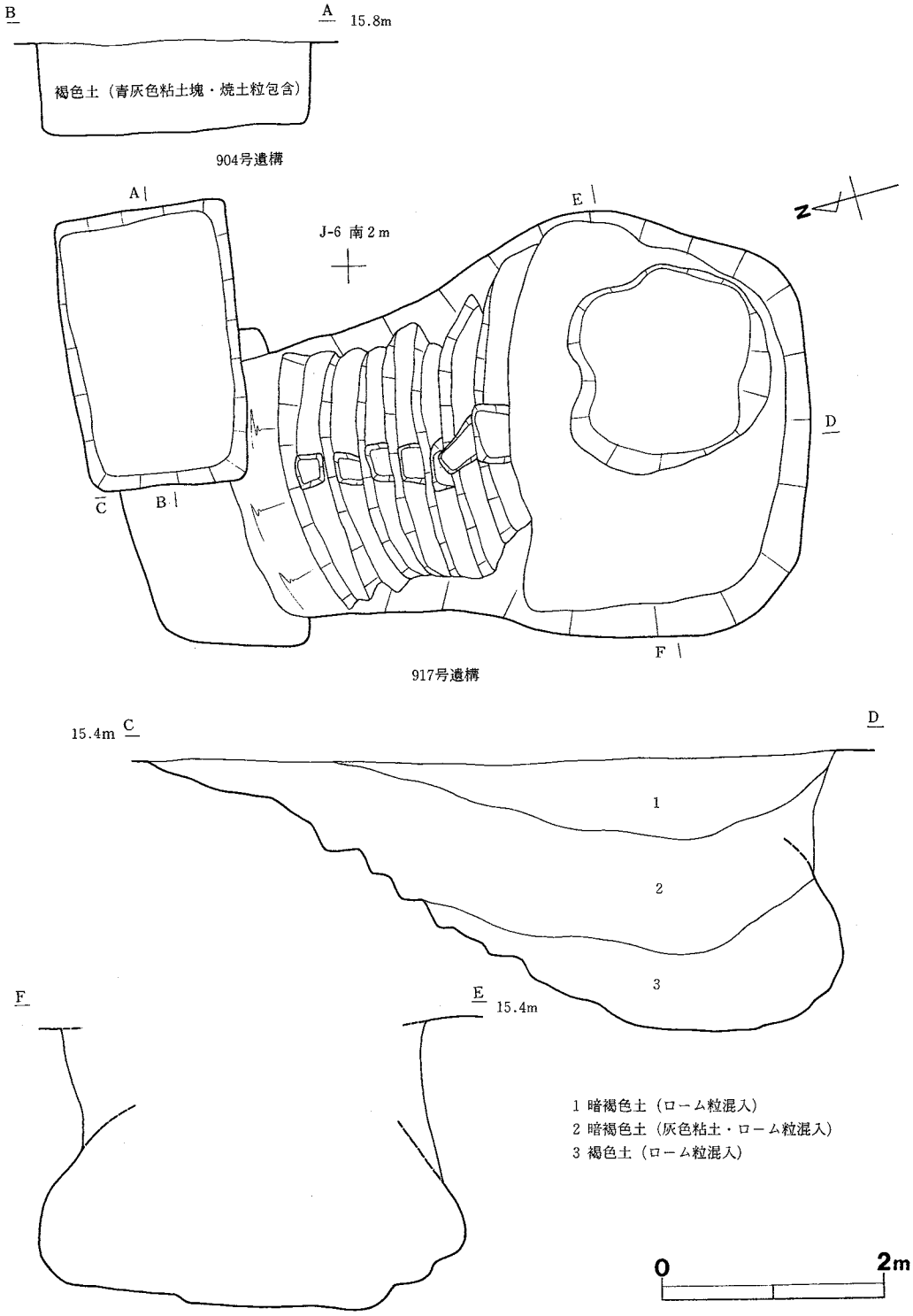


347号遺構

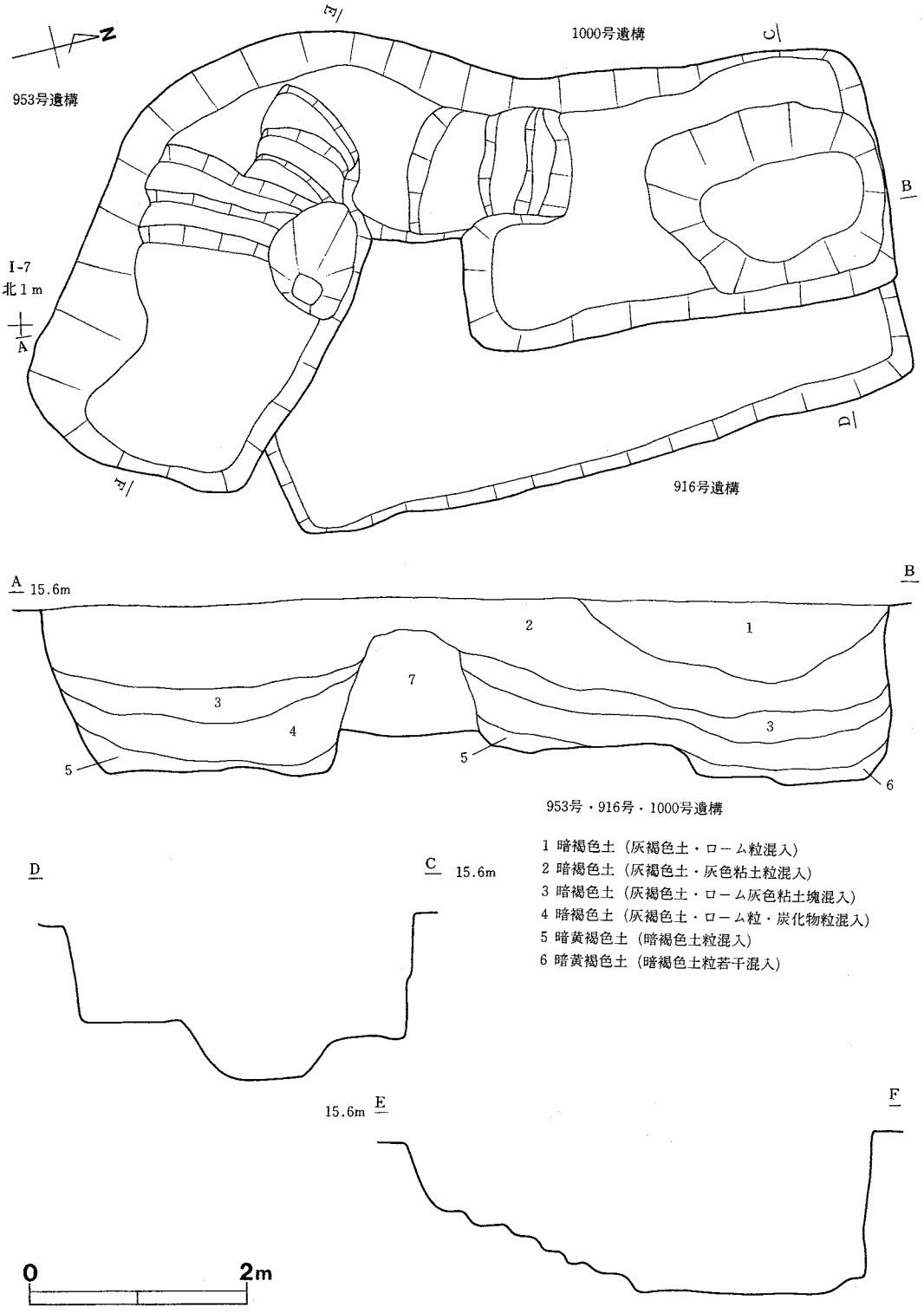
1 暗褐色土（灰白色粘土粒混入）
2 褐色土（白粘土・焼土粒混入）
3 暗褐色土（炭化物・焼土粒混入）
4 暗褐色土（ローム・粘土粒混入）

0 2m

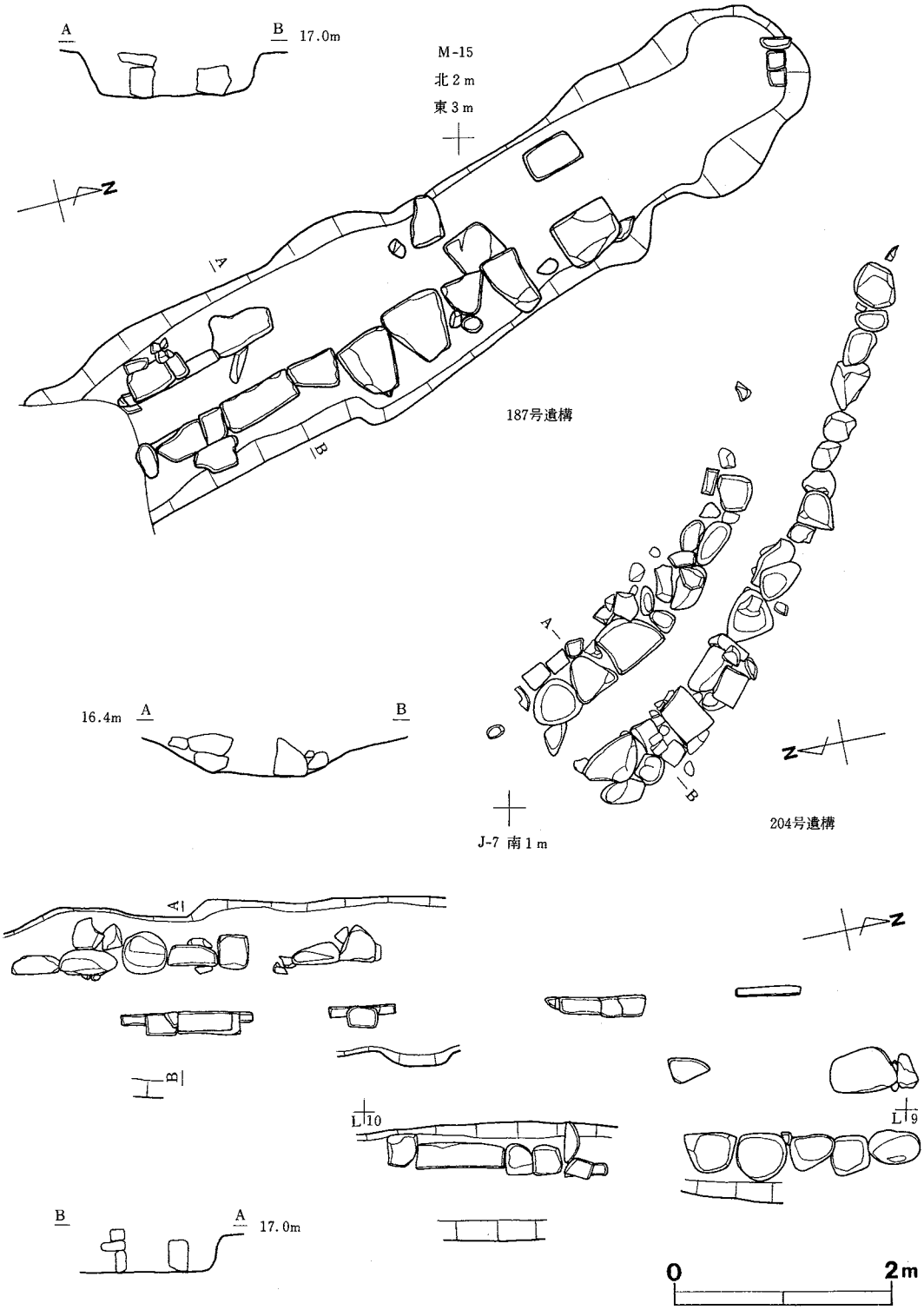
第28図　347号遺構実測図



第29図　917号・904号遺構実測図



第30図　953号・916号・1000号遺構実測図



第31図　187号・204号遺構実測図

1類や6類と垂直方向に付設される2類～5類に大きく分類することもできる。また，平面形や付属施設などを考慮するとさらに細分することも可能である。しかし，ここで注意しなければならないのは地下式土坑の形態の多様性である。先にIII期の年代が時間幅をもつことについては説明したが，約15～20年の時間幅の中でこれだけ多様な種類の地下式土坑が存在することに留意しなければならない。このような地下式土坑の多様性は，1）職人の流儀，2）職人の技量，3）職人の工賃等の社会的技術的経済的要因が錯綜しているものと推定される。したがって，本遺跡での地下式土坑の編年は極めて困難である。一方，地下式土坑の機能については今もって不明な部分が多い。しかし，592号遺構のように建物の床面から直接出入りできる構造をもつと考えられるものも存在することから，やはり貯蔵施設が第一義的な機能として想定される。また，不整形の地下式土坑の幾つかは採土坑の可能性もあると推定される。

(1) 調査区西部の遺構群

335号遺構　南北に長く延びる建物の基礎遺構。調査区中央部分で一間（六尺）間隔で礎石列が検出されている他は，部分的に礎石が確認されているだけで建物全体の構造は把握できない。絵図では「外局」は長大な建物として描かれているので本来はより広範囲に基礎遺構が広がっていたものと考えられる。

267号遺構　調査区西端で確認されている建物の基礎遺構。半間間隔で配列された礎石および抜跡から構成される。この建物遺構も絵図に描かれている「外局」を構成する建物の一部と考えられる。この遺構の西側には炭化した木枠のはまった溝状遺構が存在する。

204号遺構（第31図）　調査区西部335号遺構の礎石列の内部で確認されている石積みの溝状遺構。石積みは安山岩の切り石を確認されるだけで3段積み上げているが，北西部では丸石積みに変わる。いずれの部分でも底石は確認されていない。溝状遺構は外局中ほどでは南北方向に延びているが，K－8区で北西方向に大きく折れ調査区北西角まで確認される。また，調査区北西部では石は抜き取られている。北西側に向ってやや比高が下がるので，この溝は建物の床下に設置された排水溝と考えられる。この他にも335号遺構に隣接した部分で切り石積みの溝状遺構が数基確認されているが，いずれも重複が激しく度々改修されたことを示している。

834・289号遺構（写真16）　調査区中央を南北に横切る2列の布堀り柱列。いずれも一間間隔で柱が配列されている。東側の柱列は一度建て替られたらしく，南側では重複している部分がある。また，西側の柱列の内側には杭列で板材を支えた構造の溝状遺構が存在する。柱列の間に

は砂利が敷かれており（全体図網カケ部分）道路の遺構と考えられる(写真16)。

689号遺構（第32図）　砂利敷きの道路遺構の南端に位置する門の遺構。絵図との対比では役所等が位置する地割りと南側に隣接する園地を区画する塀に付設された門と考えられる。しかし，塀の遺構（466号遺構）とはやや位置がずれている。2基並列した長方形の堀り方の底部に礎石が据えられた基礎構造をもつ。地上部分の門の構造は遺構としては残存していないが，門扉に取りられていた乳金具や，蝶番や門の部品の鉄製品が付近からまとまって出土している。

324号遺構（第32図）　調査区南西部に位置する門の遺構。絵図との対比によって，この門は園地に通じる道路と砂利敷きの道路との境界の門と推定される。2基並列した長方形の掘り方の底部に礎石が据えられた構造をもつ。

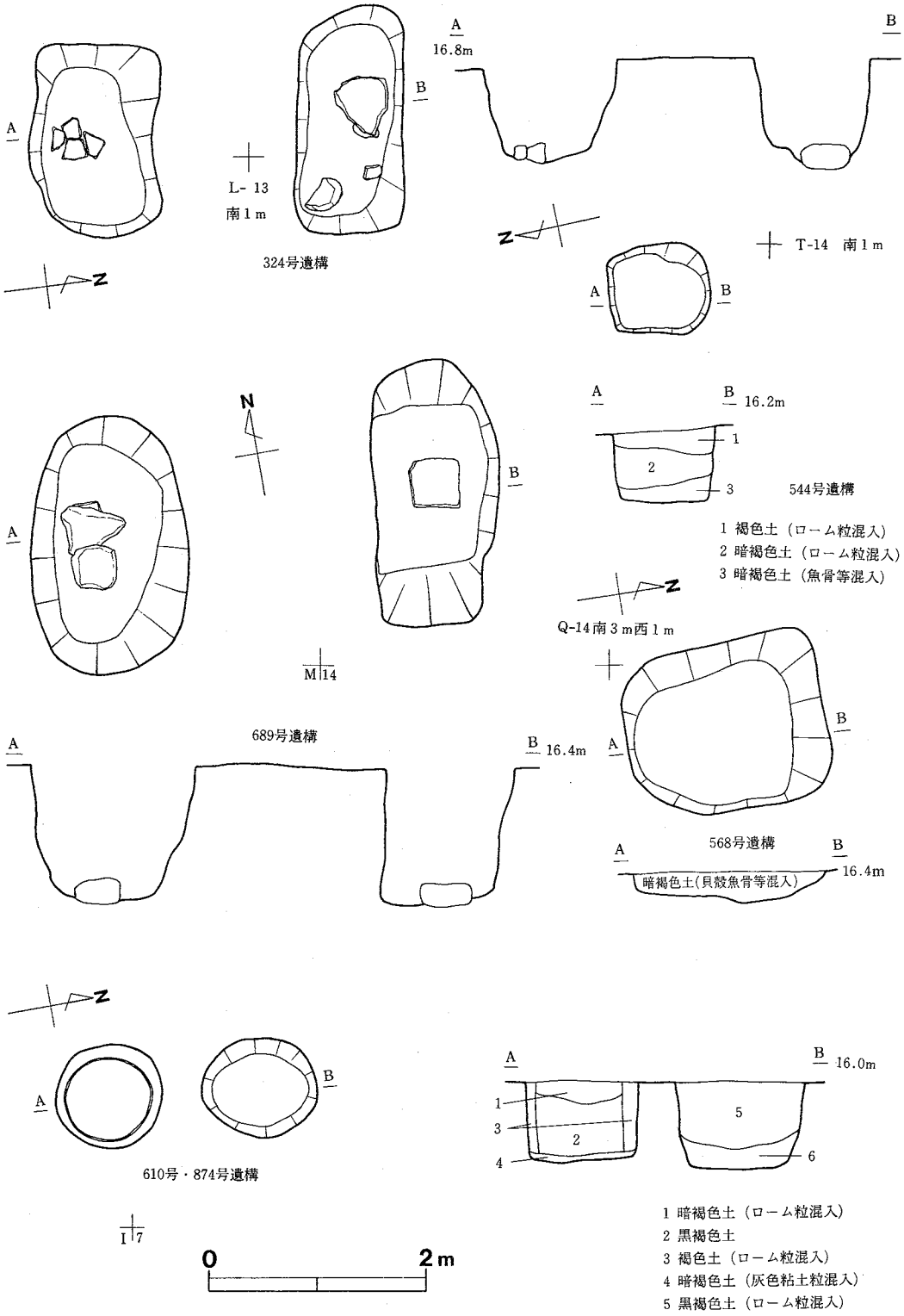
187号遺構（第31図，写真12）　調査区南西端に位置する石組みの溝状遺構。絵図との対比では南隣の園地を仕切る地割りの溝状遺構と推定される。

64号遺構（第34図）　K－5区に位置する井戸跡。確認面から1.5mの深さまで方形の堀り方で，下部では円形の堀り方に変化している。その部分に井桁に組んだ木材の痕跡とそれ支える粘土が確認されていることから，井戸上部に井桁が組まれていたことが明らかになった。

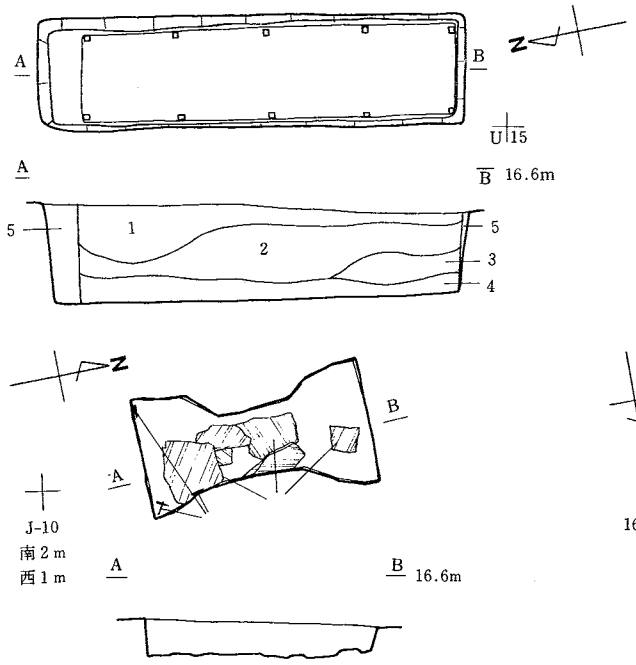
911号遺構（第34図）　I－6区に位置する井戸跡。遺構上部を4期の大形土坑によって破壊されているため上半部は遺存していない。井戸の掘り方は四隅が突出した方形でその下部は円形になっている。このことから，64号遺構の井戸と同様に井戸上部に井桁が存在したものと考えられる。

610・874号遺構（第32図）　H－7区に位置する土坑。絵図との対比では「外局」の外縁部にあたる。2基の円形の平面形をもつ小形の土坑である。南側に位置する610号遺構は遺存状態が良好で円形の掘り方の内部に桶状の木枠が据えられた痕跡が確認されている。両方の土坑とも埋土は粘性に富む暗灰色土である。建物の外縁部に位置し，木枠をもつ構造であることと埋土の特徴を考慮すると，便所の遺構の可能性が高いと考えられる。

344号遺構（第33図）　J－12区の木枠組みの方形土坑。木材を箱状に組んだものを地面に据えたものである。底板はなく底面に杭の跡も確認されない。埋土には大量の焼土と炭化物が充塡



第32図　324号・689号・610号・874号・544号・568号遺構実測図

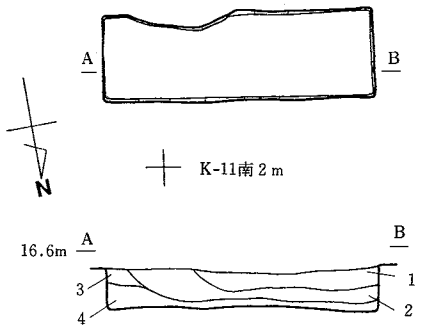


524号遺構

赤褐色土（炭化物・焼土・灰色粘土粒包含）

406号遺構

1 赤褐色土（炭化物・焼土粒包含）
2 暗褐色土（炭化物・焼土粒混入）
3 褐色土（炭化物・焼土粒混入）
4 暗褐色土（灰色粘土塊混入）
5 暗黄褐色土

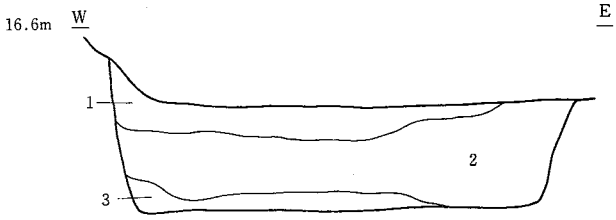


344号遺構

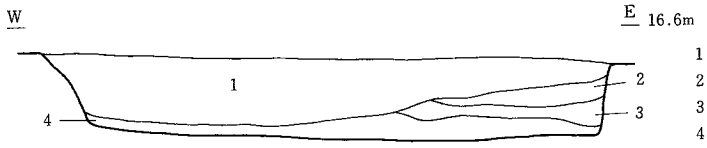
1 暗褐色土（焼土粒混入）
2 赤褐色土（炭化物・焼土粒包含）
3 暗褐色土（炭化物粒混入）
4 暗褐色土（炭化物粒包含）

365号遺構

1 暗褐色土（ローム、灰色粘土混入）
2 暗褐色土（小石、ローム、灰色粘土混入）
3 暗褐色土（小石、ローム、灰色粘土混入）



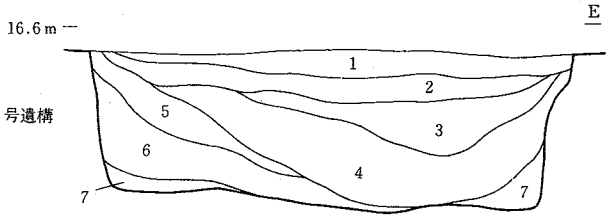
264号遺構

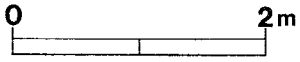


1 暗褐色土（ローム・灰色粘土粒混入）
2 褐色土（ローム粒混入）
3 暗褐色土（灰色粘土粒混入）
4 暗褐色土（ローム粒混入）

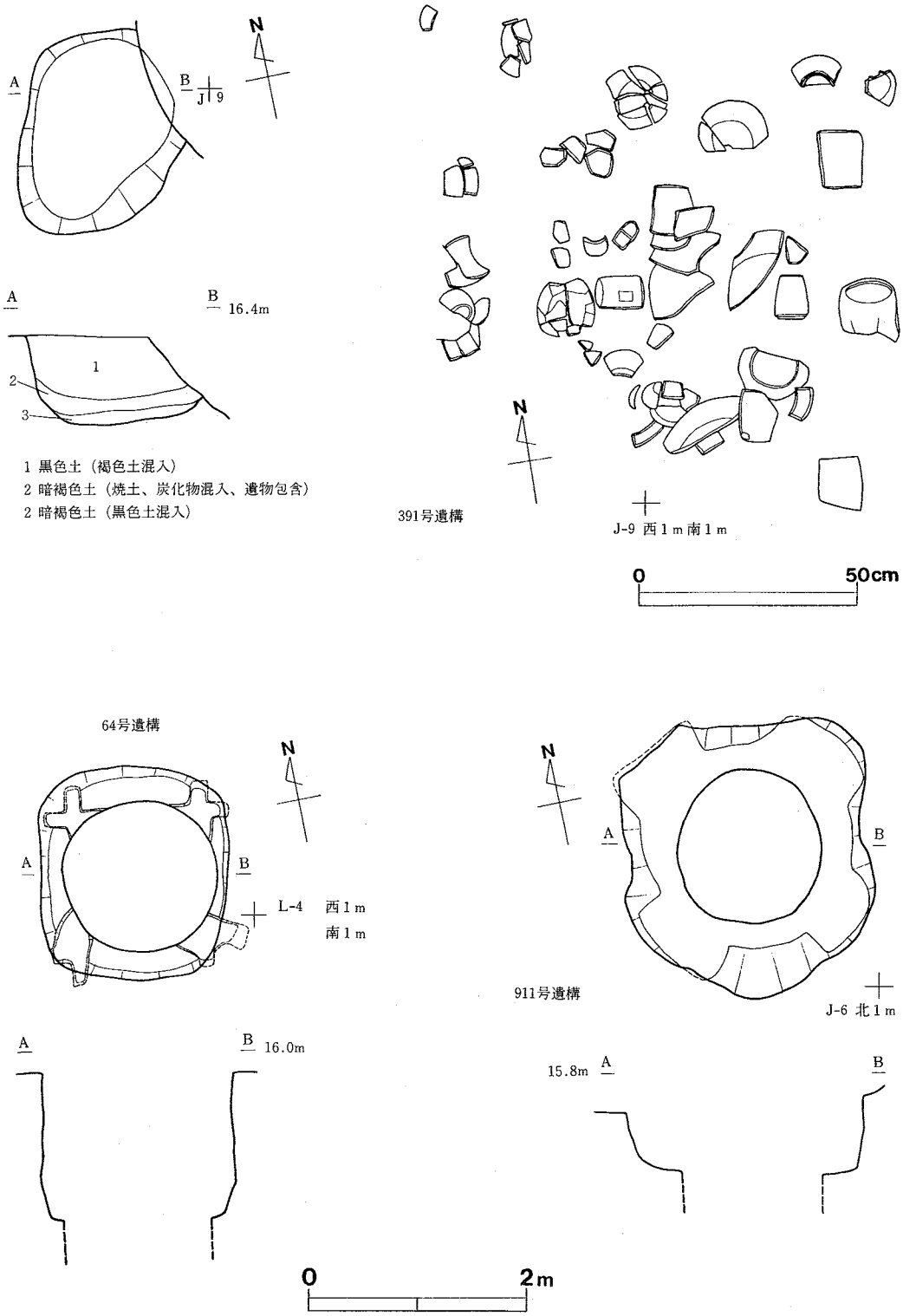
1 褐色土（灰色粘土粒混入）
2 暗褐色土（ローム粒混入）
3 褐色土（ローム粒混入）
4 褐色土（ローム粒包含）
5 暗黄褐色土（ローム塊混入）
6 灰褐色土（灰色粒土塊包含）
7 暗黄褐色土（ローム塊包含）

255 a 号遺構





第33図　419号・344号・524号・365号・264号・2560号遺構実測図



第34図　391号・64号・911号遺構実測図

されている。

524号遺構（第33図）　267号遺構の北隣に位置する木枠組の方形土坑。344号遺構と同様に木箱を埋設したもので，角の部分からは釘が出土している。埋土からは大量の焼土と底板と推定される炭化材が出土している。

391号遺構（第34図，写真13）　J－9区に位置する土坑。直径1mにもみたない小形不整円形の土坑であるが，埋土中からは大量の陶磁器が一括廃棄された状態で出土した。なかでも略完形で3点出土した色絵芙蓉手大皿は逸品である。また，焼塩壷の共伴関係が注目される。位置的には「外局」の中にあるため「外局」の廃棄物と推定される。

395号遺構（第35・36図，写真14）　J－10・11区に位置する土坑。長さ2m，幅1mの隅丸の長方形の土坑である。「外局」を構成する建築遺構の一つである267号遺構の南隣に位置し，その基礎と一部で重複していることから，267号遺構に先行する土坑と考えられる。埋土内部からは大量のカワラケと魚骨，鳥骨や炭化物等が一括して出土した。カワラケは墨書のあるものが多く，また魚はマダイを主体にしており，宴会等の一括廃棄物と推定される。

821号遺構（第22図）　H－5区の地下式土坑。隅丸方形の土坑本体の上方に入口が付く3類に相当する。底面中央には円形皿形の浅い凹があり，昇降施設を支えるピットと推定される。また，それを囲むように杭穴が4本確認された。これらの杭穴は中央部に向かって斜めに打ち込まれており，入口部分を支える構造と推定される。

626号遺構（第24図）　K－4区の地下式土坑。正方形の平面形をもち，内傾しながら立ち上がる壁面がそのまま入口に移行する3類の土坑である。埋土上部には焼土が包含されている。

886号遺構（第15図，写真12）　J－6・7区の地下式土坑。長方形の平面形をもつ土坑本体の長辺にスロープ状の作り出しが付設されたもので2類にあたる。埋土最上部には焼土が含まれ，下部からは陶磁器類が多量に出土している。中でも，焼塩壷の一括資料は編年上重要な資料である。

347号遺構（第28図，写真11）　L－5・6区の地下式土坑。長方形の平面形の深さ3.5mほどの縦杭の両側に2基の地下式土坑が対向して付設されている5類の地下式土坑。土坑は横穴のよ

うな狭い入口部に方形の土坑本体が接続している。

917号遺構（第29図，写真11）　Ⅰ－5・6区の地下式土坑。不整方形の土坑本体に約30°の角度で傾斜した階段が付設された6類の地下式土坑。遺構確認時にはすでに天井部分は陥没していたが，本来は階段の部分まで天井が存在していたものと推定される。階段には中央に方形に硬化した柱当たりの部分があり，段階の各段には天井部分を支える柱が存在していた可能性がある。土坑本体は不整形で中央東よりに浅い皿状の落ち込みがある。壁はドーム状に大きく湾曲しており天井はかなり低かったものと推定される。

537号遺構（第16図，写真10）　Ⅰ－9・10区の調査区西端に位置する地下式土坑。この遺構は埋土断面の観察から新旧2基の土坑が重複しているものと考えられる。旧期の地下式土坑は新期の土坑の下部に，やや西寄りに位置をずらして土坑本体の底の部分が若干依存している。新期の土坑は旧期の土坑に2/3ほど重複している。平面形は長方形で壁面が垂直に立ち上がる1類の地下式土坑である。この土坑は他のものと異なり木組の構造や確認される。それは，長方形の掘り方の内部に5寸角の角材を長持ち形に組んだ後，さらにその内側に同様の角材で10本の支柱を配置した構造をもつ。このような木組の構造は東京都都立一ッ橋高校遺跡で検出されている穴蔵（都立一ッ橋高校遺跡調査団，1985）に類似したものと考えられる。1類の土坑は掘りぬきのものが多く537号遺構のように木組の痕跡は他の土坑では確認されていない。このような木組の構造がどのような理由によってなされるかは明確ではないが，地下式土坑どうしが同一地点で重複して埋土中に土坑の壁面が設定される場合や，土質が軟弱で地盤が悪い場合などに限ってとられる工法ではないかと推定される。537号遺構の埋土上部には焼土層があり，陶磁器が大量に出土し，Ⅲ期の代表的な一括資料として重要である。537号遺構は267号遺構や335号遺構などの「外局」を構成する建物遺構の外縁部にあたるため，これらの施設で使用された器材が焼土などとともに一括廃棄されたものと推定される。

515号遺構（第25図）　Ⅰ－11区の地下式土坑である。台形の平面形をもつ土坑本体の角の部分に入口が付設された4類の地下式土坑である。埋土上層には焼土層があり，下層からは犬骨が出土している。

230号遺構（第19図）　Ⅰ－12区の調査区西端に位置する地下式土坑である。擁壁に隣接しているために全体の形状は把握されなかったが，少なくとも3基の地下式土坑が入籠状に複雑に重複しているものと推定される。1類の地下式土坑と考えられる。

869号遺構（第21図）　J—10区の地下式土坑である。長方形の平面形をもつ土坑で，外見上は1類に類似しているが，緩く内傾して立ち上がる壁面や，底面中央の皿状の浅いピットの存在等から4類の土坑と考えられる。

890号遺構（第21図）　J—10区の地下式土坑。長方形の平面形をもつ1類の土坑である。

902号遺構（第21図）　J—9区の地下式土坑。長方形の平面形をもつ1類の土坑である。

565号遺構（第24図）　H—7・8区の地下式土坑。隅丸方形の平面形をもつ土坑の上部に正方形の入口が付設した4類の土坑である。断面の形状は土坑本体がドーム状の天井をしているため袋状土坑に類似した形になる。土坑内は焼土を大量に含む土で充塡されている。

904号遺構（第29図）　I—5区に位置し，917号遺構を一部破壊している小形の地下式土坑。1類の土坑で，埋土は粘土を含む土で充塡されている。

887号遺構（第20図）　J—5区の地下式土坑。隅丸の長方形の平面形をもつ1類の土坑。

677号土坑（第22図）　I—3区の地下式土坑。隅丸方形の平面形をもち，やや内傾して立ち上がる壁から4類と考えられる。北側の壁面には杭穴を伴った礎石様の石が付設されている。

953号，916号，1000号遺構（第30図）　H・I—6・7区にまたがって複雑に重複した3基の地下式土坑。このうち916号遺構が最も時期的に古く，953号と1000号遺構がほぼ同時期と考えられる。916号遺構は長方形の平面形をもつ1類の地下式土坑で，953号と1000号遺構はともに階段が付設している6類の地下式土坑である。それぞれ不揃いの階段が付設され，土坑本体の底面には皿形の土坑やピットが付設されている。これら2基の地下式土坑は入口が共用されていたものと推定される。

820号遺構（第23図）　調査区北西隅のH—3区に位置する地下式土坑。新旧2期の土坑が重複しており，土層は同時に埋没したことを示しているが南側の土坑が新期と推定される。旧期の土坑は痕跡しか遺存していない。新期の土坑は，台形の平面形をもち，壁がやや内傾して立ち上がることから3類の地下式土坑と推定される。底面中央にはL字状の浅い落ち込みが確認された。

464号遺構（第23図）　820号遺構の東隣，Ｉ－２・３区に位置する地下式土坑。南北に細長い平面形をもち，南側には縦杭が北側には天井のない土坑本体が確認される。また，西壁は820号遺構を破壊しているため壁面に埋土が露出しており，壁体を保護するための杭あるいは柱の痕跡が確認される。このことから土坑の天井は堀り抜きではなく板材などを差し掛けた構造ではないかと推察される。埋土中からは遺物はほとんど出土しなかったが，埋土最上部ではVI期の遺物が埋土が陥没して窪みになった所から多数検出された。

(2)　調査区北東部の遺構群

調査区北東部の遺構群は，中央部をＬ字形に区画する布掘り柱列（470号遺構）によってさらに東西に区分される。絵図との対比では東側の建物遺構が「頭分一」の高級な武士の邸宅に，西側は「役所四」と記されており何らかの公的な施設と考えられる。

640号遺構　Ｏ・Ｐ－７・８区に位置する大形の堀立柱の建物遺構。東西方向の二間（柱穴間2.7m），南北方向二間（柱穴間3.6m）の規模を有する。柱穴は長さ２m幅１m深さ1.2mで，底面には柱当たりが確認される。

574号遺構　Ｎ・Ｐ－４区に位置する建物遺構。柱穴列は南北方向一間（柱穴間2.7m），東西方向は四間（柱穴間3.6m）の規模を持つ東西に長い建物遺構である。

724号遺構　Ｎ・Ｐ－３区に位置する建物遺構。574号遺構の北側にある東西に長い柱列である。南北方向一間（柱穴間3.6m），東西方向四間（柱穴間3.6m）の規模を有する。柱穴は長さ２m幅1.5m深さ1.2mほどのかなり大きなものであるが，大部分は他の遺構に破壊されており対応関係は明確ではない。塀の基礎の可能性もある。

725号遺構　Ｌ・Ｍ－４区の建物遺構。724号遺構と同様の構造をもつ柱穴列であるが，他遺構との重複が激しく，柱穴の対応関係は明確に把握できない。

442号遺構　Ｑ－６区に位置する井戸遺構。方形の堀り方の内部に井桁を組んだ跡が確認されている。井戸上部が井桁積みと考えられる。

468号遺構（第19図）　Ｑ－７区に位置する地下式土坑で長方形の平面形をもつ１類の土坑。

409号遺構（第17図）　N－5区の地下式土坑。長方形の平面形をもつ1類の土坑である。

700・701号遺構（第19図）　M・N－5区の重複した2基の地下式土坑。西側の700号遺構の方が新期である。ともに長方形の平面形をもつ1類の地下式土坑である。これらの土坑の周囲には数多くの柱穴が検出されているが，いずれも重複が激しく明確な対応関係を把握するすることは困難である。

384号遺構（第17図）　N－8区の地下式土坑で長方形の平面形をもつ1類の地下式土坑。

517号遺構（第24図）　O－8区の地下式土坑。隅丸の長方形の平面形をもつ土坑本体の東壁に接続して入口が付設される4類の土坑。入口部分は崩落して原形を留めていない。

470号遺構　調査区北東部を東西に区画し339号の塀の遺構とともに573号の建物遺構を囲む塀の基礎遺構。柱列は幅60cmほどの溝状の掘り方の内部に一間間隔で配列された布掘り柱列である。柱の痕跡が空洞になって残されているほか，柱穴の底面には柱当たりが確認される。

339号遺構　III期の遺構群の東端を区画する塀の基礎遺構。470号遺構と同様の構造をもつ柱列である。

573号遺構（第13・14図，写真8）　調査区北西部に位置する大規模な建築遺構。建築遺構は礎石列とその掘り方，建物を取り巻く雨落ち溝，縁辺部に位置する円形の土坑。建物内部に付設された地下式土坑等から構成される。建物の基礎遺構は一間（六尺）間隔で配列された主柱の礎石とその間に半間間隔で配列された支柱のやや小型の礎石から構成される。石材が再利用されるため全体的に礎石の遺存状態は悪く，南西側に一部が残るのみで他は礎石の掘り方しか確認されない。また，南西角の支柱の礎石には山上会館地点の石垣の石材に見られるものと同一の円を縦に区画した文様の刻印が施されている。礎石列は東側と北側が他遺構によって破壊されているため，全体の規模は把握できないが，西側に一間二間の張り出し部をもつ南北十間東西五～六間の規模の長方形の建物と推定される。建物の回りは浅い雨落ち溝が周回しており北側では平瓦を縦に据えて溝としている。また，隣接して丸瓦を組合わせて囲んだ遺構も検出されている。また，北端部に1基（295号遺構）と西側の張り出し部に隣接して1基（591号遺構）の円形の土坑が検出されている。いずれも，円形の掘り方の内部に桶を据えた痕跡が確認されていることから，便所の遺構ではないかと推定される。また，建物遺構の内部からは3基(592・

621・336号遺構），縁辺部からは2基（244・252号遺構）の地下式土坑が確認されている。

592号遺構（第25図，写真8）　S－6区573号の建築遺構の西側に位置する地下式土坑。方形の平面形の土坑本体の角に接した上部に方形の入口が付設された4類の地下式土坑である。入口の周囲には角材を井桁状に組んだ痕跡が確認される。これはこの土坑が建物の床から直接出入りできる構造となっていたことを示しているものと考えられる。

621号遺構（第26図）　S－6区573号遺構の中央部に位置する地下式土坑。長方形の平面形をもつ土坑本体の東側の壁に接した上部に長方形の入口が設置される。底面中央には浅いピットが確認される。

336号遺構（第26図，写真9）　S－5区573号遺構の中央西よりに位置する地下式土坑。方形の平面形をもつ土坑本体の直上に方形の入口が設置されている。底面中央の入口直下の場所には長方形のピットが2基が平行して配列されており，梯子などの昇降具を固定するためのものと推定される。

244号遺構（第15図，写真9）　T－8区573号遺構の南東角部分に位置する地下式土坑。主軸を直交させた2基の土坑が重複しており，北側の小形の土坑が新期である。旧期の地下式土坑は長方形の平面形をもち壁がそのまま立ち上がる1類の土坑である。新期の土坑は旧期の北側を破壊して掘り込まれている。長方形の平面形をもち壁が垂直に立ち上がる1類の土坑である。壁際には柱列が周回しており，遺構埋土の軟弱な壁面を支える抱壁の基礎と推定される。発掘時には壁面に板材の圧痕が確認された。

252号遺構（第27図）　U－7区573号遺構の東端に位置する地下式土坑。長方形の平面形をもつ土坑本体にやや位置を西にずらして方形の入口が付設されている。土坑底面には1段下がった部分がある。埋土には大量の焼土が充塡されていた。

262号遺構（第20図）　V－4区の地下式土坑。隅丸の正方形の平面形をもつ1類の土坑。

292号遺構（第20図）　U－6区の地下式土坑。隅丸の正方形の平面形をもつ1類の土坑。

261号遺構（第20図）　U－7区の地下式土坑。隅丸の正方形の平面形をもつ1類の土坑。

192b号遺構（第10図）　V－7区の地下式土坑。192号遺構は2基の土坑が重複しているが，東側の新期の192b号はIII期に属する。長方形の平面形をもつ1類の土坑である。底面の一部は旧期の192a号の埋土にあたるためやや陥没している。

259号遺構（第21図）　T－9区に位置する地下式土坑。正方形の平面形をもち，壁はやや内傾しながら立ち上がるが1類の地下式土坑である。

(3)　調査区南西部の遺構群

調査区南西部の遺構群は289号の塀の基礎遺構で西側を，466号の塀の基礎遺構で南側を，339号の塀の基礎遺構によって東側をそれぞれ区画された範囲に存在する。この地区は絵図との対比によって西側に「役所五」東側に「役所六」が位置していることが明らかとなっている。この地域を東西に区分する塀の基礎のような遺構は存在しないが，Q—11区に部分的に残る石組の溝状遺構（165号遺構）を地割りを示す遺構ととらえるとRライン付近で区分されると考えられる。一方，北側の境界はあまり明確ではない。絵図では北側の「役所五」と「頭分一」の間には幅八間の道路が描かれているが，遺構配置で道路を示す明確な痕跡は，Q～9区で砂利面が部分的に検出された他は確認されなかった。この道路は前段階のII期の373号遺構の石組溝で区画されている可能性が高いといえる。しかし，289号と339号の塀の基礎遺構がいずれも道路が位置すると推定される9ライン付近で，途切れずに連続して検出されていることから，八間幅の道路は短期間で改修された可能性が高い。南西部では大規模な建築遺構は確認されず，対応関係の把握できない柱穴や塀の基礎と考えられる布掘りの柱列が部分的に確認されるだけで，他には地下式土坑が4基確認されているのみである。

466号遺構　N～R—14区を南北にはしる柱穴列。柱穴は直径60cmほどの小形のもので17基確認される。絵図との対比によって，役所などの施設と南隣の園地を区画する塀の基礎遺構と考えられる。南端部ではII期の塀の遺構を破壊している。

165号遺構　R—12区に位置する溝状遺構。切石を積んだ石組溝であるが，極く一部のみが遺存している。調査区南部を東西に区切る地割り溝と推定される。

539号遺構（第18図）　N—11区の地下式土坑。長方形の平面形の1類の地下式土坑である。

444号遺構（第18図）　P—10区の地下式土坑。長方形の平面形の1類の地下式土坑である。

241号遺構（第27図）　P—10・11区の地下式土坑。台形の平面形をもつ土坑本体とその壁の一辺に長方形の入口縦坑が接続した4類の地下式土坑である。入口直下の底面には段状の作り出しがある。

704号遺構　Q—12区に位置する地下式土坑。長さ約2m幅1m深さ約2mの小形の3類の土坑である。

231号遺構（第16図）　U—12区の地下式土坑。長方形の平面形の1類の土坑である。西側の底面には角材の痕跡が確認される。これは北半部が底面も壁もI期の大形土坑の埋土の中に位置するため，壁体を補強する施設と考えられる。

406号遺構（第33図，写真7）　U—14区に位置する板組の土坑。II期の311号の建築遺構に近接していることから，II期の遺構の可能性があるが，主軸がIII期の遺構配置に一致していることからIII期の遺構と考えられる。長さ3m幅1mの長方形の細長い掘り方の中に板材を組んだ木枠を埋設し，内側には杭が10本打ち込まれて壁を支えている。埋土からは焼土が検出された。

544号遺構（第32図）　S—14区に位置する小形円形の土坑。埋土からは魚骨等の自然遺物が出土した。

568号遺構（第32図）　Q—15の小形不整形の土坑。埋土からは魚骨や貝殻等の自然遺物が出土した。なかでも大型のフグの歯骨が注目される。

(4)　調査区東端部の遺構群

調査区東端部分では，南北方向に延びる大規模な遺構が幾つか確認されている。

264号遺構（第33図）　U・V区を南北に横断する浅い溝状遺構。幅は約5mで深さは約60cmである。埋土はほぼ単一層相の暗褐色土である。道路状遺構の可能性が高いと推定されるが，底面はそれほど硬化しておらず，轍などの痕跡も確認されなかった。調査区北東部の地下式土坑の上半部を破壊している。

365号遺構（第33図）　U・V—11・12区に位置する長方形の大形土坑。264号遺構に上半部を破壊されている。

255a号遺構（第33図）　T－4～7区に位置し，573号の建物遺構の東縁を破壊している長方形の大形土坑。半島状の張り出し部分が2カ所確認される。採土坑の可能性が高いと推測される。北端部では大量の瓦が出土した。

第4節　IV期（全体図4，写真15）

IV期の遺構配置は前時期とは大きく異なっている。III期の遺構配置は調査区設定軸に一致していたのに対して，IV期では調査区を北西から南東方向に斜に走る大きな塀の基礎遺構（206・257号遺構）によって大きく区分けされている。塀の内側は調査区全面に渡って植栽痕と考えられる円形の土坑が分布している。また，調査区北東部ではこれらの植栽痕が塀の基礎遺構に沿って配列されている状況が確認される。そして，これらの植栽痕は塀の北側では確認されていないことから，斜めに走る大形の塀は植栽痕の集中する園地と他地区を区画する地割りの塀であったと推定される。後に「坂下御厩」が造営された時期の絵図には厩の南側は「梅畑」と記されていることから，この園地はIV期の段階で形成されたものと想定される。塀の内側には植栽痕の他に，調査区南東部で複雑に重複した溝状遺溝が，調査区北西部では大形の土坑が数基確認されている。調査区南東端で柱穴列（303号遺溝）が検出されている他は大規模な建築遺溝は確認されていない。

上記のような遺溝群の配置を描いている絵図の存在は，現在までのところ明かになっていない。したがって，絵図等からIV期の年代を措定することができないため遺溝面の相対的な序列の中でそれを求めることにする。前時期のIII期の終焉を第2焼土面の形成時として，その年代を元禄十六年（1703年）とすれば，この年代をIV期の年代の上限とすることができる。一方，下限の年代としては，後続する5期すなわち「坂下御厩」の創建年代になるが，こちらも年代を特定することが困難で1750～60年頃という漠然とした年代しか与えられない。そこで，さらに年代を絞りこむために調査区東側に分布する焼土層の存在に注目したい，この焼土は第1焼土面とよばれるもので調査区東側の他に，北西端の大形土坑の埋土の中にも一括廃棄された状態で厚く堆積している。これらの土坑のなかで564号遺溝から出土した硯の背面には「享保十五年五月吉日」の釘書が施されている。『加賀藩史料』によると当該時期の本郷邸の火災の記事は3件記述されている。「・・享保六年（1721年）三月四日追分御門等類焼，十五年（1730年）正月十二日根津の火災に邸第焼失し，元文三年（1738年）正月二十九日大聖寺藩邸より出火して，加賀藩邸の割場・御作事所等を失ひ・・」このうち，享保六年の火災は調査区から離れた場所のため関連性がないとして，享保十五年と元文三年のいずれかの火災によって第1焼土面が形成された可能性が高い。年代が接近しているため考古学的に年代を措定することは困難であるが，564号遺溝から出土した硯の記年の「享保十五年五月吉日」を考慮すると，少なくともそれ

以降であることから，元文三年の可能性が高いといえる。このことから，Ⅳ期の下限年代は1930～40年前後と推定される。

206・257号遺構（写真16）　調査区北東部を斜めに横切る布掘り礎石列（206号遺構）と柱穴列（257号遺構）。ともに園地とその他の地域を区画する塀の基礎と考えられる。257号遺構は幅１m深さ1.2mほどの溝状の掘り方の中に半間間隔で礎石を配置した遺構であるが，257号遺構の柱穴に破壊されているため東端の部分にしか礎石は残っていない。一方，206号遺構は幅1.2m深さ1.5mほどの楕円形の掘り方の中に，北側に主柱を支える方形の掘り方が，南側の壁面には斜めに支柱の掘り込みがある。約一間間隔で206号遺構に重複して配列されている。

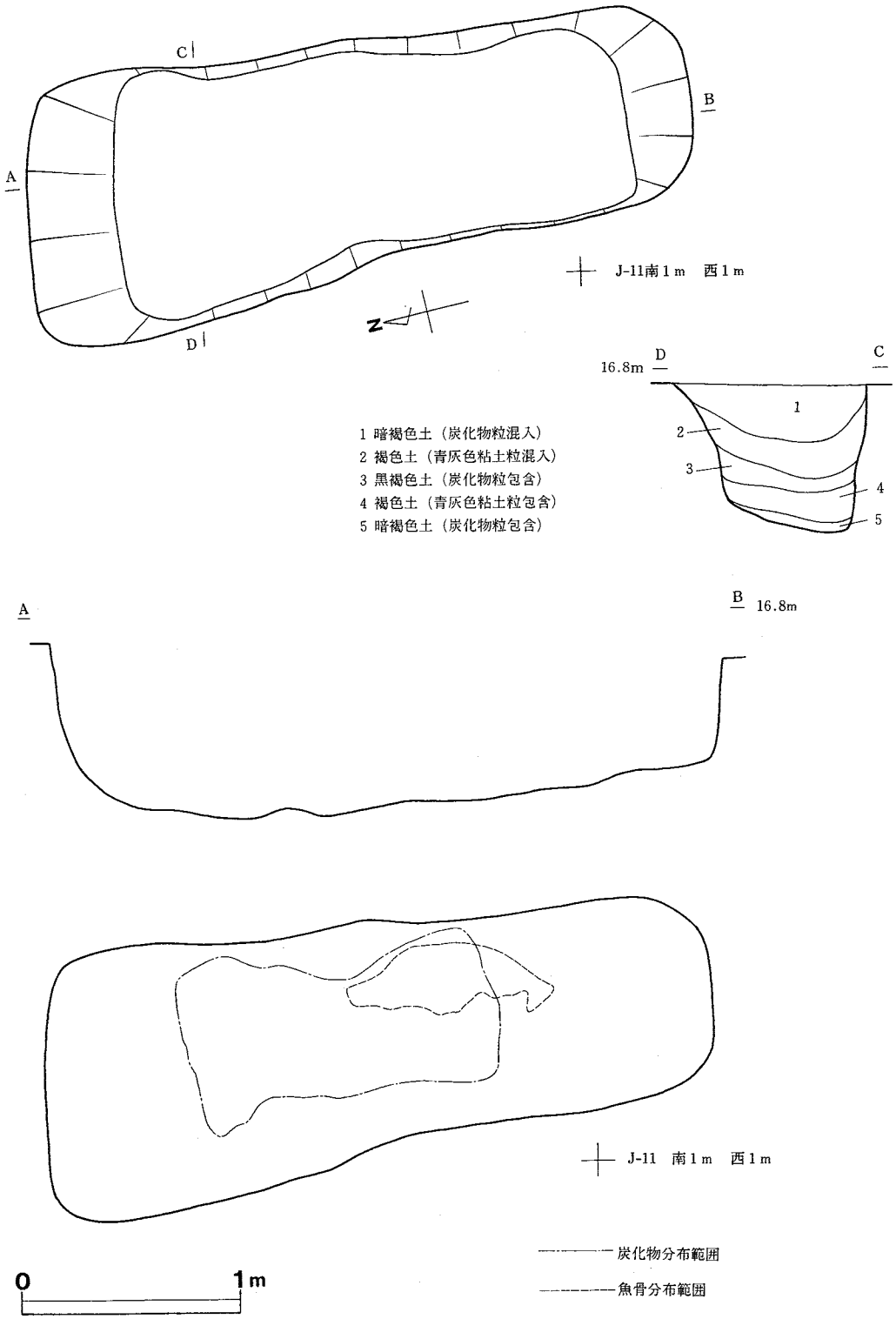
185号遺構　調査区南側のM～P－４～７区まで全面に渡って分布する円形の土坑群。これらは直径約２mの円形の平面形で深さは約50cmほどある。土坑の中央部が直径約１mにわたって20～30cmほど盛り上がっているという特徴をもつ。この土坑は，その形状が現在植栽する場合に掘られる穴の形状と一致することから，植栽痕と推定される。

303号遺構　調査区東端に位置する柱列。柱列は一間間隔で２列配列されている。柱列の堀り込まれている面は砂質土で堅く締まっている。これらの柱列は園地を区画する何らかの施設の遺構と推定される。

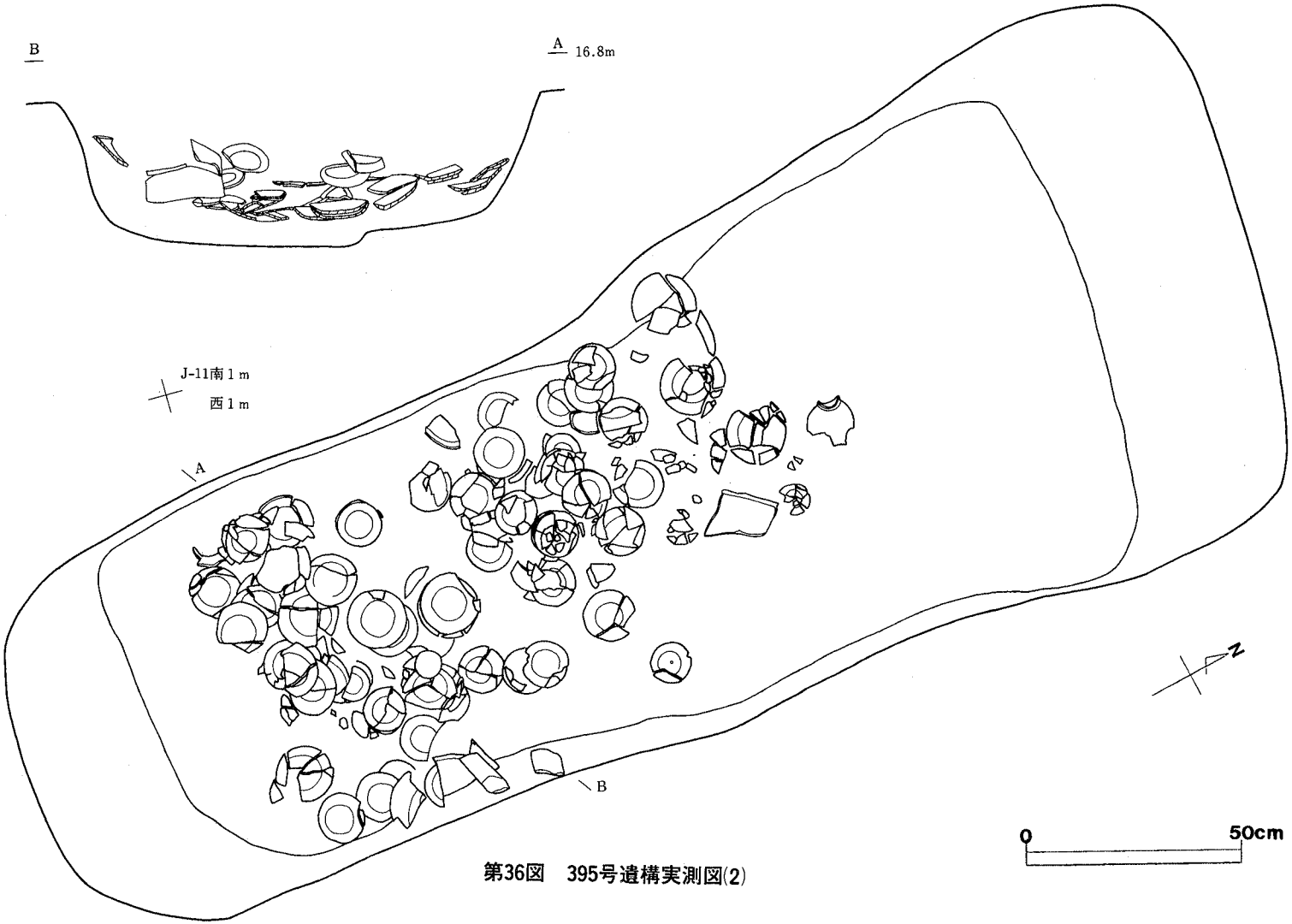
第５節　Ⅴ期（全体図）

Ⅴ期は前時期の遺構配置と大きく異なり，調査区設定軸に一致した遺構配置になる。そして，調査区内の遺構配置は東西方向に延びる長大な柱穴列によって，南北に大きく区分され，調査区北側には大規模な建築遺構が集中している。これらの建築遺構は西側の３棟の長大な柱列と東側の長方形の建物跡から構成され，排水溝と推定される石組み溝や木組みの溝状遺構などが付設されている。これに対して，調査区南側には東西方向に延びる大きな塀の基礎と推定される遺構（164号遺構）や，その西に位置し南北方向に延びる石組みの溝状遺構（364号遺構）等が存在するだけで，調査区全面に渡って植栽痕と推定される円形土坑群が広がっている。

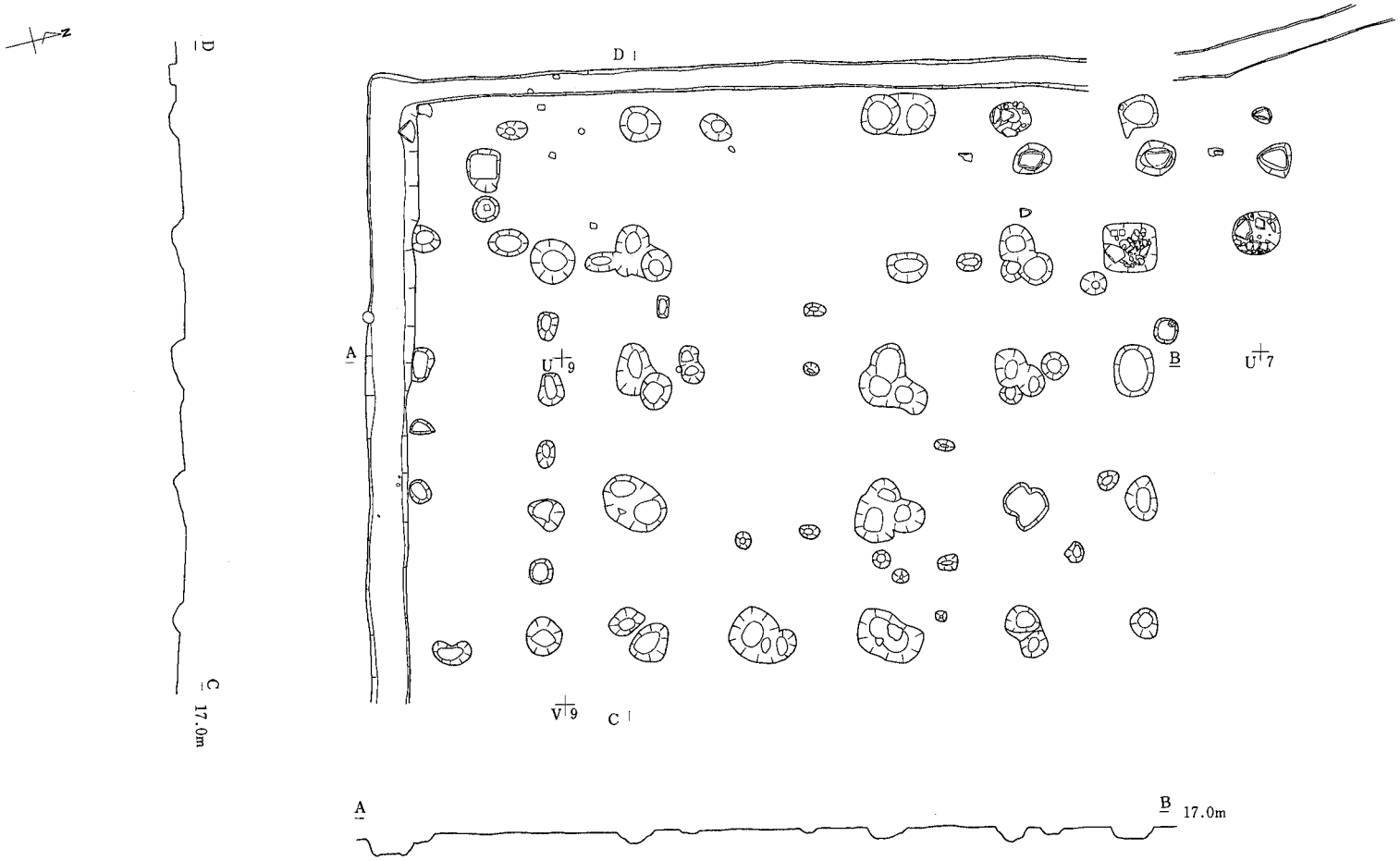
このような遺構配置に合致する絵図としては，前時期の園地が改修されて坂下御厩として厩舎が造営され馬場の施設が整備された時期の建物配置を描いた絵図があげられる。坂下御厩を描いた絵図としては，「前田家本郷御屋鋪図」「江戸上屋敷御貸長屋図」「江戸本郷屋敷之図」「上屋敷総絵図」「前田家江戸本郷御上屋敷絵図」「東都御館諸士等小屋割図」「加藩本郷屋敷総絵図」



第35図　395号遺構実測図(1)

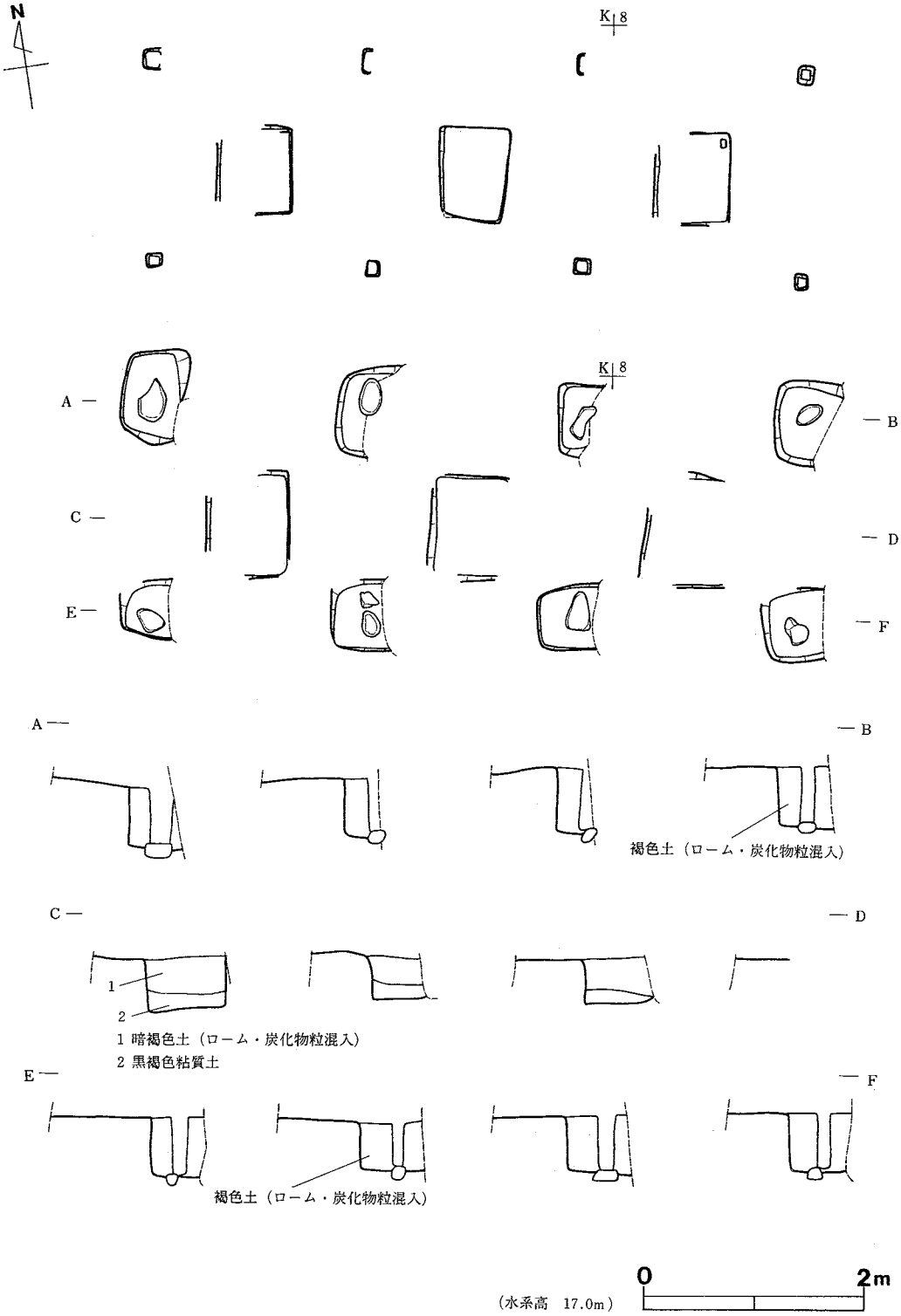


第36図　395号遺構実測図(2)

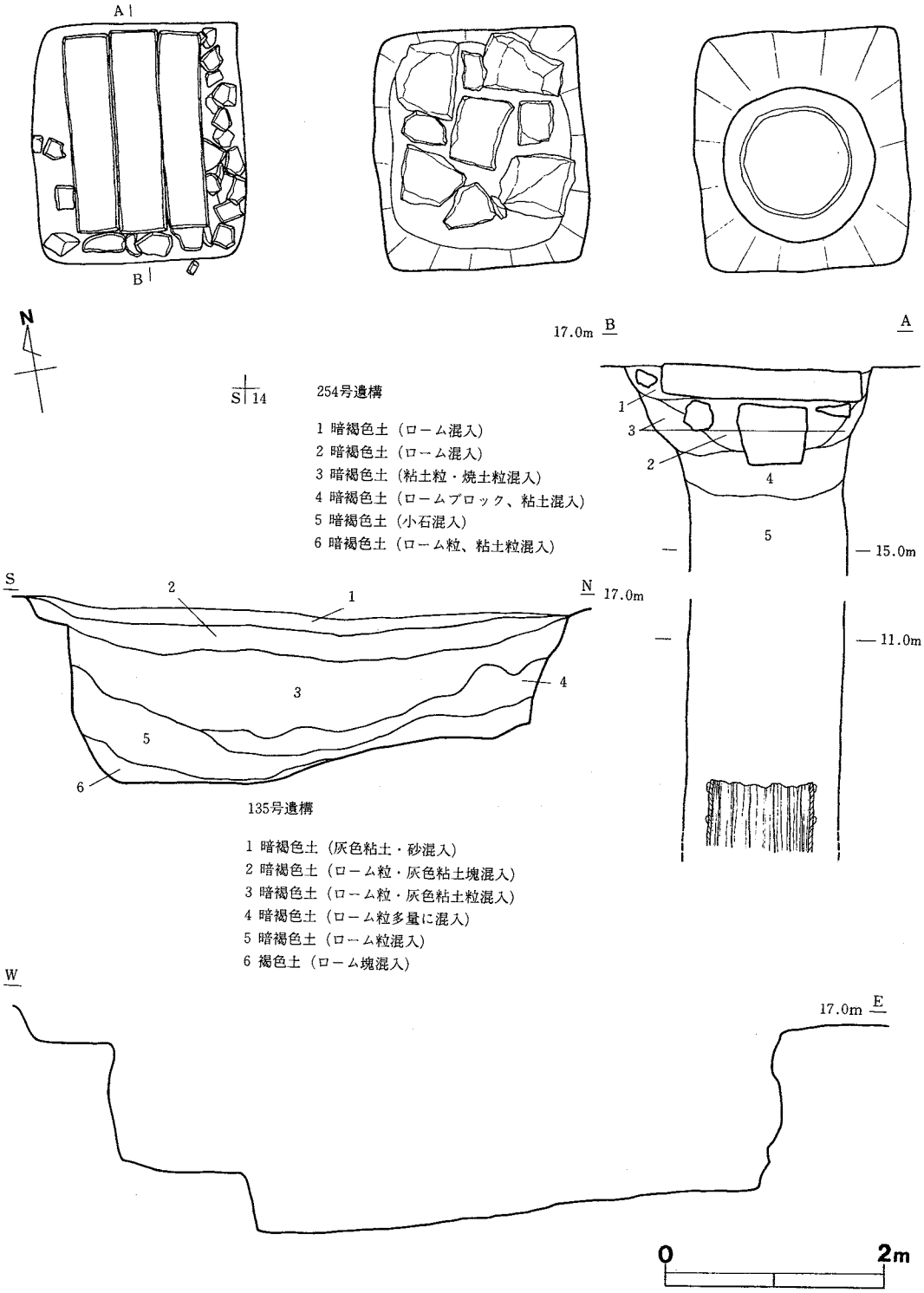


第37図　101号遺構（旧期）実測図

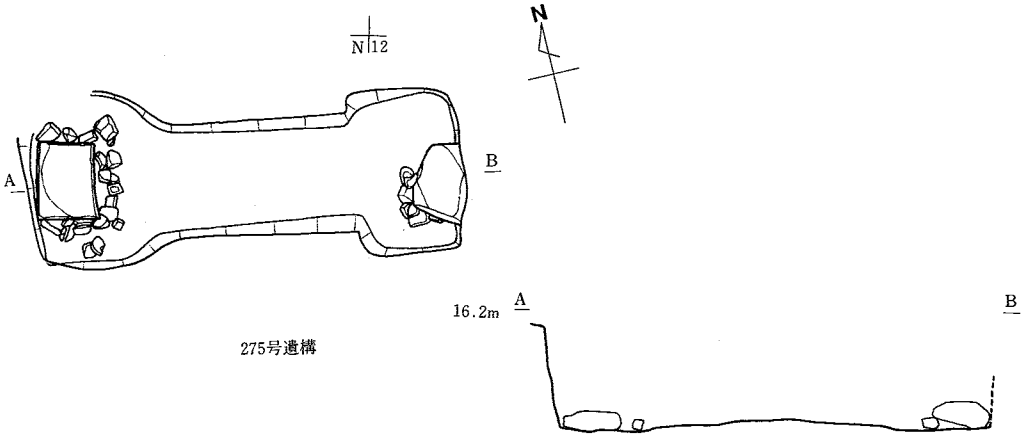
0　5m



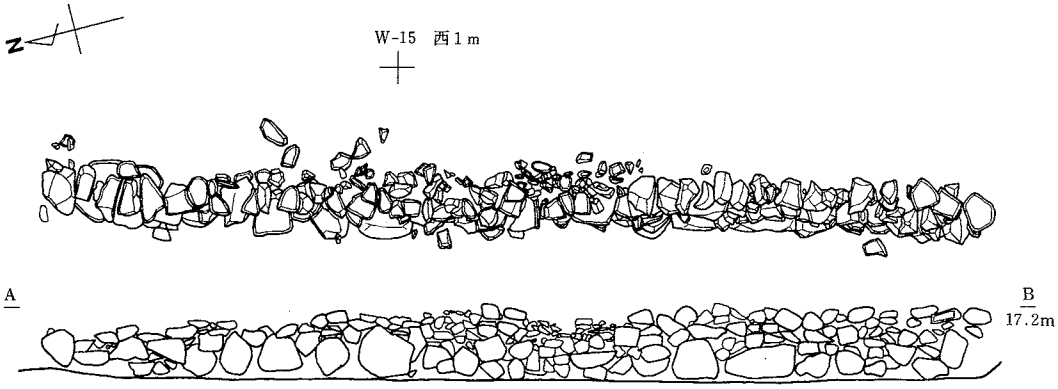
第38図　V期廐舎（南側）遺構実測図



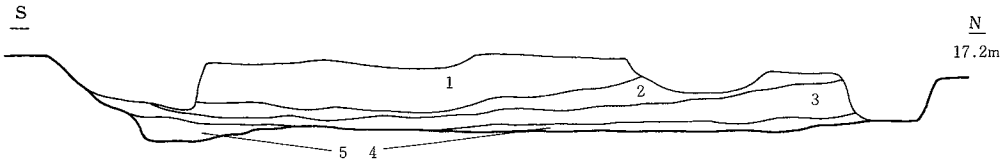
第39図　254号・135号遺構実測図



275号遺構



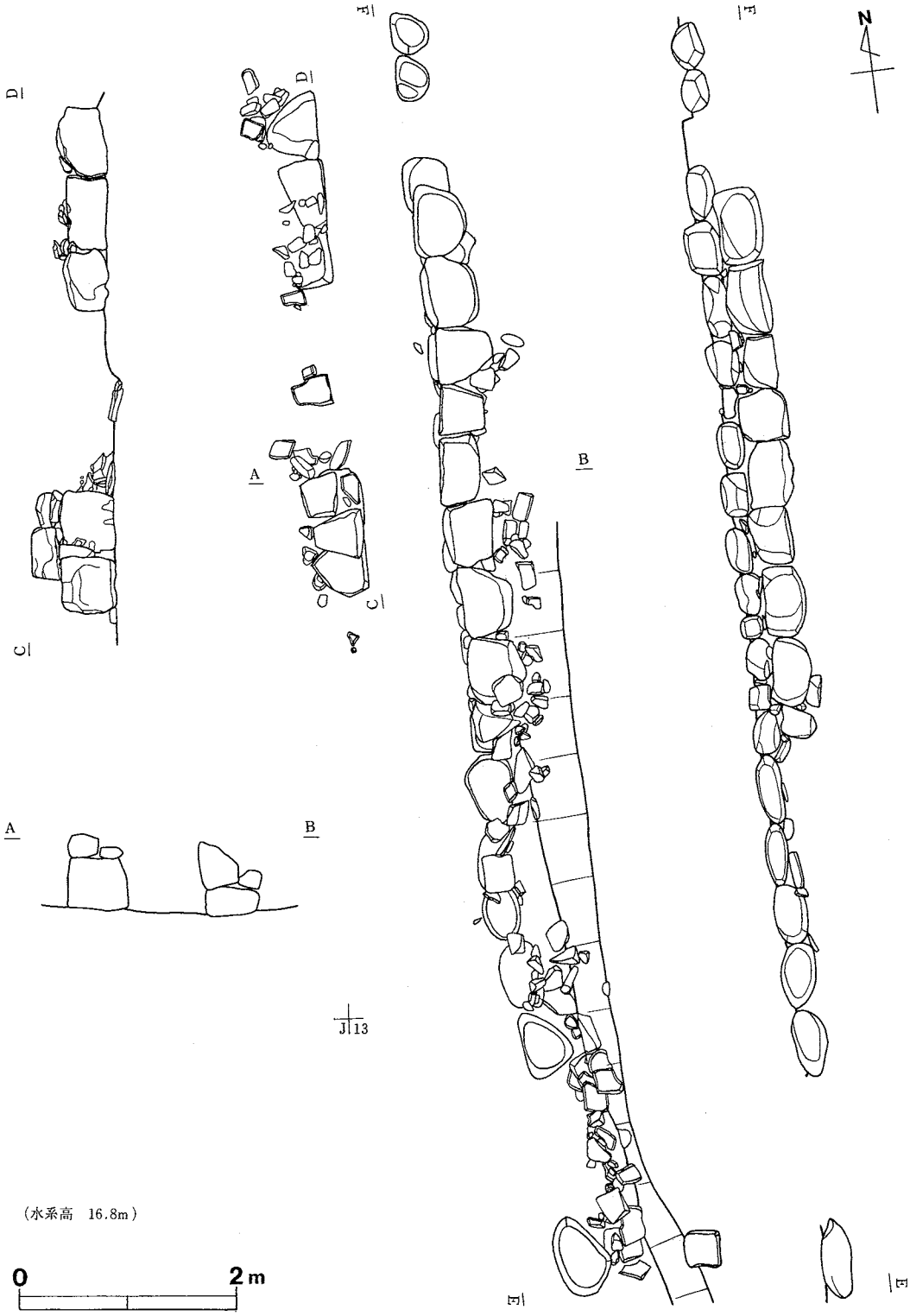
194号遺構



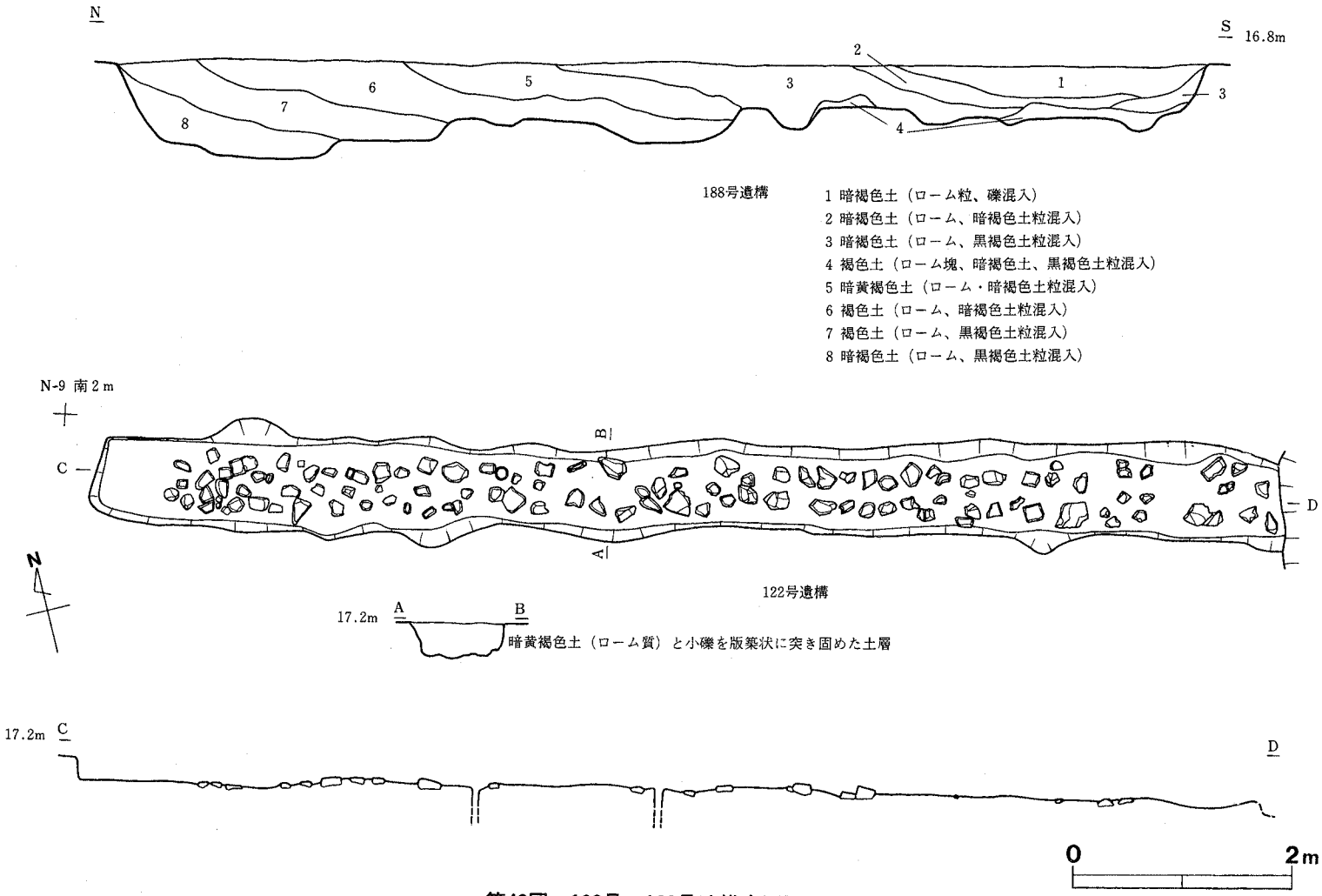
162号遺構

1 暗褐色土（ローム・焼土粒・礫混入）
2 褐色土（ローム・焼土粒・礫混入）
3 暗褐色土（ローム・暗褐色土・焼土粒混入）
4 暗黄褐色土（ローム質）
5 灰褐色土（酸化鉄含む）

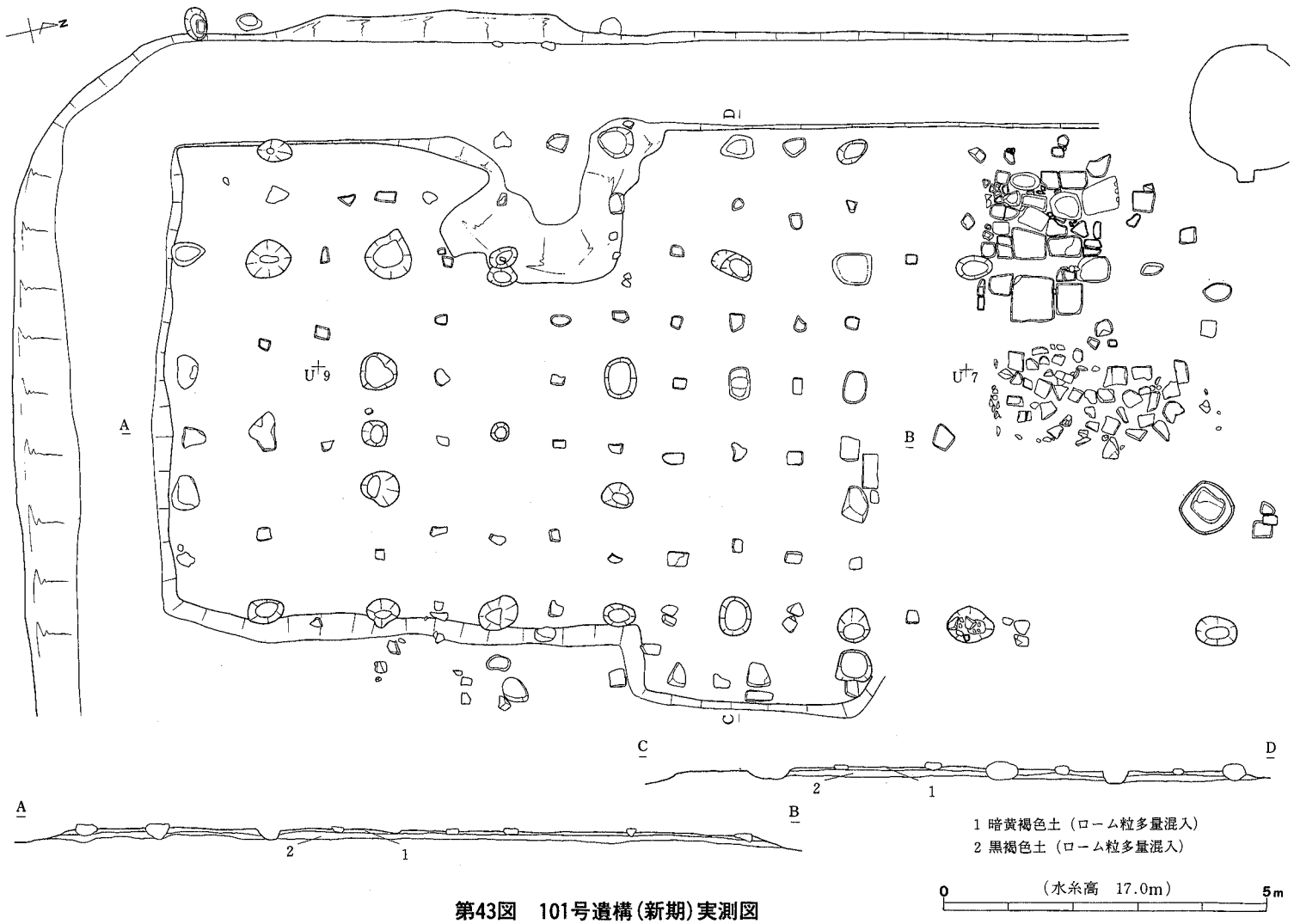
第40図　275号・194号・162号遺構実測図



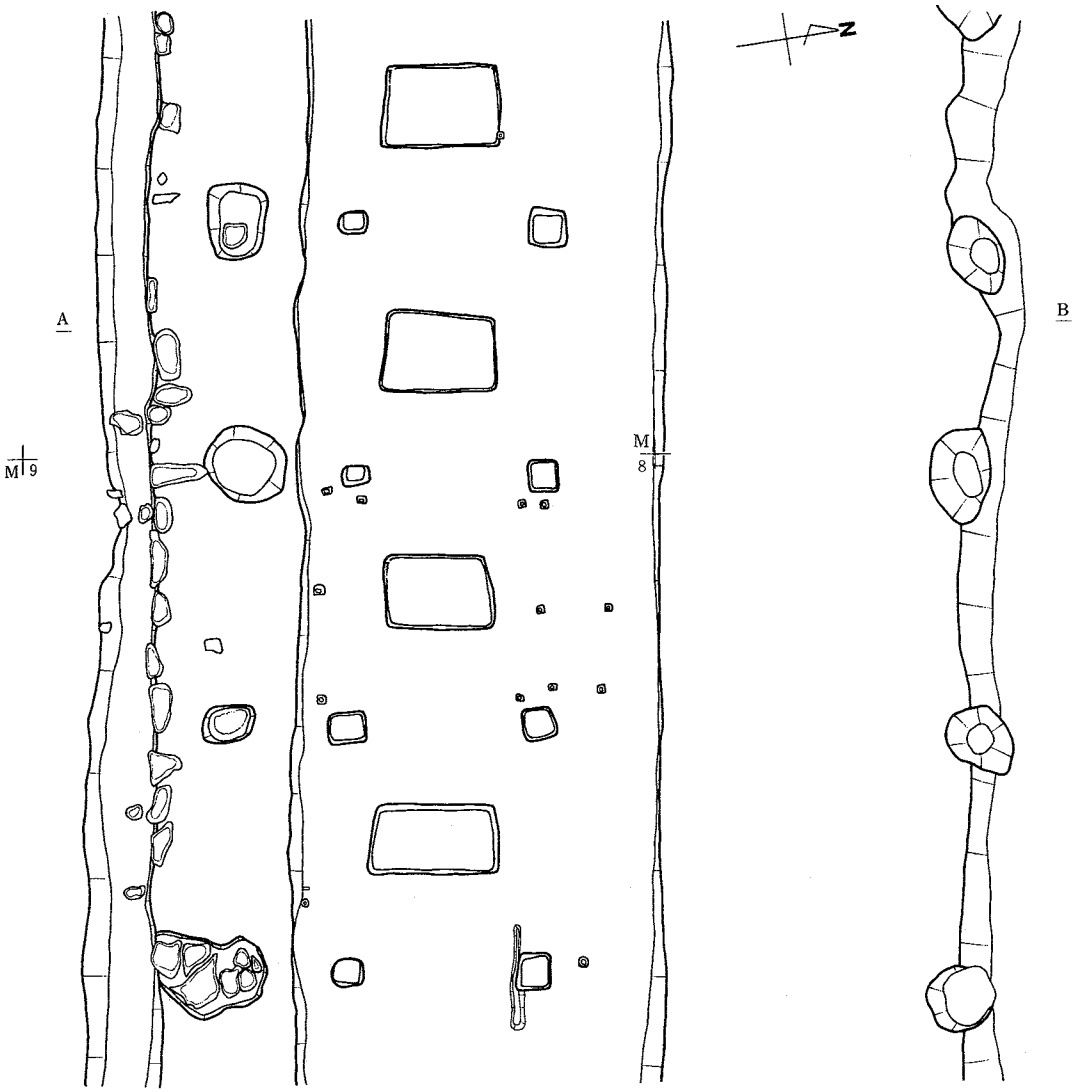
第41図　367号遺構実測図



第42図　188号・122号遺構実測図



第43図　101号遺構（新期）実測図

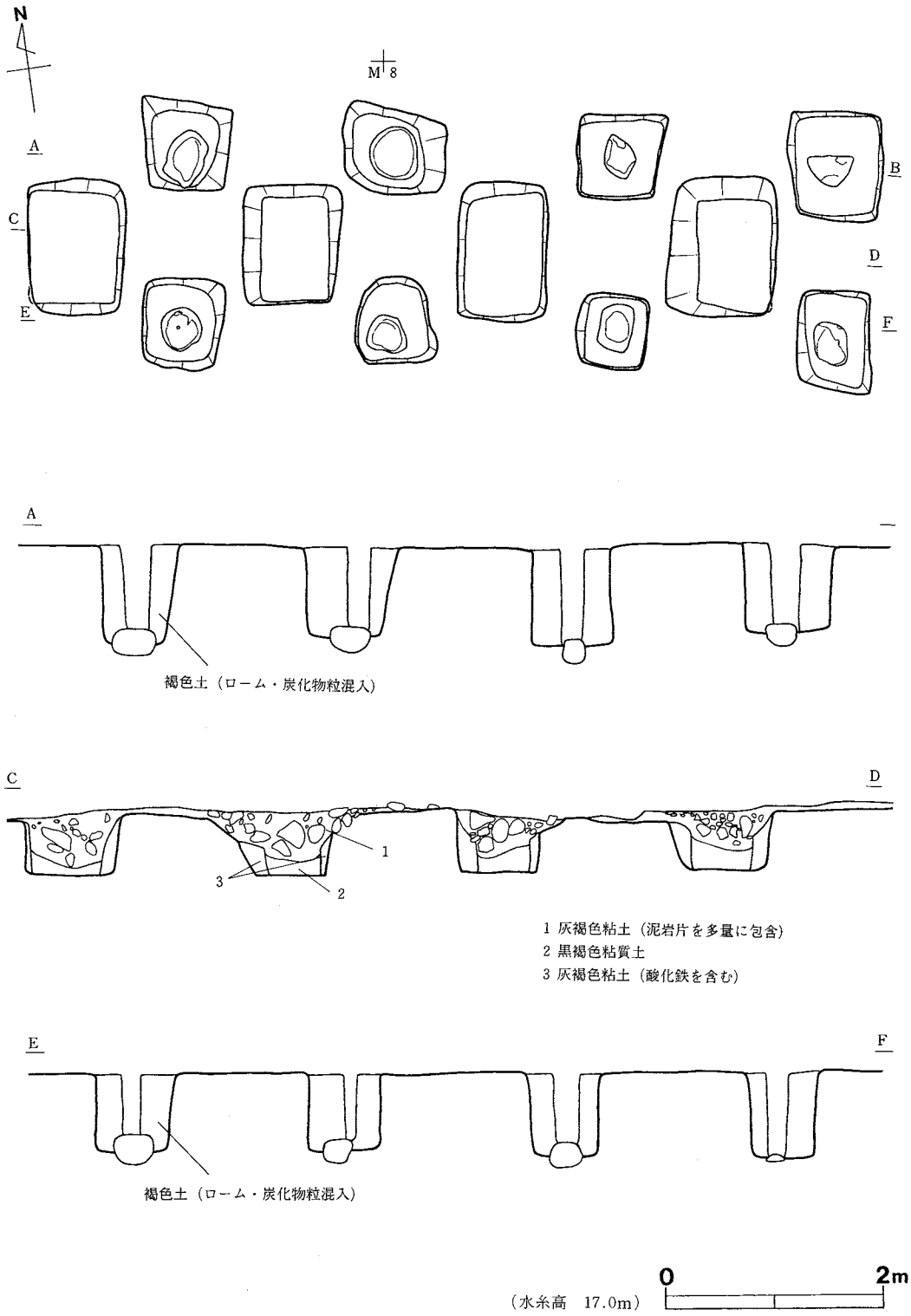


1 暗褐色土（ローム・炭化物粒混入）
2 褐色土（ローム・炭化物粒混入）
3 暗褐色土（ローム・炭化物。黒褐色土粒混入）
4 灰褐色粘土（泥岩片を多量に包含）
5 黒褐色粘質土
6 灰褐色粘土（酸化鉄を含む）

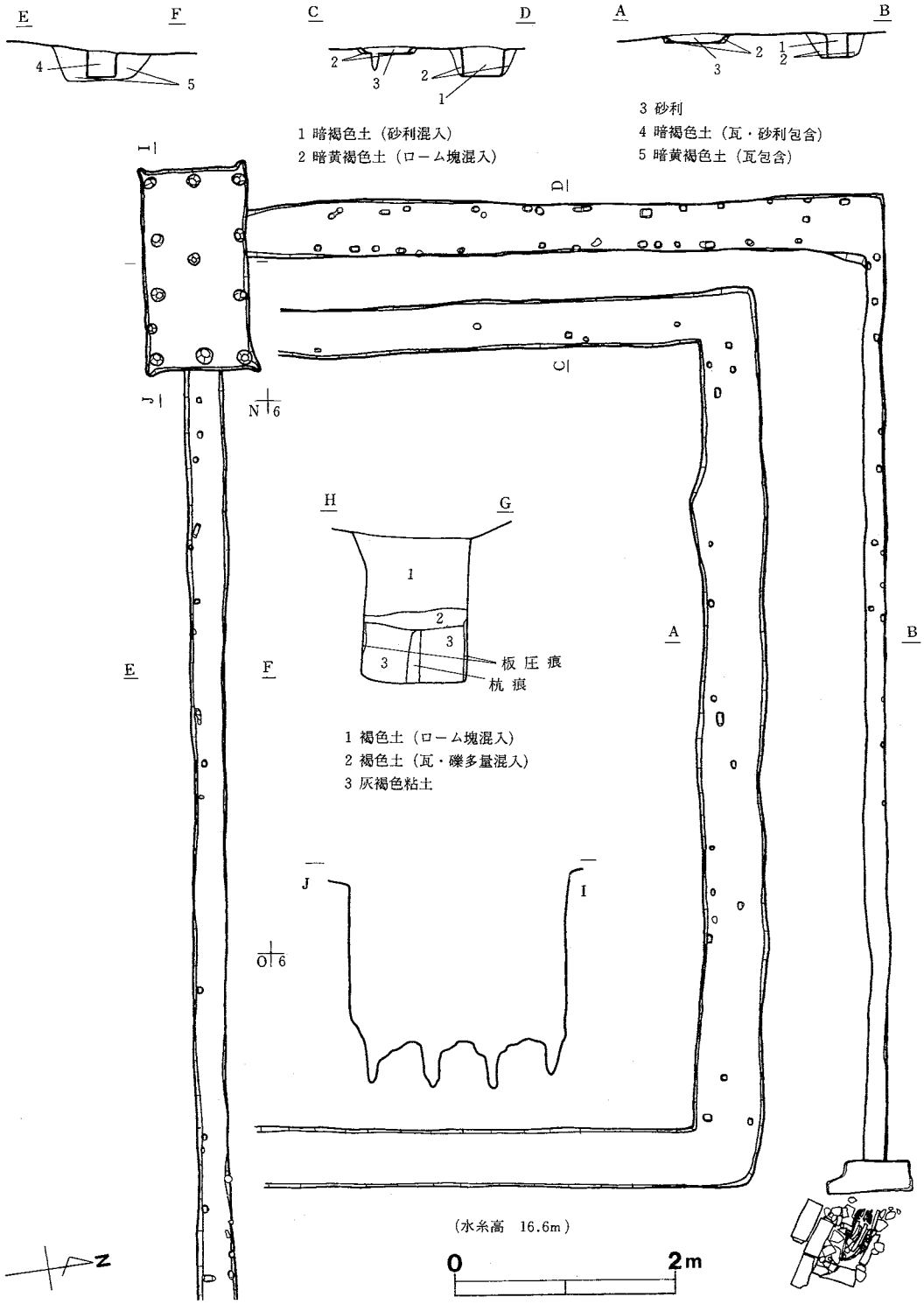
（水糸高　17.0m）

0　2m

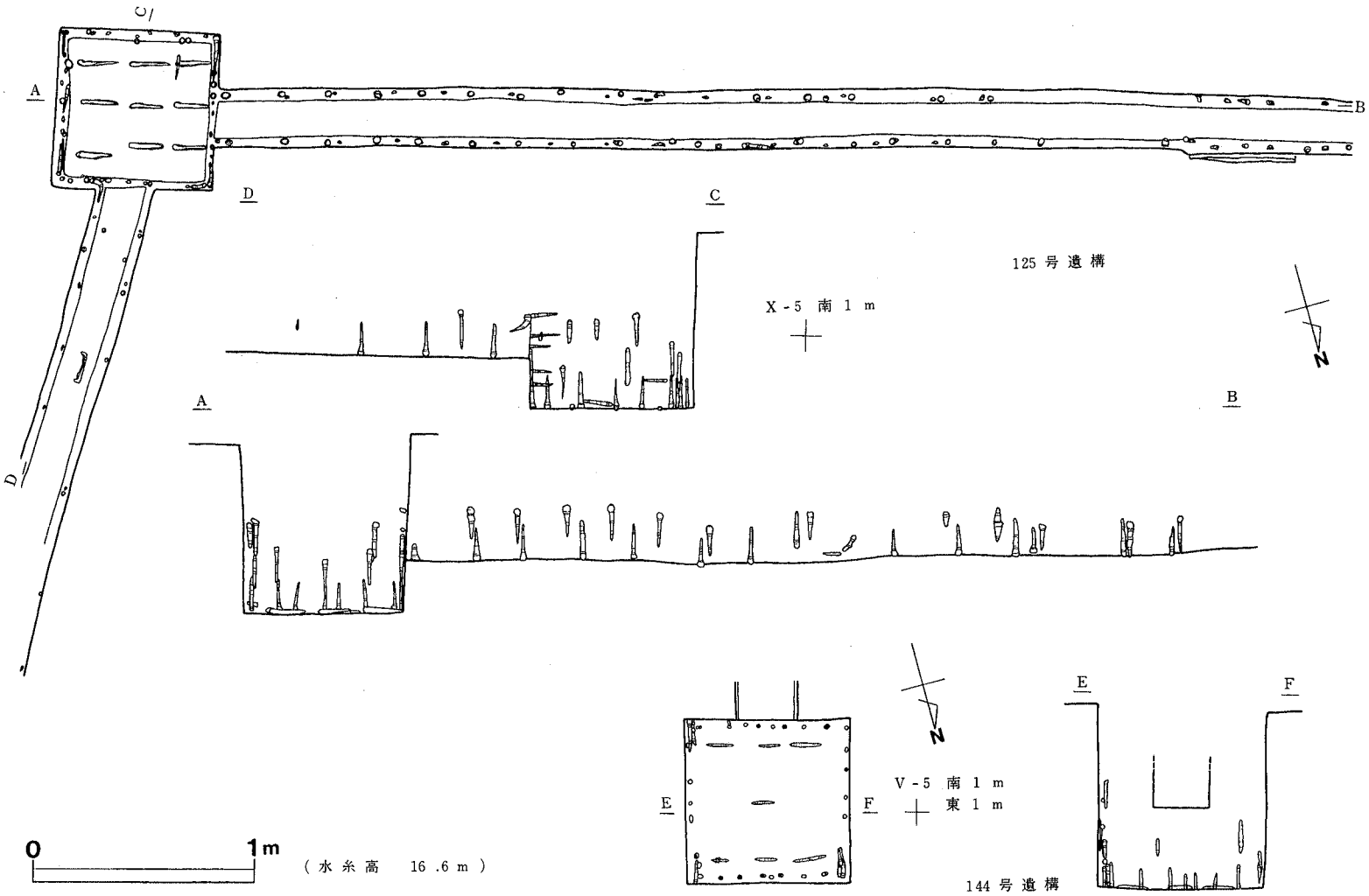
第44図　Ⅵ期廐舎（南側）遺構実測図(1)



第45図　Ⅵ期廐舎（南側）遺構実測図(2)



第46図　120号遺構実測図



第47図　125号・144号遺構実測図

等が現在までの文献史料の調査によって存在が明かになっている。これらの絵図の内で「加藩本郷屋敷総絵図」は厩舎の配置がコの字形に描かれているのでⅦ期の遺構配置と合致しているが，他の絵図は建物の配置が南北二棟の厩舎と間に挟まれて馬洗い場が配置されており，Ⅴ期あるいはⅥ期のいずれに対応するものか明確にしえない。この中で坂下御厩の最も古い絵図と推定されているのは「前田家本郷御屋鋪図」である。この絵図の年代は，絵図に記載されている御貸小屋の配置に関する史料の検討によって1761～1771年頃かあるいはそれより若干遡る年代が推定されている。この絵図では調査区の部分に「二十疋建」と「三十疋建」の２棟の厩とその間に馬洗場が，そして東隣には飼料所が描かれている。また，厩の南縁は塀で仕切られており，そこからは先は馬場になっている状況が描かれている。さらに，Ⅴ期の南側の厩舎では火災の痕跡が確認されていることも注意される。調査区東側に位置する覆屋を持たない厩の遺構はどの絵図にも描かれておらず，このような厩が，被災した際にその代用として仮設的に建設されていたものとも推定される。この厩の火災はⅣ期の元文三年の火災以降に相当すると考えられるが，『加賀藩史料』の火災の記事は安永元年（1772年）の西御殿等が類焼した火災まで見当たらず，厩の火災を安永元年の火災とすればこの年代がⅤ期の下限となろう。一方，上限年代については，前述のように絵図の年代が1761～1771年頃かそれをやや遡る時期が推定されることと，飼料所の基礎の整地面から「延享元年（1744年）九月吉日　上也」の線書きが施された硯が出土していることから，18世紀中葉すなわち1750～60年頃の年代が想定される。

(1)　調査区北西側の遺構群

調査区北西側の遺構群は南北２棟の厩舎と馬洗い場等から構成される。

南側の厩舎（第38図，写真17）は前述のように火災で焼失したことが発掘によって明かになっている。この厩舎は「前田家本郷御屋鋪図」では「十二疋建」と記されているが，発掘調査では10基の間仕切りしか確認されておらず絵図の記載内容と一致していない。厩舎の基本的構造は厩本体を構成する柱列（247号遺構）とその間に位置する馬の便槽（248号遺構）から構成される。厩の間仕切り柱列は約２m四方を１単位とした区画が10基並列している。柱は五寸角で，基礎は方形の掘り方の底面に礎石が据えられている。火災のために柱が基礎のなかで炭化した状態で検出されている。馬の便槽は間仕切り柱で２m四方に区画された部分の中央に位置している。厩の便槽の部分は他の場所よりも低くなっているが傾斜はしていない。厩舎の覆い屋の基礎遺構は厩を取り囲むように浅い皿状の柱穴が確認されているが明確には辿れない。

北側の厩舎も基本的な構造は同じで，絵図の「三十疋建」に相当する。北側の厩舎はグラウンド

の付属施設によって大きく破壊されており，西端部にごく一部が残る厩と覆い屋の基礎遺構から構成される。北側の厩舎はⅦ期まで大きな建て替えを経ずにそのまま使用されている。厩は間仕切りの柱列（221号遺構）と馬の便槽（222号遺構）から構成され，それを覆い屋の基礎（223号遺構）が取り囲んでいるが，北側すでに失われているので南側の柱列しか遺存していない。基礎構造は直径50～60cmの鍋底状に窪んだ円形の掘り方の内部に砂利や拳大の礫を詰めた構造である。

273号遺構（写真21）　南北の厩舎にはさまれた柱列。絵図との対比によってこの柱列は馬洗い場と推定されるが，Ⅵ・Ⅶ期のものと異なり排水溝や溜桝などの水廻りの施設を一切持たないため，確実に馬洗い場として機能したかどうかは不明である。「外繋ぎ」の可能性も考えられる。

478号遺構（第48図，写真25）　O－8区に位置する建物遺構。絵図との対比では「番所」と記されている部分に相当するが，その機能について詳細は不明である。遺構は四隅に突出部をもつ方形の掘り方の中に，礎石をもつ丸柱が4本据えられた構造をもつ。また，478号遺構の北側には隣接して礎石をもつ2基の柱穴が連結した構造をもつ477号遺構が存在する。これらの2つの遺構はセット関係にある可能性が高いが，双方とも建築構造については全く不明である。何らかの櫓のような構造の建物ではないかと想像される。

281号遺構（第48図，写真25）　O－9区に位置する地下式土坑。絵図には記載されていない遺構であるが，「番所」に隣接していることからⅤ期の遺構と判断される。正方形に近い平面形で四隅と南北の壁面には柱跡が存在する。これらの柱は内側の壁体を支え，地下式土坑を補強するための施設と推定される。

(2)　調査区東部の遺構群

東部の遺構群は厩地区の飼料所とその付属施設および仮設の厩遺構から構成される。

101号遺構［旧期］（第43図，写真23）　調査区東側の長方形の建物遺構は絵図との対比によって厩の飼料所の遺構と推定される。101号遺構は基礎構造の重複から新旧2時期に分けられ，旧期はⅤ期に新期はⅥ期にそれぞれ対比される。旧期の遺構は基礎の地業が殆ど行われていない。また，礎石はすでに抜き取られたのか，直径30～40cmの円形の鍋状の掘り込みだけが確認された。掘り方の重複から2回ほどの建て替えが推定される。建物の南縁と西縁はL字形に溝が取

り囲み，北端と東端は溝状遺構（125・144号遺構）によって区画されている。

258号遺構　調査区東端に位置する柱穴列。一間間隔で配列された２列の柱列の間に長方形の土坑が配列されている。一間の方形に配置された柱の間に土坑が存在する構造は厩と同一である。したがってこの柱列も厩の遺構と考えられるが，厩舎の痕跡が確認されないことから，仮設の厩か馬場などで一時的に馬を繋いでおく外繋ぎの遺構と推定される。

197号遺構　調査区南東に位置する柱列。一間間隔で配列された二列の柱列とその間に長方形の土坑が存在する構造から，この柱列も厩の遺構と考えられる。また，厩舎の基礎遺構を伴わないことから，258号遺構と同様に仮設の厩か外繋ぎと推定される。

164号遺構　調査区南側を東西にやや斜めに延びる塀の基礎遺構。幅60cm，深さ１mほどの溝状の掘り方の底部に一間間隔で礎石を据えた構造をもつ。N―12区付近では門と推定される部分（275号遺構）がある。この遺構は絵図の「四角馬場」の仕切りの一部と推定される。

275号遺構（第40図，写真19）　M―12区に位置する門の遺構。連結した円形の掘り方の底部に一間間隔で２基の礎石が据えられている。礎石に周囲には栗石が充塡されている。

367号遺構（第41図，写真19）　調査区南西端に存在する石積みの溝状遺構。遺存状態はあまり良好ではなく，南側では裏込めの栗石だけが残されている。石積みは確認できるだけで３段残されている。この遺構に相当するものは絵図の中には見当らないが，「江戸本郷屋敷之図」の中で厩地区の外縁を区画する線状の書込が注目される。この遺構も排水溝などの溝の遺構としてとらえるよりも，地割りなどの区画を意図する溝ではないかと考えられる。一方，この石組溝と重複して，上層の整地面から溝が掘り込まれているのが確認された。この溝状遺構に関しては，Ⅷ期で梅の御殿の廃絶年代の根拠となった滝沢馬琴の「兎園小説」のなかで，「加州侯本郷の上屋敷，梅の御殿といへるがありし跡も，（中略）土中六尺ばかり掘る程に，石垣に掘り当たりにけり。…」と記述されていることから，この時の工事の跡に相当するのではないかと想像される。

第６節　Ⅵ期（全体図６）

Ⅵ期の遺構群は前段階のⅤ期とほぼ同様の遺構配置となっている。遺構群は調査区の中央を東西にのびる塀の基礎遺構の柱穴列で南北に大きく２分される。北側には建物遺構が集中し，

南側には全体にわたって植栽痕と推定される円形土坑が分布している。調査区北側の遺構群の配置は，西に東西方向にのびる2棟の長大な建物遺構と長方形に溝で区画された遺構が，東には長方形の平面形の建築遺構とそれを取り巻く瓦溜りから構成されている。そして，これらの建築遺構には石組や木組の溝状遺構が付設されている。一方，調査区南側は円形土坑の他に，大形不整形の浅い土坑（162号遺構）や廃絶された井戸を土砂で埋め戻し切石で蓋をした遺構(254号遺構)，道状遺構（112号遺構）などが確認されている。このような配置をもつ建物群はV期と同様に「坂下御厩」を構成する厩舎と飼料所と判断される。したがって，上記のような遺構配置に合致する絵図としてV期で言及した絵図があげられる。一方，VI期の年代は，対比される可能性のある絵図が複数存在するため，絵図の記載内容から遺構群の年代をしぼりこむことは困難である。そこで，遺構面の相対的な序列の中で年代を求めなければならない。VI期の年代の上限に関しては，V期の年代の下限である安永元年（1771年）の火災の可能性が高いといえる。下限に関しては，次のVII期に厩舎が増設されてコの字形の配置となり，その遺構配置と合致する絵図の年代が寛政年間と推定されることと，VI期の土坑から出土した陶器の墨書に寛政七年（1795年）銘のものが存在することから，寛政年間よりも古期に属すると推定される。したがって，VI期の年代は1770年代後半から1780年代の間に位置付けられる。

(1) 調査区北側の遺構群

調査区北側の遺構群は馬洗い場等から構成される。絵図の「三十疋建」に相当する北側の厩舎はV期からそのまま引き続いて使用されているために大きな変化はない。

南側の厩舎（第44・45図，写真20・21）はV期に相当すると考えられる「加藩本郷屋敷総絵図」の絵図では「二十疋建」と記されているが，それ以外のより年代が新しい絵図ではすべて「十二疋建」となっている。したがって，VI期では「十二疋建」であったと推定されるが，発掘調査では14基の間仕切りが確認されており絵図とは一致しない。VI期の厩舎はV期で焼失した位置から東へ半間ほど位置をずらして造営されている。厩舎の遺構は，厩の間仕切り柱列の基礎(177号遺構）馬の便槽（181号遺構）等の内部施設と厩舎の基礎遺構（118号遺構)，厩舎南側の石で区画された雨落溝（119号遺構）と雨水の溜桝（108号遺構)，北側の雨落溝（106号遺構）等から構成される。

厩の床面は第44図の断面図に示したように，硬化した平坦面と馬の便槽に向かって緩やかに傾斜した面から構成される。近世の厩の絵図等を参考にすると馬の便槽の部分は板敷になっていたものと推定される。また，厩の間仕切り柱列の基礎の部分には杭状の小穴が散見されるが，これは厩の造営時の遣り方の痕跡と考えられる。厩の間仕切り柱列は約2m四方を1単位とし

た区画が14基並列している。柱は六寸角の柱で，強度を高めるために部分的に小さな横木を水平に取り付けた痕跡が確認される。基礎構造は70cm角の正方形の掘り方の内部に直径30～40cmほどの偏平な礎石を据えた堅固な造りである。しかし西端の部分では礎石をもたない堀立柱の部分がある。馬の便槽は間仕切り柱で2m四方に区画された単位の中央に位置している。その構造は方形の掘り方の内部に板材で組んだ木枠状のものを埋設している。調査時点では板の木質部分が殆ど遺存していなかったが板の圧痕や角の部分に残る釘等が検出された。また，底板およびそれを繋ぐ釘などは確認されなかった。滋賀県の彦根城にのこる江戸前期の厩舎（滋賀県教育委員会，1968）では四角に板枠がはめられた内部に甕が据えられているが，本遺構では木枠のまま使用されたいたらしく，便槽の内部には暗灰色の粘性の強い土が残存していた。一方，これらの厩の内部施設を覆う厩舎の基礎も確認されている。基礎が直径50cmほどの円形の掘り方の内部に砂利や砂を突き固めた堅固なものである。厩舎の基礎は厩と同じく2m間隔で配列されており，内部施設を取り囲むように四間×一六間確認されている。東端の一列だけは礎石が据えられており改修を示すものと考えられる。また，厩舎の南北にはそれぞれ排水溝が付設されている。南側の排水溝は片面が石葺きの構造で，その西端には雨水の溜桝（108号遺構）が設置されている。溜桝は長さ2m，幅1m，深さ1mの規模で内部には側壁の板材を支えるための6本の杭跡が残されている。埋土中からは大量の瓦が出土した。一方，厩舎北側の排水溝は確認時には葺石は存在しなかったが，調査区北側の厩舎の排水溝には丸石で葺かれた部分が存在するため，この溝も本来は石葺であったと考えられる。埋土中からは瓦が大量に出土している。

120号遺構（第46図，写真22）　南北の厩舎に挟まれた中央部分に位置する水路で四角に囲まれた遺構である。絵図との対比では，馬の洗い場に相当する。馬洗い場は新旧2期が重複している。旧期の洗い場は溝が四角に取り囲み，南西の角に排水の溜桝が設置された形状をもつ。一方，新期の洗い場はやや規模が拡張されて溝がコの字形の配置になる。新期のものはVII期に相当すると考えられる。旧期の溝は掘り方が浅く確認面から5cmほど深さしかない。一方，新期の溝は掘り方が深く遺存状態も良好である。溝は掘り方の内部に板材を杭で固定した構造をもつ。調査時には溝の板材や杭の木質は遺存していなかったが，板の痕跡と杭穴が多数検出された。また北側の溝の先端部分は平石で塞がれており，石の脇には丸瓦を並べて配置した部分が検出されている（写真22右上）。一方，南側の溝の先端部分は確認されていないが，49号遺構の井戸に接続するものと考えられる。

313号遺構　厩の西端を区画する塀に沿って検出された列石。北側の厩舎の排水溝である106号

遺構の延長部分に相当すると考えられるが，南側の厩舎に付設された排水溝の遺構である106号遺構とは接続していない。Ⅰ－5区に位置する杭で囲まれた方形の土坑（824号遺構）はこの溝の排水溜桝と考えられる。

416号遺構（第49図）　厩舎にはさまれた空間に位置する方形の土坑。Ⅶ期に増設された厩舎基礎の下部から検出されている。埋土中からは馬の飼料と推定される植物質の腐食した黒色土が検出されている。埋土下部からは陶磁器が大量に出土した。

429号遺構　416号遺構に隣接する不整形の土坑。Ⅶ期の厩舎基礎の下面から検出されている。埋土からは馬の飼料と推定される植物質の腐食した黒色土が検出され，下部からは陶磁器が大量に出土した。同時期の遺物は，Ⅲ期の地下式土坑の464号遺構の埋土最上部からも出土している。

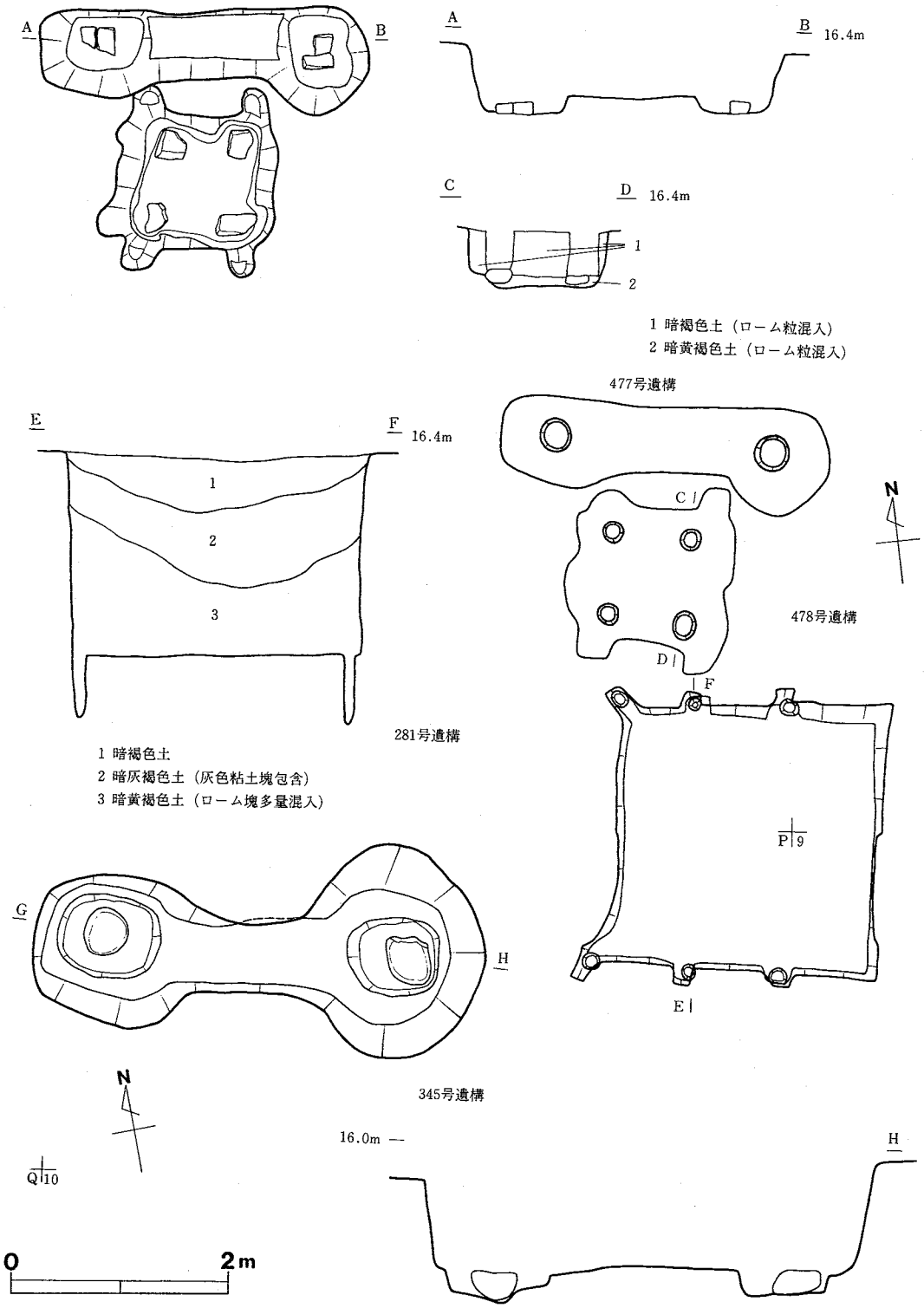
(2)　調査区北東側の遺構群

調査区北東の遺構群は厩の飼料所（101号遺構新期）を中心とする諸遺構から構成される。

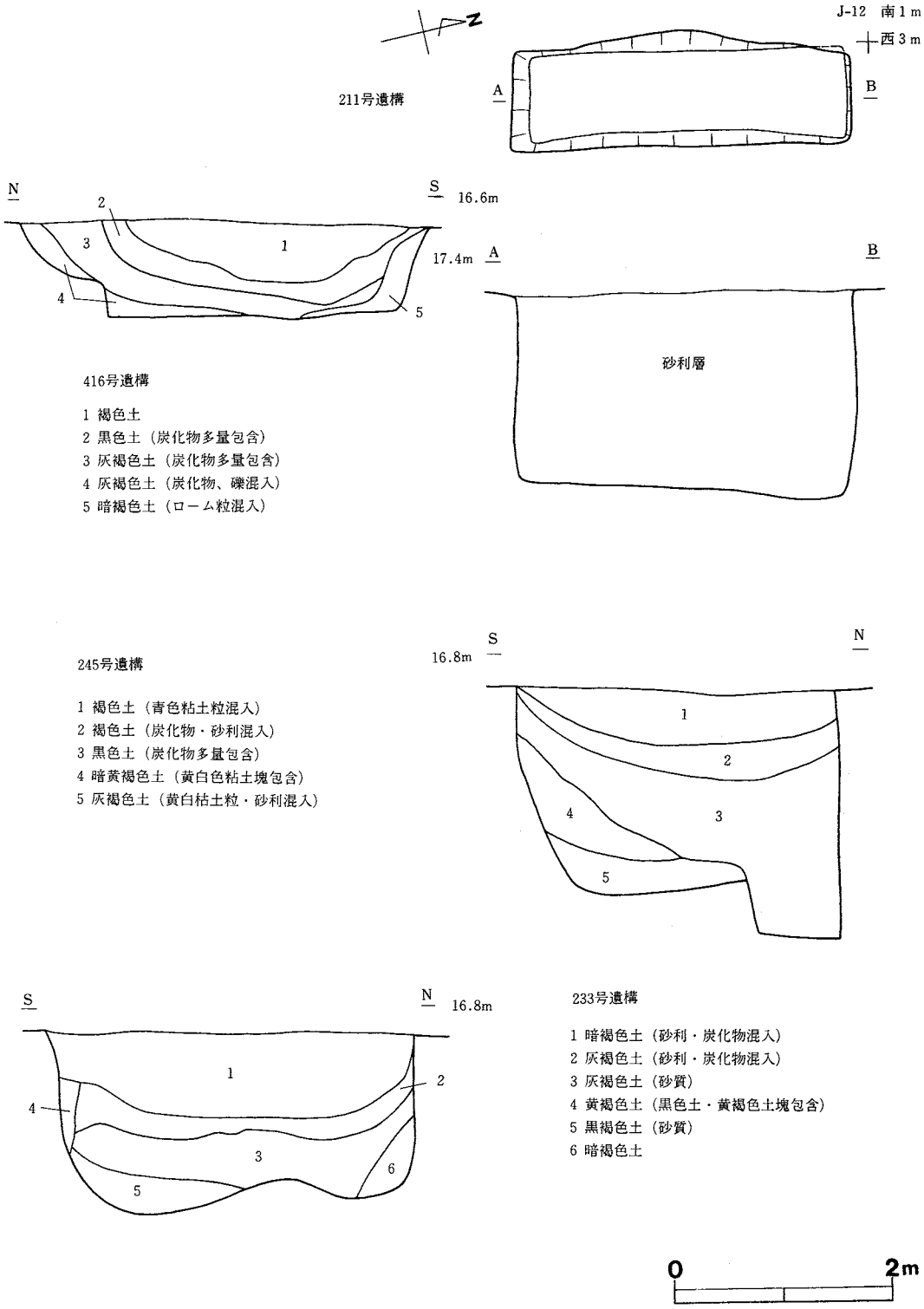
101号遺構［新期］（第43図，写真23）　調査区北東部に位置するコの字形の浅い溝で囲まれた建築遺構。礎石群の周囲の浅い溝かには建物をコの字形に取り囲むように大規模な瓦落ちが確認された（写真25下）。礎石は一間（六尺）間隔で配置されており，地業された平坦面に一度据えられてから，その上に土を盛られて上面だけが露出している。101号遺構は絵図との対比によって厩の飼料所であることが判明しているが，詳細な建物配置や変遷を明確にたどることはできない。この他に101号遺構には井戸（42号遺構）と石敷の方形土坑（135・136号遺構）などが伴う。

128号遺構　101号遺構に西隣に位置する建築遺構。101号遺構の飼料所ともにその一部を構成すると考えられるが絵図の上では明確に対比することはできない。遺構は部分的に礎石の配列が確認されるのみである。

125号遺構（第47図，写真24）　101号遺構の北端を区画する水路。水路は木樋を連結した暗渠で上水路と考えられる。暗渠部分には木樋の木質は遺存していないものの，鉄釘が大量に出土している。これらは一本毎に上下を変えていることから木樋に打ち込まれた状態で出土したものと推定される。また，調査区北東端の部分では北東方向に角度を変えて延びており，その屈曲



第48図　477号・478号・281号・345号遺構実測図



第49図　211号・416号・245号・233号遺構

部分にサイフォン様の溜桝が存在する。これは，一辺90cmほどの立方体の木箱を埋設して溝を相互に連結したものである。木質部分は全く遺存していなかったが，木枠の角や底板の部分からは原位置を保った状態で釘が大量に出土している。

144号遺構（第47図）　101号遺構の東端を区画して，調査区を南北に横切る溝状遺構。溝状遺構内部からは釘などは出土しなかったものの木樋の痕跡が確認されている。V－5区で125号遺構の溝と連結しているが，この部分にもサイフォン様の溜桝が存在する。底板の釘の配列状況が125号遺構と異なっているもののほぼ同一の構造と考えられる。

この他にも北東地区の遺構とし厩地区を鍵形に区画する塀の遺構と，調査区東端で塀と対置して回廊を形成する植栽痕列があげられる。

塀の遺構は調査区北西角からはじまり，南に延びて築山との境を区画したのちI－9区で東に折れ，厩地区と南の園地を区画する。この間，Q－10区では門が設置される。V－9区で再び北におれ，さらにV－6区で東におれクランク状の形になる。塀は相互に連結した2列の柱列から構成される。これらは厩側の方が主柱で外側の柱はそれを斜めに支える支柱である。また，V－9～V－6区の間では基礎構造が十字形に配置される部分がある。このような柱穴列も，柱穴相互の切り合いが激しく柱配置を明確にたどることはできなかった。これは，史料にあるように風害等で塀が倒壊して頻繁に建て替えられたためであると推定される。一方，これらの塀と対置される**188号遺構**（第42図）の植栽痕列はX－11～X－7区まで一列に並んでいる。これらは直径約2mの円形の平面形で，深さは約50cmほどある。穴の中央部が直径約1mにわたって20～30cmほど盛り上がっているという特徴がある。

(3)　調査区南側の遺構群

調査区南側は北側の厩舎地区とはことなり大規模な建築遺構は存在しない。調査区全面にわたって植栽痕と推定される円形の浅い土坑が分布している。これらの植栽痕については「前田家本郷屋敷略図」の中の「梅之御居宅」の部分の書き込みに「御囲御露地入口御門内山ノ分境ハ梅ノ森ト云」とあることや，「加藩江戸本郷屋敷総絵図」の中でこの部分に「梅畑」という書き込みが見られることから，この地区がIV期以降VII期まで「坂下御厩」の間は梅林であった可能性が高いと考えられる。そして，梅林の中に馬場に関する施設が設けられていたものと推定される。

調査区南側では植栽痕の他に，大形の土坑が数基点在している。また，調査区の南東角では「坂下御厩」と道路を区画する塀（208号遺構）と道の一部（260号遺構）が確認されている。

208号遺構　調査区南東角の大形の柱列で，絵図との対比から前述のような塀の跡と推定される。またその東側では平坦な整地面（260号遺構）が確認されており，道の遺構と推定される。

162号遺構（第40図）　調査区南端に位置する浅い大形の土坑，全体の形状は不整形で深さは50cmほどである。切り合い関係から一度規模が縮小されたことが明かで，全体の形状はより大形で南東側に細長く延びている（217号遺構）。また，規模が縮小された際に土留めに石積みが築かれている（194号遺構）。

135号遺構（第39図）　T・V—11区に位置する大形の土坑。楕円形平面形の大形の土坑に螺旋状のスロープが付設した形になり，全体的な形状は「マイマイ井戸」に類似する。一種の採土坑と推定される。

254号遺構（第39図，写真18）　R—13区に位置する井戸跡。井戸は廃絶された後，石を用いて閉塞されている。閉塞石は2段に積まれており，下部は大形の角礫を荒く積み上げ隙間に栗石を充塡している。上部は長さ1.2m,幅30cm,厚さ15cmの切石を3個横並びに据えて閉塞している。

211号遺構（第49図）　I—13区で確認された土坑。長さ約3m，幅約1mの細長い長方形の平面形をもつ土坑で深さは1.5mほどある。内部には粒径のそろった良質の砂利が充塡されている。

160号遺構　調査区西端で検出されている礎石列。礎石は直径20～30cmの大きさで，半間間隔で一列に並んでいる。塀ないしは建物の基礎と推定されるが絵図との対比では該当する建物が見当たらず，その性格については不明である。

345号遺構（第48図）　P—9区で検出された門跡。直径約1m深さ約80cmの掘り方の内部に礎石が据えられた基礎構造をもつ土坑が2基並んでいる。これらは幅約1mで深さ50cmほどの溝で連結されている。また，この門の部分から南南西方向に幅約3mの道状の落ち込み（112号遺構）が延びている。

124号遺構　K—10区に位置する楕円形の土坑。埋土中から大量の砥石が出土した。

第7節　VII期（全体図7）

VII期の遺構群はVIII期の梅之御殿面の下約50cmほどの整地面上で確認されている。基本的な遺構配置はVI期の「坂下御厩」の遺構群配置と同一であるが，南北に分かれて建てられていた「十二疋建」と「三十疋建」を相互に連結する厩舎が増設されて，厩舎の全体の配置がコの字形になる。また，厩舎の間に位置する馬洗い場も拡張される。この時期の遺構配置と照合する絵図としては「前田家江戸本郷御上屋敷絵図」が存在する。この絵図では坂下御厩の厩舎の配置が遺構配置と同じようにコの字形に描かれている。さらに，この時期の厩舎の増設を裏付ける絵図として「前田家本郷屋敷略図」が存在する。この絵図は梅之御殿建築直後に描かれたと推定される絵図で，「梅之御殿」と記した部分に次のような書き込みがある。

「右之ヲ御取払梅之御殿ニ相成　押廻シ十疋建続テ向側ニ十二疋最前土塀ノ方ニ御厩役所三十疋建」

以上の厩舎の配置の記述は「押回シ十疋建」の部分が増設された厩舎で，他はVI期と同じ厩舎の配置になっていたこと示している。この絵図の書込から，梅の御殿造営直前には厩の配置がコの字形をしていたことが裏付けられる。また，増設された厩舎が「押回シ十疋建」と記されているが，これも発掘調査によって検出された厩舎の遺構が10基の間仕切りをもつことから発掘成果とも矛盾しない。一方，同絵図には「御囲御露地入口御門内山ノ分境ハ梅ノ森ト云」の書込も見られることから，調査区南側がIV期から引き続いて梅林となっていた可能性が高いといえる。

VII期の年代は，遺構配置が対比される絵図の「前田家江戸本郷御上屋敷絵図」が，記されている建物等の名称から寛政年間に描かれたと推定されること。また，「前田家本郷屋敷略図」の書込で，「右之ヲ御取払梅之御殿ニ相成」とある梅之御殿の竣工が享和二年（1802年）であることと，VII期の233号遺構の土坑から底部に「寛政七年（1795年）七月吉日」の記年墨書のある陶器椀が出していることから，ほぼ寛政年間に収束するものと考えられる。

増設された厩舎　「押回シ十疋建」の増設部分の厩舎の遺構は盛土によって台状の基礎を造成した後，約1間間隔で厩の間仕切り柱列（183号遺構）が10基並び，その間に厩の便槽（182号遺構）が配列される。さらに，全体を取り囲むように厩舎の基礎（149号遺構）が配置されている。盛土による基礎の地業は，30cmほどの厚さにローム質の暗黄褐色土を突き固めたものであるが，前時期の大形土坑の埋土が地業面の下部で陥没しているため非常に不安定なものになっている。また，厩の間仕切り柱穴は礎石を据えない堀立式のもので前時期の堅固な構造の柱穴と異なり簡単な構造になっている。また，厩舎の基礎は30～40cmの掘り方に拳大の石数個を据

えた簡単な構造であるが，106号遺構の排水溝に面した部分には半間の廂が設けられる。

106号遺構　厩舎の内側をめぐる排水溝。前時期までは厩舎が南北に分離していたため，それぞれに排水溝が付設されていたが，Ⅶ期では増設された厩舎に沿って連結されコの字形の配置になっている。

220号遺構　坂下御厩と育徳園を区画する塀の基礎遺構。基礎は直径50cmほどの円形の掘り方に赤褐色の砂質土とローム質の土を交互に突き固めて作ったもので，一間間隔で配列されている。このような塀はかなり頻繁に立て替えられたらしく，220号遺構の上部にも数基の基礎遺構が重複して確認されている。また，塀の遺構にともなってⅠ－７・８区から大量の海鼠瓦が出土している。

221号遺構　調査区北側の「三十疋建」に相当する厩舎の遺構の柱穴列で前時期から引き続く遺構である。Ⅶ期では礎石を据えた基礎遺構の上部に砂利を漆喰で固めた土台基礎が確認されている。土台基礎は布基礎で，礎石による基礎構造を繋ぐように線状に分布している。

233号遺構（第49図）　Ｌ－６区に位置する大形の土坑。平面形は不整長方形で内部には螺旋状のスロープが付設されている。埋土には黒色の粘性の強い炭化物が大量に含まれており，馬の飼料であるカイバが廃棄されたものと推定される。埋土下部からは陶磁器が大量に出土した。

245号遺構（第49図）　Ｋ－６区に位置する大形の土坑。Ｌ字形の掘り込み上部に不整円形の掘り込みが重複した複雑な形状を持っている。埋土には233号遺構と同様に黒色の粘性の強い炭化物が大量に包含されている。また，陶磁器が大量に出土しているが，その中には「厩役」「厩紋右」などの墨書がみられ，この土坑に厩関係の施設の廃棄物が一括して廃棄されていることが明かになった。また，底部に「寛政七年七月吉日」の記年墨書のある陶器椀や馬具の轡金具の一部と推定される８の字形の鉄製品が出土している。

第８節　Ⅷ期（全体図８，写真26～29）

Ⅷ期の遺構群はⅨ期の遺構面の直下の整地面で確認され，調査区全面に広がる大規模なものである。遺構群の構成は調査区北部に東西75mにわたって検出された礎石群とそれに直交して調査区南端まで続く２列の礎石列，さらに調査区中央西よりに長方形に配置された礎石列，さらに調査区南側では全面的に広がる礎石群が検出された。また，これらの大規模な建築遺構に

ともなって石組の溝状遺構や井戸，小形の土坑などが検出されている。

このような建築遺構の配置は19世紀初頭に描かれた「梅御殿惣絵図」の「梅之御殿」の建物配置と一致する。また，出土した陶器の墨書に「梅之御殿」「梅殿」と記されたものが存在することから，これらの遺構群が「梅之御殿」の遺構であることが裏付けられた。絵図によると北部の長大な礎石群は「部屋方」に，それに直交し西端まで延びる2列の礎石列は「大廊下」に，中央西よりの長方形の礎石列は「土蔵」にそれぞれ比定される。また，南西の礎石群は「御式台」や「医者溜」などの御殿の表向きの建物に対比される。また，これらの建物に付設された木枠組みの小形の土坑が便所の遺構と判明した。

「梅之御殿」は，発掘調査面積が建坪の約半分にあたるという広大な居館である。調査区は梅之御殿北半分にあたり，御殿の中心部の一部と部屋方の大部分が含まれる。発掘調査によって検出された遺構群は「梅御殿惣絵図」の建物配置と大略一致する。しかし，発掘された遺構群と絵図面との対比は主に建物の形状，規模や柱配置によって行い，さらに井戸の位置の対比などによってこれを補正した。しかし，遺構には絵図には描かれないような床下部の石組み溝なども存在するため，全遺構が正確に絵図面に対比されるわけではない。また，「梅御殿惣絵図」には施工図と設計図が存在するのか，柱の配置など僅かに異なるものが数面存在するため，建物遺構の柱の配置を完全に対比することはできなかった。

梅之御殿は史料によると享和二年（1802年）12代藩主斉広の時に，10代藩主重教夫人のために建てられた居館である。重教夫人の壽光院は1カ月程で亡くなり，その後11代当主夫人の法粱院の居住するところとなった。したがって，Ⅷ期の遺構群の年代の上限は19世紀初頭に位置付けられる。一方，梅之御殿の廃絶の時期は史料では明確にされていないが，文政八年（1825年）に著わされた滝沢馬琴の『兎園小説』のなかで，「加州侯本郷の上屋敷，梅の御殿といえるがありし跡も，此度御守殿の御庭となし給ふにより，…」という記述がらみられる。『兎園小説』では梅の御殿の竣工から20年あまりの文政八年の時点で，「梅の御殿といえるがありし跡」と過去形で語られていることから，この年代をやや遡る時期にすでに梅の御殿は廃絶されていたものと推定される。

発掘調査によって検出された主な遺構は次のようにまとめられる。

(1) 調査区北部遺構群

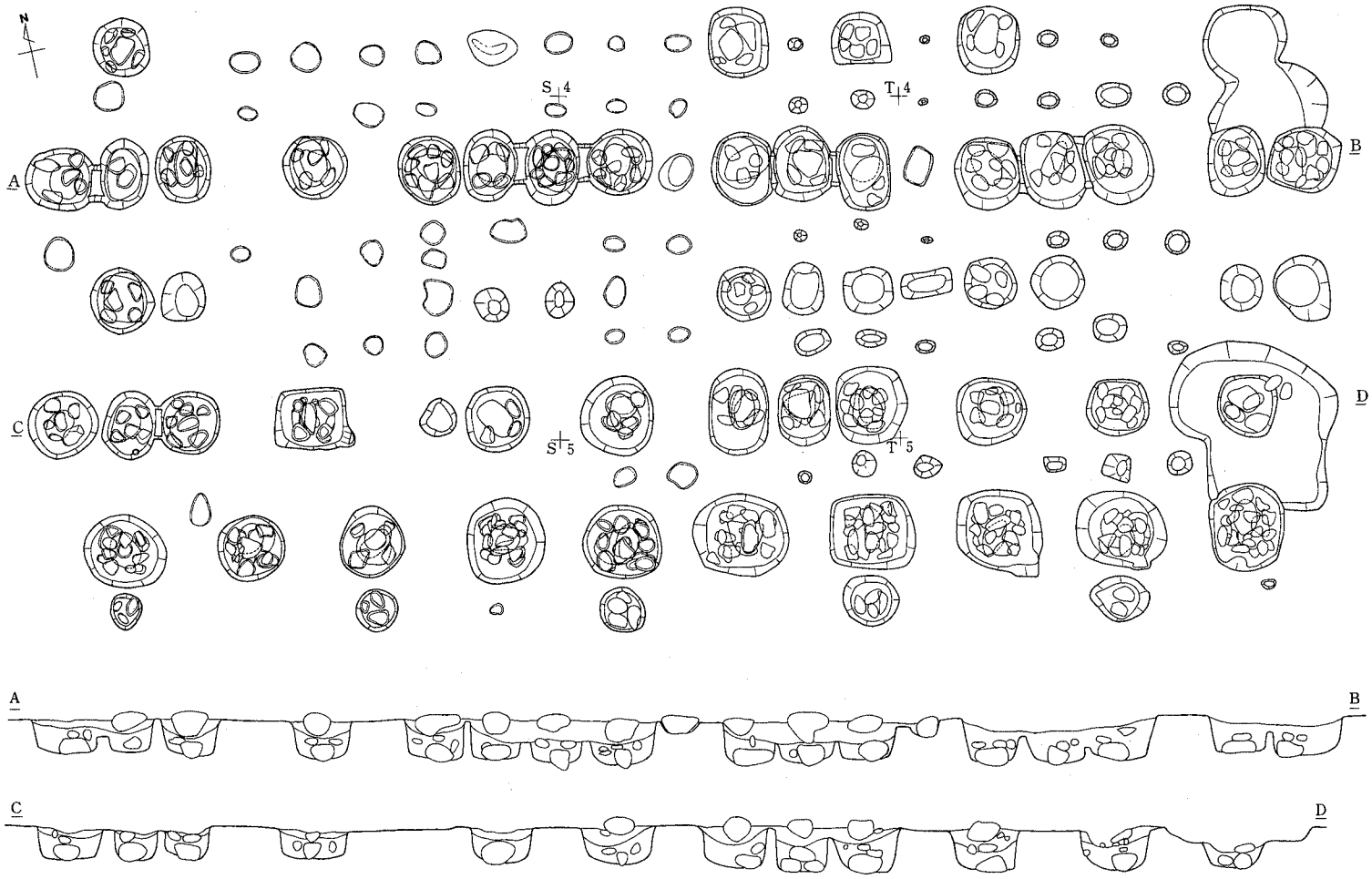
11号遺構（第50図，写真30） 調査区北側から検出された長大な建築遺構。規模は東西方向に75m以上，南北方向に20m以上あり北側と東側は御殿下グラウンドの付属施設に破壊されている。この遺構は絵図の「部屋方」に対比され，内部には居室と納戸，押し入れ等が，北側に井戸や水場が，西端には便所がそれぞれ配置されている。しかし，前述のように北側はすでに破壊され

ている。また，西端部の便所も，明治時代に柔剣道場が建てらていたため撹乱がひどく確認できなかった。建物の基礎構造は第50図に図示したR・S－4・5区のように，主柱を支える礎石と支柱の礎石にわかれる。支柱の礎石は，10～15cmほどの小型の礎石を直接整地面に据えるか若干の掘り込みに据えただけの簡単な構造であるが，主柱の礎石は径30～40cm，厚さ15cmほどの大型の礎石を，直径深さとも1mを超える掘り方のなかに2段ないしは3段に積み上げた堅固なもので，礎石と掘り方の隙間には栗石や砂利を充塡している(写真30)。このように堅固なつくりの基礎は，Qライン以東に顕著にみられる。これに対して，Qライン以西では礎石を2段以上に積み上げる構造のものは殆どみられない。居室内部は六尺を一間として2間×2間の居室や半間×2間の納戸，押入れ等が確認される。これらの柱配置は絵図と大略一致するが，類似する絵図が数枚あるため完全には対比できない。また，南側には幅半間の廊下が付設されているがこの基礎も確認されている。

1号遺構(第53図)　部屋方の南側に隣接する石組みの溝状遺構で，部屋方を区画する地割り溝と推定される。石は殆ど抜き取られているが，N－5区の大廊下に接続する部分で僅かに残存していた。その構造は底部に平石を敷き側面には角錐状の石を検知積みにした単純な構造である。この溝は西側で部屋方の張り出しに伴い廊下ともに屈折しているが，発掘調査によってもK－6区でクランク状に屈曲している部分が確認されており絵図と一致する。1号遺構は他の多くの溝状遺構と接続して，西側では築山との境を区画している。溝の埋土は梅御殿廃絶時の整地作業に伴う青灰色粘土で，梅御殿で使用されていた瓦，陶磁器，海鼠壁の漆喰の断片などが大量に出土した。

42号遺構(第52図)　T－6区11号遺構の南側に位置する井戸跡。井戸の堀り込みの上端部には釣瓶を支える構造と推定される柱穴が井戸の縁辺に接するように2基掘り込まれている。

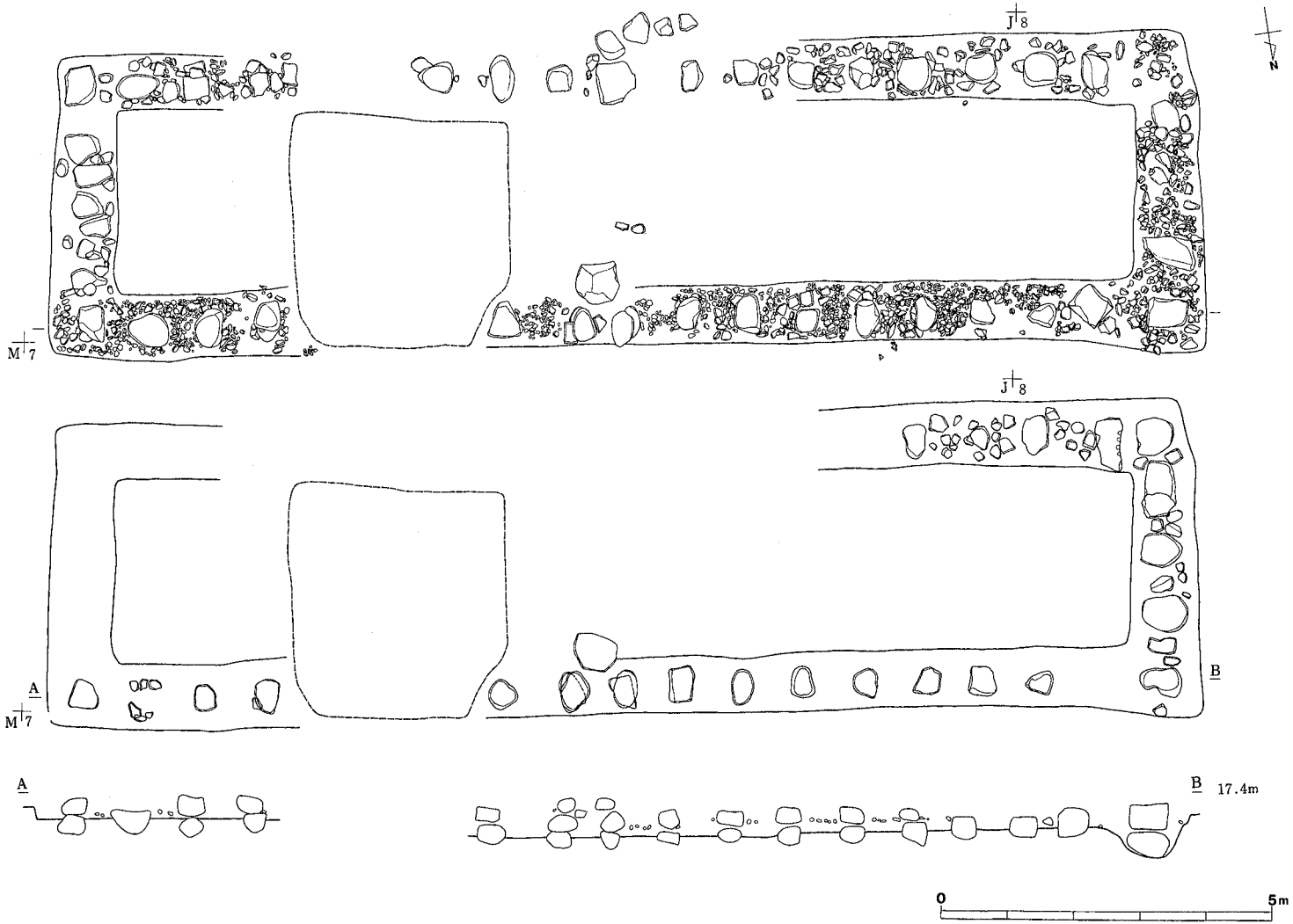
4号遺構(第51図，写真31)　調査区北西の部屋方と大廊下の間にある土蔵の遺構。長さ17m幅5mの規模で，絵図では2室に分かれ北側には出入口と考えられる張出し状の構造が描かれているが発掘調査では基礎構造しか確認されなかった。基礎構造は幅70cmの溝状の堀り込みの内部に直径30cm程の礎石を半間間隔で並べたもので礎石の間には栗石が充塡されている。礎石は一部で2段積みになっているところがあることから，当初は2段積みで土台基礎が構築されていたと考えられる。間仕切りの基礎については，撹乱によって一部しか遺存しておらず，その構造を明かにすることはできなかった。



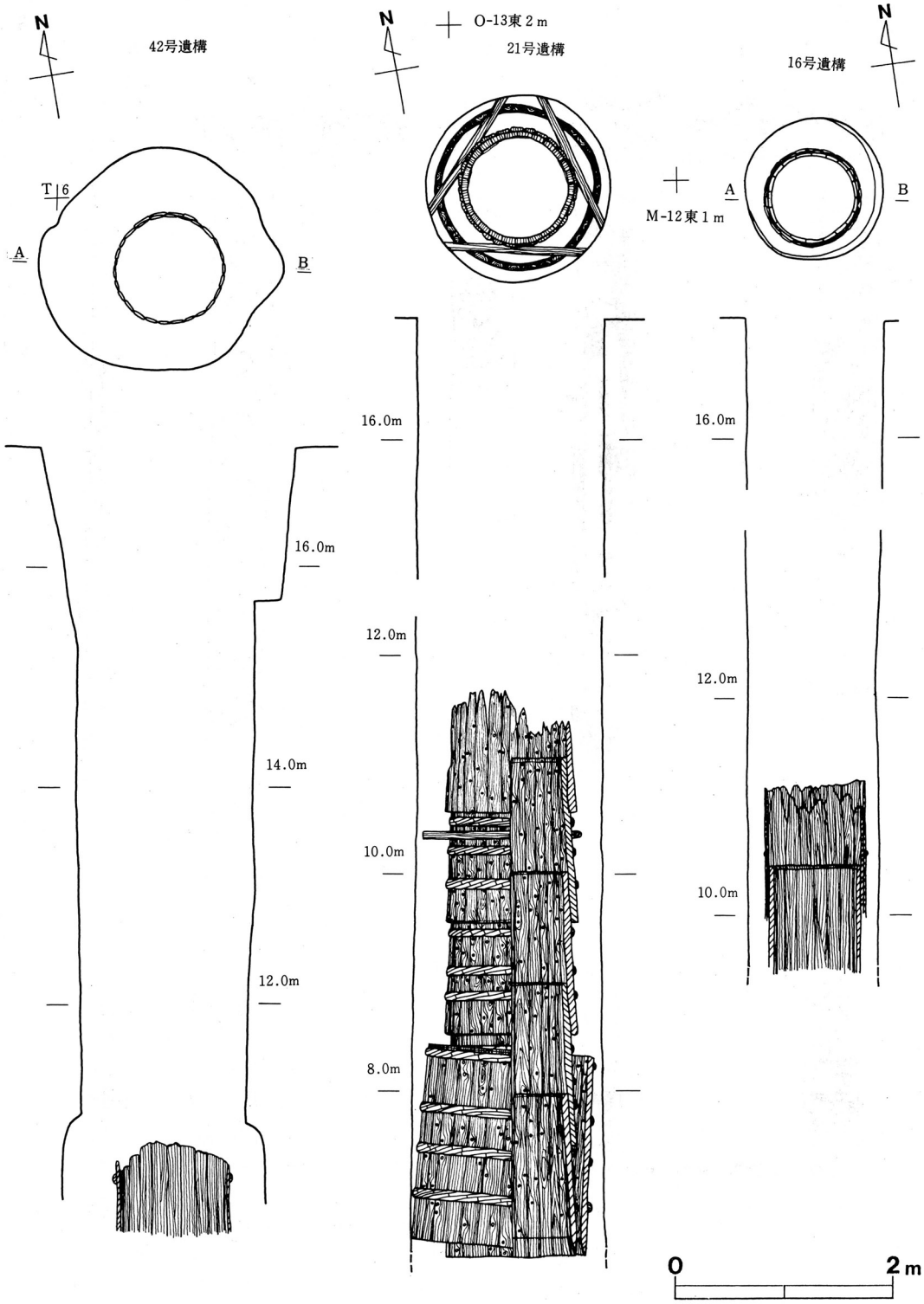
礎石掘り方埋土　上層　砂利
下層　褐色土（ローム、褐色粘土塊混入）　（水糸高　17.2m）

0　5m

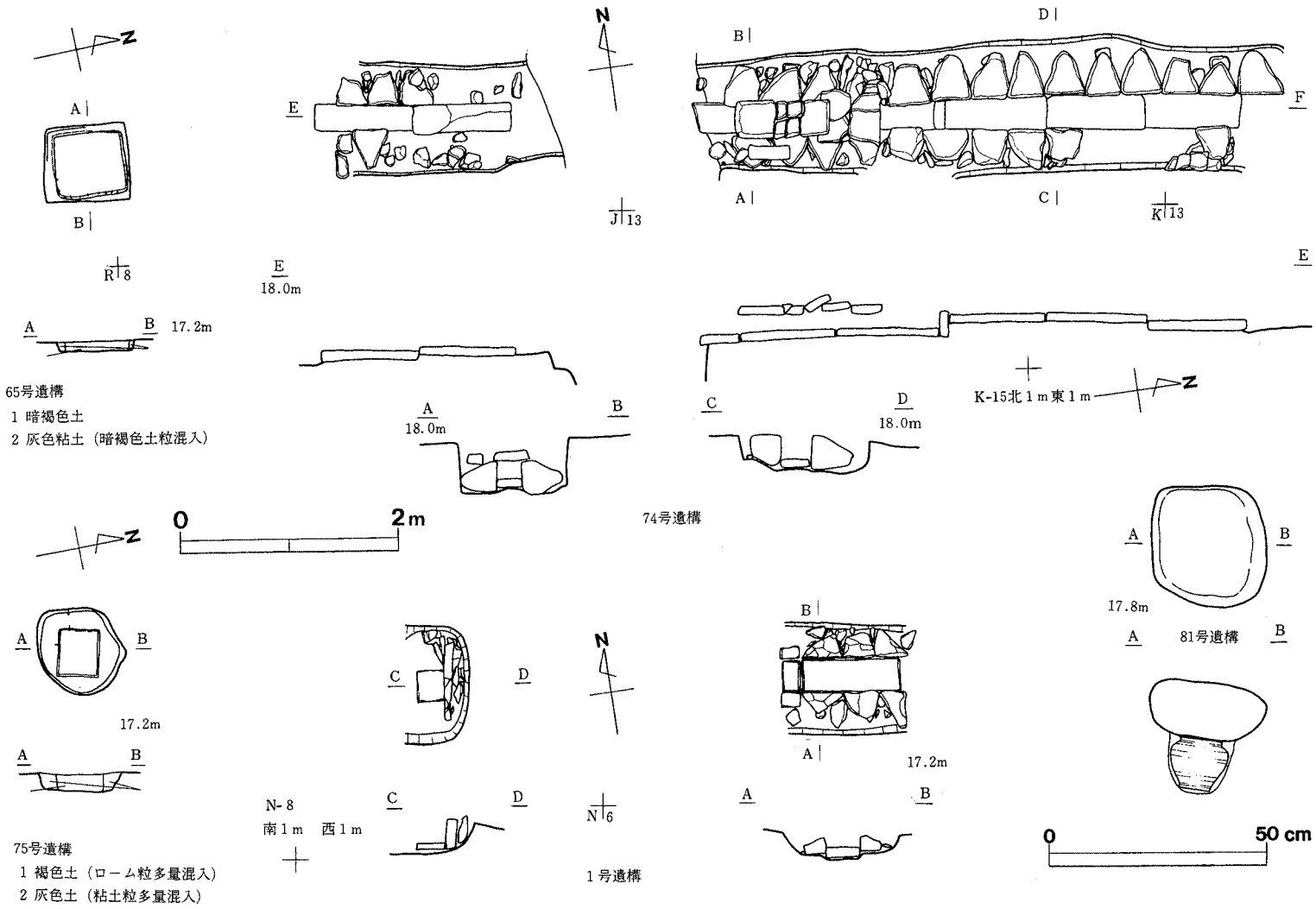
第50図　11号遺構実測図



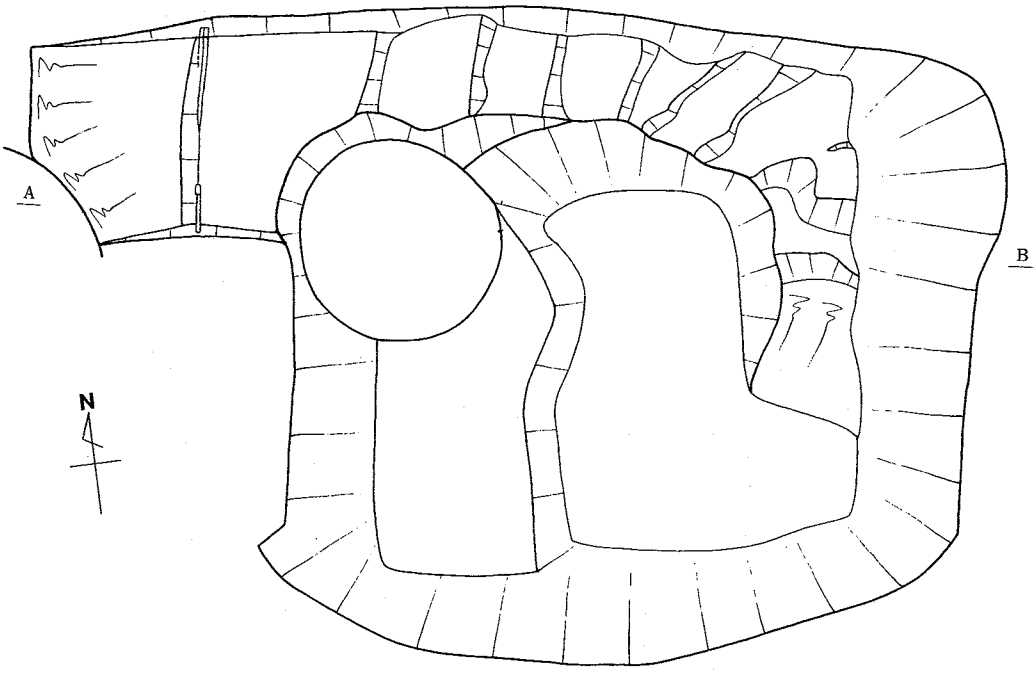
第51図　4号遺構実測図

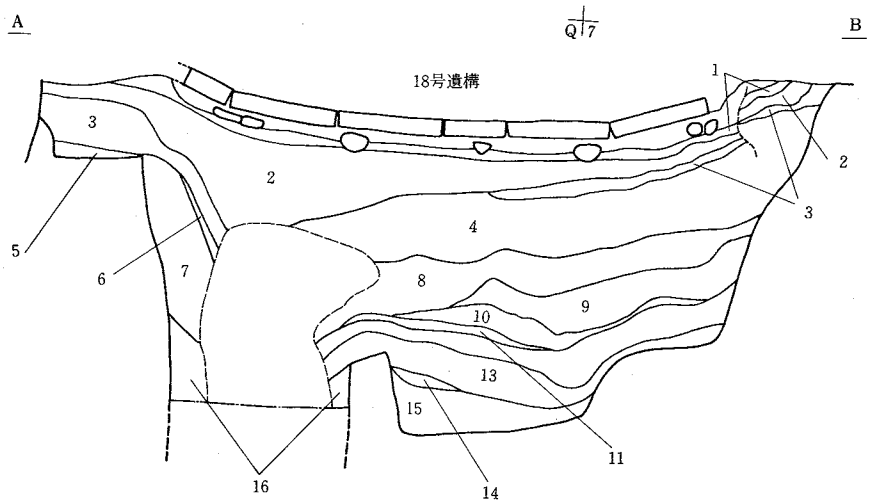


第52図　42号・21号・16号遺構



第53図　74号・1号・65号・75号・81号遺構





1 褐色土（ローム塊大量混入）
2 暗褐色砂質土（砂利混入）
3 褐色土（ローム塊少量混入）
4 暗褐色土（砂利混入）
5 灰青色粘土（砂利混入）
6 暗褐色砂質土（炭化物混入）
7 暗褐色砂質土（砂利混入）
8 暗褐色土（砂利・茶褐色粘質土混入）
9 灰色粘質土（ローム粒混入）
10茶褐色粘質土
11暗黄褐色砂質土
12灰色粘質土
13茶褐色粘質土
14赤褐色粘質土
15灰色粘質土（ローム粒混入）
16暗褐色土（ローム・炭化物・灰粘土粒混入）

（水系高　17.2m）

0　2m

第54図　49号遺構実測図

29号遺構　調査区中央を南北に縦断する平行した礎石列で，絵図の大廊下に相当する。礎石は深さ30～40cmの浅い掘り込みに人頭大の石を数個据えた簡単な構造である。礎石は約1間間隔で配置されているが19号遺構と接続する部分では基礎が連結して，長方形の掘り込みに礎石が充塡された構造になる。

19号遺構　調査区のほぼ中央を東西方向に延びる長大な建築遺構。絵図との対比では大廊下に接続して東側に延びる使用人等のための施設の遺構と推定される。遺構の遺存状態は悪く，礎石等の基礎遺構が部分的に残るのみで，区画のための溝状遺構（20号遺構）も痕跡が確認される程度である。

65号遺構（第53図，写真32）　Q－8区19号遺構の南側に位置する木枠組み土坑。木枠内部には粘性の強い青灰色の土が充塡され，木枠には釘が遺存している。全体の形状や内部の構造は75号遺構に類似している。絵図との対比によって便所の遺構と推定される。

6号遺構　N－8区の井戸跡，井戸の回りは角錐状の切り石を検知積みにして正方形に囲んでいる。絵図との対比ではこの井戸は「釜屋」に隣接した位置にあたる。

(2)　調査区北西部遺構群

調査区北西部には絵図との対比で，11号遺構と同様の構造をもつ部屋方が存在していたことが明かになっている。しかし，北西部は旧地形が他地区よりもやや高くなっているため，遺構の遺存状態がわるく整地や撹乱によって大部分の建築遺構は失われている。しかし，J，K－13区では若干の基礎遺構と共に石組み溝遺構（74号遺構）がほぼ完全な形で確認され，また，N－8区では便所の遺構が検出されている。

74号遺構（第53図，写真31）　J・K－13区で検出された石組み溝跡。遺存状態は良好で蓋石も部分的に残存している。構造は安山岩製の長方形の底石を据えたのち，その両側を角錐状の切石を検知積みにして挟み込み溝としている。さらに上部には底石と同様の形態の蓋石をかぶせて暗渠としている。また，溝の途中で段の部分があるが，そこも板石を組合せて造っている。この石組み溝は絵図には記載されていないため性格を明らかにすることは困難であるが，部屋方の床下に配置された何らかの排水施設と考えられる。

75号遺構（第53図，写真32）　N－8区から検出された木枠組み土坑。不整円形の掘り方の内部

に一辺30cmほどの板を正方形に組んだ木枠が確認され，板材には約一寸間隔で釘が多数残されていた。木枠組みの内部からは灰色の粘性の強い土が検出された。この土坑は，絵図と対比で大廊下から部屋方に入る場所に設置された便所に相当することから，便所の遺構と推定される。遺構確認面からの掘り方の深さは約10cmであったが，本来はより深かったものと推定される。

16号遺構（第52図）　M—12区の井戸跡。絵図との対比では大廊下から北西部の部屋方へ向かう廊下の接続部分に位置する井戸と推定される。井戸の埋土下部から瓦が大量に出土した。

(3)　調査区南東部遺構群

27号遺構　調査区北西部の大規模な建築遺構。絵図との対比では「御玄関」，「御式台」，「医者溜」など梅の御殿の表向きの部分に相当する。発掘によって確認されたのは礎石などの基礎遺構のみである。基礎構造は円形の深さ１mほどの掘り方の内部に人頭大の礫を充塡したもので，礫の表面には「イ」や「ロ」等の朱書きが施されるものがみられた（写真30）。基礎遺構の配置は，絵図と対比すると全体的にほぼ一致するものの，細部では絵図の部屋割りとおりに基礎遺構の配列をたどることは出来なかった。

72号遺構　27号遺構に隣接して調査区南端U—15区で確認された土坑。円形の掘り方をもち内部に青灰色の粘性の強い土が充塡されている。絵図との対比から便所の遺構と推定される。他の便所の遺構と異なり，内部の掘り込みの形状が円形であるのが特徴である。遺存状態は良好ではなく，木枠などの木質部分は確認できなかった。

28号遺構　梅之御殿の「御台所」部分に相当する建築遺構である。発掘によって確認されたのは基礎遺構のみで柱配置などを絵図と正確に対比することはできなかった。基礎構造は27号遺構と同様で一部に朱書がみられる。また，大形の礎石にはノミで切った跡や刻印がみられるものがある。このような石材は石垣の用材を転用したものと推定される。

21号遺構（第52図，写真32）　梅之御殿の「御台所」に相当する28号遺構の南西角のO—13区に位置する井戸。井戸上部の構造物は全く遺存していなかったが，内部の井戸枠は非常に良く保存されていた。井戸枠はヒノキの短冊状の板材を上下に２列の竹釘を使って内部で連結させ，３段の竹のタガでしめたものである。井戸枠は確認できる深さまで５段あり，最下層ではより大きな井戸枠と入籠状に連結している。また中位の深さでは角材を三角形に組んだもので掘り方との間が固定されている。

第9節　IX期（全体図9）

IX期は御殿下グランド表土除去後に最上層の整地面で確認された遺構群から構成される。確認された遺構は建築遺構の基礎の礎石群や柱列群，およびこれらの遺構に伴う瓦溜り，井戸，や不意整形の土坑群があげられる。しかし，最上層のためか，明治時代の撹乱によって破壊されている部分もあり，建築遺構は調査区の北側しか確認されなかった。これらの遺構群の年代は梅の御殿廃絶後から幕末までの約40年間にあたる。上限年代の梅の御殿の廃絶時期に関してはVIII期で詳述したように，文政八年（1852年）に書かれた滝沢馬琴の『兎園小説』には，梅の御殿の廃絶が過去形で記述されていることから，すでのこの時期には梅の御殿は存在しなかったことになる。一方，下限年代に関しては，『加賀藩史料』によると，「明治元年（1868年）閏四月十七日本郷春木町の災に類焼せり。」の記事があることから，明治時代の幕開けとともに加賀藩上屋敷本郷邸も終焉をむかえている。

IX期の約40年間に相当する時期の建物配置を描いた絵図は「本郷邸図」「江戸御上屋敷惣絵図」「前田家本郷屋敷之図」「加藩江戸本郷屋敷総絵図」「元治二年二月現在東都御屋敷略図」「本郷邸之図」「御上屋敷惣絵図」「江戸本郷邸図」等が残されている。これら絵図によると，梅の御殿廃絶後，調査区の位置する場所は，土塁によって細長く長方形に区画された馬場になり，北側に厩関係の施設が建設されている他には建築物は建てられていないことがわかる。その後，幕末になって馬場の北側の部分に大規模な米蔵が2基建設されたことが明らかになっている。したがって，少なくとも遺構配置では2期に区分されることになるが，前述のように遺構が少ないことと重複していないことから一括して考察する。

上記のような絵図に描かれた建物配置を遺構配置に照合すると，馬場の時期の絵図では長方形に土手によって区画された馬場と外繋とみられる厩と厩役所などが描かれているが，これらの厩関係の諸施設の遺構は調査区北東側に集中する33・45・61・62・63・71号遺構等の柱穴列等の建築基礎遺構が相当するものと考えられる。一方，幕末（1863～68年頃）に描かれたと推定される「江戸本郷邸図」では馬場の関連施設の北隣に塀で囲まれた米蔵が2棟存在する。このうち南側に位置する米蔵が調査区北西の長大な礎石列（3号遺構）に相当するものと判断される。また，米蔵をL字形に取り囲む礎石列（18号遺構）は絵図に描かれている「掛塀」に相当するものと推定される。この他に絵図に描かれている遺構として「氷室」と「射場」がある。「射場」に関しては基礎が浅いためか遺構としては確認されなかった。また，「氷室」については，調査区から北西にやや外れる場所に位置するため，山上会館の配管に伴う調査によって築山部分を断ち割った際にその確認に努めたが，結局遺構は発見されなかった。

一方，梅の御殿の基礎遺構を破壊してIX期の米蔵（3号遺構）が建設される以前の段階に属

する不整形の土坑が数多く検出されている。その内の幾つかは形態上の特徴から植栽痕と推定される。また，51号遺構のように瓦が多量に廃棄されているものも存在する。

3号遺構（写真33）　礎石建物の遺構で，絵図に描かれた米蔵の遺構と判断される。長さ24m幅3mの規模をもち，内部は3室に区分されていたことが2列の間仕切りの礎石列の存在から明らかである。床面には厚く砂が敷かれている。礎石の外側には幅10cm，深さ12cmの溝が巡っており，また，溝中には約50cm間隔で杭跡が確認された。この溝と杭跡は米蔵の外壁構造の痕跡と判断される。絵図によると，米蔵の本体北側には入口様の造りだしが描かれているが，この部分に関しては遺構として確認されなかった。

18号遺構（写真33）　3号遺構の米蔵を取り囲んで設置された塀の遺構。塀は礎石とそれを挟んで両脇に位置する杭穴から構成される。O－6区の49号遺構の埋土最上部から陥没した状態で検出された基礎構造は，約50cm間隔で配置された礎石の上に長さ60cm幅15cm厚さ10cmの安山岩製の切石が設置されていることから，礎石の上に切石の土台を据え，礎石の両脇の杭で壁体を支えた構造をもつ塀と推定される。また，J－4・5区ではこの塀に葺かれていた瓦が崩落した状態で一括して出土している（写真33下）。

45・33・61・62・63・71号遺構　これらの各遺構は調査区北東側から検出された建築基礎遺構と考えられる一群の柱穴列である。これらの柱穴列は梅の御殿の部屋方の礎石群とほぼ同一の面で検出されたため相互に錯綜しており，配列を正確に辿ることは不可能であった。いずれも基礎構造として柱穴の底部に礎石が据えられている。**45号遺構**は絵図の外繋ぎに対比されることから馬屋と類似した構造をもつと推定されるが，連続した長方形に配置された柱穴列の他に内部施設は確認されなかった。**61号遺構**は絵図と対比から厩役所に対比されるが，これも2間×3間の柱穴列以外に内部構造は確認されなかった。**33号遺構**の柱穴列は45号の外繋ぎ，61号の厩役所を囲む塀の遺構と考えられる。

49号遺構（第54図，写真34）　P・Q－6区に位置する井戸跡。井戸には階段付の土坑が付設しており，「マイマイ井戸」に類似した形状となる。土坑の埋土は粘性の強い湿った土で最下部では銀杏の葉がそのままの状態で出土した。また，底面は鉄分が凝結して赤く硬化していた。このような土壌のため有機物の保存状態が極めて良く，木製品，やきもの，玩具などが大量に出土した。遺構の年代は，幕末の絵図に描かれた米蔵の掛塀（18号遺構）の土台基礎の切石が遺構埋土に陥没した状態で確認されていることから，遺構の年代の下限は1860年頃と推定される。

また，上限年代は梅の御殿に後続する年代が想定されるが明確ではない。年代決定に関する遺物としては，再興九谷の民山窯（1922～44年）の碗と底面に纏印の墨書（前田慶寧の印）がある鳥の餌入が出土している。

50号遺構　調査区南西端に位置する築山。築山は9ラインセクションの土層観察から18世紀代の厩の時期から造成されたことは確実であるが，幕末にはさらに東側に張り出して50号遺構が造成された。築山はローム質の土と黒色土を版築状に交互に積み上げて築いている。また中央部では南北方向に走る浅い溝状の遺構が確認された。溝状遺構の傾斜した部分では階段状の造りだしが検出されている。これは，絵図との対比によると調査区南西に隣接した建物に接続している道の遺構と考えられる。

81号遺構（第53図）　K－14区に位置する壷埋納遺構。白磁の小形壷を埋納した上に礎石状の石を据えた遺構である。壷の内部からは遺物は全く出土しなかったので，その性格は明かにしえないが，何らかの地鎮を目的とした埋納ではないかと推察される。なお，全体図ではⅧ期に含まれているがⅨ期の遺構である。

この他に明治時代前半の土坑が**2号遺構**（J－5区）と7号遺構（L－5区）の2基検出されている（全体図6）。これらの土坑はいずれも東京第一医院に関係する廃棄物を捨てた土坑である。埋土からは大量の陶磁器や層状に堆積した卵殻に伴って魚骨，獣骨等の自然遺物が出土した。出土遺物に関してはそれぞれ担当の項で解説している。